
妖精と夏休み

百瀬 和海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精と夏休み

【Nコード】

N5924E

【作者名】

百瀬 和海

【あらすじ】

高校生の真治は義父を受け入れられず、精神的疲労に陥っていた。そんな中、義父の故郷である美海^{みあま}部村で一夏を過ごす事となってしまう。慣れない田舎生活。一癖も二癖もある人々との触れ合い。神経質な真治にとって、辛い日々が始まる。しかし、霊妙な森で千夏という不思議な少女と出会い……幻想的な青春物語。

花言葉

真治しんじが日中に花を購入したのは、彼が花を好き好んでいたからではなかった。癒やしとなる物を部屋に置ければ何でも良かったのだ。自室まで持ち帰り、さっそく桃色の花を鼻の近くまで寄せてみる。良い匂いだ。真治はぼつり呟く。

しばらくして、青い花瓶に入れられた花を窓際に置いてみる。花びらが六枚あり、下の三枚だけに深紅色の斑点模様が入っている。桃色の花びらを蒼白な月の灯りが照らしている。神秘的な芸術がそこにはある。

心が綺麗に洗われるようなことなく懐旧の情を抱かせるような。とにかく不思議な気分させられる。真治は頬を綻ばせ満足げに鼻息を鳴らした。

今日の昼間、真治はクラスの女子高生たちが「買い物でストレスを発散する」と言っていたのをふと思い出し、それを頼りに商店街に出掛けた。

結局、真治が買い物から「癒やし」を得ることはなかった。それ程欲しくもない物を無理やり買って、財布の中身を軽くする人間の心情が全く理解できなかった。

せめて「癒やし」となる商品を見つけようとして洒落た雑貨店に足を運んでみた。ぬいぐるみなんて物は趣味ではないし、ペットを買うというのも如何なものか。真治は色々と考えあぐね、気に入った商品がないまま店を後にした。

そして、しょんぼりとしながら商店街の来た道を引き返す途中、花屋に寄った。

普段ならば気にも留めずに店頭を一直線に通り過ぎる筈なのだが、何故かその日だけは猛烈に店内が気になってしまった。花の匂いが手招きしているようだった。

花屋に入るとまず強烈な甘い匂いが鼻腔をまさぐってきた。次に視界に女ばかりが入ってくる。真治はあまり店内には長居したくないと思った。真治にとって老若など関係なく、狭い空間に女ばかりがいるその密度の濃さがいけ好かなかった。

一目見て直感的に「ヒメヒオウギ」という花を買った。何故か惹きつけられるところがあつたので、店内に招いたのはこの花だったのではないかと思った。

ひとまず今は、この花を「癒やし」と位置づけている。真治はヒメヒオウギの花言葉を知らない。別にそんな物に興味は湧かないし、女の美的感覚とやらもさっぱり理解ができない。しかしそれでも、花を鑑賞することは真治にとって十分な気休めになりそうだった。

こつやつて真治が「癒やし」を渴望しているのも、原因は全て階下にいる「義父」にある。

真治の父親は五年程前に病気で他界した。それから四年半後、今からおよそ半年前に道夫みちおがやって来た。

その日、真治は夕食の時間に学校から帰宅した。すると、母親の法子のりこと二人だけだったいつもの食卓に見知らぬ男が座っていた。

男の体格は平均男性よりも大きく、筋肉質というわけではないが決してぜい肉を感じさせない。全体的に角張っている。たくましく生やした顎髭あごひげがたくましさを助長するようだった。

法子はその男、道夫を紹介し、近い内に彼と再婚すると真治に話した。真治は酷くそれを拒絶した。目の前にあつた皿をテーブルから弾き落とし、すぐに自分の部屋に引きこもった。

法子がドアの前で必死に呼び掛けるが真治は頻りに「出ていけ」と叫ぶだけで、部屋からは出てこなかった。道夫は二人のやり取りを見て、その日は黙って帰っていった。

それからしばらくして法子は道夫と再婚をする。結局、真治が二人を心から祝福することはなかった。

そして、三人の家族になってからおよそ三週間。未だに真治と道

夫の間に会話と言える会話は交わされずにいる。たとえ話したとしても、道夫が一方的に話し掛けてくるだけで真治は頷くことさえしない。

真治はどうしても道夫を父親として認めたくない。自分の父親はただひとりしかいないと片意地を張って止まない。

しかし、刻々と道夫が家族として馴染んでくる。それを痛感するたびに真治は頭を抱えた。そんなことをやっている内にストレスが溜まりに溜まってしまった。真治自身も危機感を覚え始め、「癒やし」が必要だと判断した。

真治は窓際に置かれたヒメヒオウギの深紅色の斑点模様をぼうつと眺め続けた。たまにヒメヒオウギを妖しく染める月を仰視したり、月明かりに照らされた自分の青白い手を見つめたりもした。

少しの間だけ目を瞑り深呼吸をする。そうして真治はベッドの中に身を放り込む。夏休みが始まった二週間ほど前から、毎晩そこで物思いに耽る習慣ができてきていた。

下の階から微かに電話のコール音がした。真治は怠惰から電話を取りにいく素振りすらしない。

すぐに電話の音は止み、代わりに法子の声が聞こえてくる。何かを話しているようだったが、すぐに道夫の太い声に切り替わった。

「お袋、どうしたんだ！」そう声を張り上げてから沈黙が訪れる。

「親父が！」

真治がいる部屋は二階だというのに、会話する声が聞こえてきてしまう。それほど道夫の地声は大きい。真治が道夫を嫌う数ある理由のひとつでもある。

それにしても、道夫の父親がどうしたというのだろうか。真治は少しばかり興味を持った。

それから間もなくして、階段を上るスリッパの音が小さく響いてきた。部屋のドアがノックされる。強く叩いたわけではないのだろうが、ひとつひとつの音には苛立ちが入り混じっていた。

「真治、ちょっといい？」法子が部屋の外で言った。

法子だからと、真治は躊躇ためらいなくドアを開けた。しかし、法子の隣には道夫の姿もあつた。間髪入れずに、真治の眉間にしわが寄せられる。

「真治、あいな」

「何でお前がいるんだよ！」道夫の話をかき消すように、真治は怒鳴り散らす。

「真治、ひとまず話だけでも聞いて」法子がその場を取り仕切ろうと懇願する。いつもの気の強そうなぴんと張った眉や鋭い目尻はどこかへと消えてしまっている。

「そいつが部屋から出ていったら、聞いてやるよ」真治が乱暴な言い方をする。

「でも……」と法子が言い淀んだ時、隣から道夫が「最初で最後の頼みを聞いてくれ」と落ち着き払った声を放ってきた。

真治はうるさい道夫が奇妙な面もちをしていることに驚いた。これはもしかすると、本当に緊急事態となっているのではないか。

ちっ。真治はわざとらしく舌打ちをし、「一回だけだからな」と不服そうに言った。

道夫の返事を待たずにベッドに座り込んだ。格好つけて窓際のヒメヒオウギに視線を向けながら聞く体勢を見せつける。

そして、その様子を伺いながら道夫がおもむろに口を開いた。「今年の夏休みは、俺の故郷で過ごしてくれ」

「は？」真治がきよとんとした顔をする。

「何で俺がお前の故郷なん」

「それはな……」真治の話を無視し、道夫は事情を説明し始めた。

道夫の故郷である美海部村みあまに住む道夫の両親は小さな宿をやっているそうだ。所が、道夫の父親が風邪で体調を崩してしまったという。

不幸というのは重なり易いようで、ちょうど二人の従業員が休暇を取っている最中だった。他に宿に残っているのは道夫の母親と数

人の従業員のみに、とてもそれで営業が持続できるとは思えない。

場所が田舎だけに若者などの人手も足りない。どうしても男である道夫の手が必要なのだと頼まれた。そこで道夫は有給休暇を取り、真治ら家族を連れて故郷に帰省することに決めたらしい。

そんなわけで、真治らは明朝には電車に乗って道夫の故郷である「美海部村」に向かわなければならぬ。

「そんなもの、やってられるか」真治は目を三角にし、意地でも行く気がないことをアピールする。

「言うことを聞かずに言っただよな？」道夫の頬が緩んでいる。

「確かに言っただけど……」真治がぼやくように小声で言う。しまった、と思っていた。

「男に二言はなしにしてくれよ？ お前、男だろ？」道夫の言葉に、真治は完全に黙り込んでしまう。選択の余地を完全に摘まれてしまった。

「それじゃあ、朝早いから、さっさと身支度を済ませてくれよ」口元を若干弛緩させながら言うと、道夫は部屋を去っていった。父親が病床に臥している人間の様子にはとても見えなかった。

法子はまだ部屋に残り、こちらを見つめている。真治ではなく間近にあるヒメヒオウギに視線がいつているようだ。「その花、どうしたの？」

「今日買った」顔を背けながら真治は素っ気なく答える。

「あんだ、そういう趣味あったっけ？」

「今日から趣味になった」

「女の子にでも買ったの？」法子は淡々と訊いてくる。

「いや」真治は濁ませながら答える。

「ヒメヒオウギの花言葉、知ってる？」

「いや」

「あんだ、よく買ったわね」

「なんとなく、気に入ったんだ」

それ以上のことは訊かず、法子も部屋を出ていった。去り際に「

美海部村、案外良いことあるかも知れないわよ」と意味ありげなことを言ってきた。

「『良い知らせ』、よ」

小さな終わり

真治たちが乗っている電車はあまりに古く錆びれており、頻りに激しく揺れてはその都度、鉄の擦れる音を響かせていた。

真治の隣に法子、そして正面に道夫が座っている。いつもならばよく喋る道夫だが、電車内では口に糸を紡いでいる。自分の故郷に無理やり連れていくことになった真治と法子に申し訳ないと思っっているのだろうか。それに連動され、真治と法子も黙り込んでいる。

しばらくして、真治が席を立ち上がった。法子は「危ないから」と注意した。

「ちよつとトイレに行ってくるだけだつて」
「すぐに戻って来るのよ」

真治は返事をせず、早足気味にその場から離れた。そのまましばらく席に戻るつもりはなかった。道夫といるのが嫌だったのは当然ながら、閑静とした空間があまりにも息苦しかった。

電車はローカル線らしくゆっくりと走るが、頻りに大きく巨体を揺らす。真治は想像していた以上に車内を歩くのに苦労した。

後ろの車両に辿り着き、ふと付近の空席の窓から外の風景を覗いてみた。窓の外に見えたのは緑色の水田。畦道あぜみちで綺麗な長方形に仕切られた水田が辺り一面にただ延々と広がっている。たまに申し訳程度に車の走っていない細い車道や赤茶けた鉄橋越しに小さな川などが現れた。

ただ、それだけだった。まさに田舎の代名詞と言えた。

真治は元からそれ程の期待は寄せていなかったが、虚しい気持ちになった。せつかくの貴重な高校二年生の夏休みをこんな田舎で潰すのかと真治は自嘲にも似た笑みを浮かべる。

「美海部の風景は嫌いですか？」背後から女性の声が聞こえた。

真治はすぐに振り返る。そこにいたのは二十歳前後の背が高い黒髪の女性だった。目鼻の筋がキリツとしており、柔和で美形な顔立

ち。黒い長髪がよく似合う。

ストライプのチュニツクシャツとルーズネックTシャツを組み合わせて、下にはレギンスを履いている。

細過ぎず太過ぎずなバランスの整った足がすらーっと伸びている。背は真治と同じくらいで百六十台後半はあると思われる。

この女性がモデルだと言われても何ら疑う余地はなかった。

「あ、いきなりすみません。そこは私の席なので、ひとまず座って下さい」

そう言つて女性は空席に座った。言われるままに真治も女性の向かいの席に腰を下ろした。椅子が先程よりもずっと固く感じた。

「美海部は田んぼだらけで嫌になりませんか？」黒髪の女性が優しく柔和な口調で訊いてくる。

「は、はい」真治は小さな声で答える。

「みんなそう言つんです。でも、私は結構好きなんですけどね、こういう風景」窓の外をずっと見つめながら黒髪の女性は言う。

真治はそんな黒髪の女性をじろじろと観察する。真っ直ぐに垂らした黒髪。胸元まであり長過ぎるのではないかと思う程だが、この女性の場合だとそれが様になっている。おそらく彼女は茶髪にして変にいじるよりも、黒髪でありのままにしている方が似合うタイプなのだろう。

鮮やかな赤い唇に目がいく。色合いも去ることながら潤い具合がやたらと気になる。メイクもナチュラルにこなしており、素顔を前面に出している感じがある。

本物の美人とは彼女のような女性を言うのかも知れない。頬を紅潮させながら真治は思った。

「あ、すみません。一方的に話してしまって」黒髪の女性は申し訳なさそうに頭を下げる。その際に艶のあるしなやかな黒髪が細かくふわりと舞い、女性の小さな肩に落ち着いた。

それが気になってしまい、女性の言葉があまり頭に入ってこなかった。ひとまず「別に良いですよ」と臨機応変な返事しておく。

黒髪の女性が頭を持ち上げる。さらさらとした黒髪から散布されるレモンの微香が真治の鼻を刺激する。

真治は黒髪の女性の側にいることに内心喜んでいたが、自分と女性が全くの赤の他人であることが気になった。そもそも、何故この女性が話し掛けてきたのだろうか。

しかし、真治には法子と道夫のいる席には戻りたくない気持ちもあった。頭の中で二つを一生懸命に比べてみる。

見知らぬ美人と見知り過ぎな道夫。どちらが危険だろうか？ 真治が答えを出すのに差して時間は要らなかった。

決まっている。見知らぬ美人の側にしよう。

「あの、美海部の人ですか？」 滞在を長引かせたいが為に自然と真治の口から漏れた言葉だった。

「美海部は四年ぶりなんです。懐かしいなあ……」 女性はまた窓の外の広大な田園を眺めながら誰に言ったかも知れない言い方をした。おそらく、四年ぶりに帰る美海部の思い出をゆっくりと振り返っているのだろう。

そうになると、黒髪の女性の目の前にただ座っている真治は居心地の悪いものだった。やはり戻ろうかと思う。

「あ、すみません」 黒髪の女性がまた真治に謝る。その際にまた黒髪が揺れ、レモンの微香が鼻を刺激した。真治は居心地の悪さを忘れ、またここに滞在しようかと決意する。

その時、真治の背後から男の声が聞こえてきた。「おい、清花^{さやか}」 後ろへ振り返ると身長が百八センチはある長身の少年が不機嫌そうな顔で立っていた。真治と大体同い年くらいのようにだ。しかし、少年はモデルのような体型と顔をしている。

ドクロがプリントされた黒いシャツに、じゃらじゃらとした重そうなペンダント。ブラウンに染めた髪をワックスで立たせており、険悪な目つきをしている。

ひとつひとつのパーツに注目してみれば、夜の都会を徘徊しているような若者だった。しかし、全体で見ると何故か美形な少年に

感じてしまう。とても不思議な格好良さだ。

「おい、清花。このチビ誰？」長身の少年はそう言いながら座席にきよとんと座る真治を見下ろした。

真治は同じ年くらいの少年にチビと言われたことが気に食わなかった。長身の少年を真下から見上げる形となっている真治にはそれが余計に嫌悪感を生む行為となっていた。

清花と呼ばれた黒髪の女性は長身の少年と真治の事を同時に見ながら困ったようにあたふたしている。「えっと……名前はまだ知らないんだけどね」

「はあ？ 何それ？」長身の少年が眉間にしわを寄せながら言う。その際にまた真治の方へ視線を下げた。真治は目を合わせないようにうつむく。

「美海部の風景を嫌々そうに見てたから……。つい、ね」清花は自分よりも明らかに年下の少年に向かって気を使っているようだった。真治に対しての態度を考慮すれば、元からそんな性格なのかも知れない。

寧ろ、年上の清花に向かってため口を利く少年に問題があるのではないか。真治はうつむいたまま密かに頬を膨らませた。

「おい、お前」長身の少年が真治に対して言うてくる。

ゆっくりと顔を上げた真治は無表情な顔をしており、至って冷静な様を装っていた。だが、鼓動は凄まじい勢いで乱れていた。

真治は強気な発言をしたかったが、口を通り抜けた時には言葉は自然と敬語に変換されていた。「はい、何ですか」

真治は無表情だが自然と体が小刻みに震えている。それを見てか、長身の少年は小さく「ちっ」と舌を鳴らした。「お前さ、いくら清花が緩いからって、何でいつまでもここにいるの？ 清花があまりに綺麗だからって、狙ってるのか？」

「ちよつと、隼人！」清花は急いで隼人という長身の少年に注意する。だが清花のか細い声の所為か元々の温厚な性格の所為かあまり迫力を感じられない。

「いえ」真治は申し訳なさそうに小声でそれだけしか言えなかった。「まあ、違うなら違うで良いんだけどさ。邪魔だから退いてくれよ」隼人はつり目を更に細めながら真治のことを指差した。右手の人差し指にはめられたシルバリングが光る。「そこさ、俺の席」

真治は下を向いたまま座席から立ち上がる。立って並んでみると隼人の長身に改めて驚かされた。

席から退くとすぐに隼人が空席に座った。もう真治の顔など見てはいない。

清花はまごまごしながら隼人の顔を見る。隼人は「文句あるのかよ」と言いたげに目を細めて口元にしわを作った。

清花がつつむき気味に真治に眼差しを向ける。「すみません。私の」

「真治！」

清花の声を遮るように真治の背後から甲高い声が聞こえてきた。声の主は法子だった。なかなか帰ってこない真治を探しに来たのだらう。

「真治、何やってるの！」

「いや、ちよつと気晴ら」

「良いから、来なさい！」

法子の怒鳴り声は普段から聞き慣れているのに真治はいつも体が震えるように反応してしまう。

法子は鬼のような形相で真治のＴシャツの袖を引っ張った。「どうも、うちの真治がご迷惑をお掛けしました」清花と隼人に頭を下げる。その際に真治の頭を掴み、無理やり頭を下げさせた。

「いえ、そんな。私が話し掛けたからで……」

「いえ、どうせうちの馬鹿息子が変なことを言ったんですよ。本当にご迷惑をお掛けしました」法子は再び頭を下げ、真治のＴシャツを凄まじい力で引っ張り、最後尾の車両を後にした。

足をばたつかせながら法子に引っ張られていた際、真治の眼は嘲笑う隼人の姿を捉えていた。清花はやはり気まずそうに隼人を注意

していた。

「もう良いから！」清花や隼人が見えなくなった頃、眉間にしわを寄せながら真治が言った。法子は真治のＴシャツから手を離す。

「もう子供扱いするなよ。それと、どんな馬鹿力してるんだよ」

「あなた、まだまだ十分子供よ。それと、あなたが力無さ過ぎなだけだから」法子は淡々とした口調で真治を負かす。真治はそれきり黙り込んでしまう。

やっぱり、美人は美青年としか付き合わないんだな……。向き合いたくなくった現実に直面し、真治はうつむく。

こうして真治の小さな恋は終了した。

元の席に戻るまでの間、真治は車内の乗客達を観察していた。真治と同年代の若者などいない。若者とと言えるのは親に連れられた幼稚園児くらいの子供だけだった。これから行く美海部村がどれだけの田舎なのかを物語っているのだろう。

覚悟だとかいうものがあればこの苦痛に耐えられるのかも知れない。しかし、そんなものは自分にはない。僅か一夜の間に襲ってきた強制参加の出来事。悩み考える時間すら与えられなかった。

ならば、せめて楽しいことを見つけよう。恋などすれば信じられない程に田舎生活が充実したものになるかも知れない。そう思っていた真治だが、世の中はそんなに都合よくは回っていないと思いきらされた。

「よお、どうしたんだ？」先程まであんなに別人のように黙り込んでいた道夫が元の快活な声で言ってきた。

「真治が後ろの車両で遊んで、見知らぬカップルに迷惑掛けてたのよ」そう言々と法子はまた真治を睨みつける。

「へえ。真治、お前がか？」

真治は返事をしない。道夫からの問いには徹底的に答えないうつもりであった。

「ちえ、やっぱり俺には返事なしかよ」

「そう言えば、珍しいのよ。そのカップル、かなり若かったわ。大学生と高校生くらいかしら。二人ともモデルみたいだったのよ」

まるで井戸端会議でもしているかのように法子はスキャンダルな話題を持ち掛けた。

「こんな田舎に、そんな若いカップルが来るとは。随分と老けた若者カップルだな」道夫がげらげらと哄笑する。

真治は日本茶の入ったペットボトルを口に含み、ずっと窓の外を見ていることで会話に参加しない意思を暗示する。

「真治。お前、そんな若者カップルに何してたんだよ？」

一番触れられなくなかったことを道夫に訊かれた。真治は飲み終わったペットボトルを口から離さないようにした。

「私が見た限りだと、真治が若い女の子の前に立ちながら、その子のことだけを」

「うるせえ！」真治は大声で掻き消そうとする。

「真治、お前その女の子のこと好きになって凝視してたんだろ？」
全てを察した道夫が子供のようにな无邪気に笑って真治を問い詰める。

真治は、本来の「無視」を徹底して貫こうとする。

「お前さ、そうやって黙ってたら俺の言ったことが正解だった、で決まりだからな？」道夫は実に愉快そうににやついている。

「ちげえーよ！」真治が無我夢中に大声を出す。

それと同時に、車内の乗客達の話し声が一斉に途絶える。道夫と法子は口をぽかんと開けながら二人して顔を合わせる。そして、にやにやと笑い出した。

「ああ。真治、悪かったな」

道夫が謝る姿など初めて見た。あまりに不意の出来事だった。どうすれば良いか分からず、真治はただ道夫に視線を集中し続けた。

「お前、凶星だったんだろ？ 顔が照れてるぞ！ 別に恥ずかしがることないじゃんか！ なあ？ その女の子、すげえ可愛かったのか？ いやあ、青春だな！」

ひとりでマシンガンのように話す道夫に真治は目を剥き、思った。
てめえ、うぜえ、だまれ。

妖精

ローカル電車に乗ってから数時間が経ち、ようやく田園に囲まれた美海部駅に到着した。

窓から覗く限り、ホームには数人の姿しか確認出来ない。皆の平均寿命はかなり高いことが一目で分かる。

服装もゆるゆるのズボンにTシャツといった感じで、都会育ちの真治にはある意味新鮮だった。

心地よくは無い「新鮮」に真治は溜め息を漏らす。

「お前、田舎を馬鹿にしすぎだぞ？」

何と言われようが、真治が道夫に反応する事はない。ふてくされた顔をする真治を見て、道夫は法子に目線で合図を送る。

「真治、田舎は嫌いなのか？」

「ああ」

「でも、私達はしばらくここで暮らさないといけないのよ？ 今からそんなに嫌がってたら、楽しい物も楽しくなくなるわよ？」

法子が真治に言い聞かせている時、道夫は網棚の上からポストンバッグを下ろし始めていた。

真治が窓の外を見ると、先程の清花と隼人が改札口を通っている姿が見えた。

何年も前の事を思い起こすように、真治は二人を寂しげに見つめる。そんな真治を見て、法子はポストンバッグを下ろす道夫を手伝いだした。

隼人は黒と白の重そうなポストンバッグを両手に下げている。逆に清花は両手に何も持っていない。

わがままな印象を受けた隼人だが、そんな姿を見てしまうと随分と印象が変わってくる。真治は心の中で少しだけ反省した。

モテる奴は顔やスタイルだけじゃないのか……。

申し訳なさそうに下を向きながら歩く清花と、下を向きながらふ

らつくように歩く隼人。二人は駅から出て、死角へと消えて行った。真治は道夫と法子の方へ視線を向けた。ポストンバッグを両手に下げ、歩き始めようとしている。

声を掛けようと真治は口を開きかける。

「真治、あんたも手伝いなさい！ 私のバッグをひとつ持つのよ」
法子の怒声に真治はがっくりとうなだれる。

美海部駅の改札機を通り抜ける時、白髪の駅員が客を気にせずテレビを観ている姿があった。

無人に近い駅に驚かされた真治だが、改札口から出た途端更に愕然とさせられた。田んぼと山によって風景は眩しい緑に満たされていた。

駅のすぐ近くに鼻面を突き出した古びれたバスが停まっていた。

都会では見ないデザインと会社名だった。ちょうど清花と隼人がバスに乗り込む姿が真治から見えた。

真治がバス停に向かおうとした時、バスは砂埃を巻き起こしながら陽炎の中へ去って行ってしまった。

一瞬、左肘を張って窓に寄りかかる隼人の姿が目映った。隼人の方はこちらの存在に気付いていないようだった。

真治は、バス停で次のバスを待とうと法子に提案した。しかし道夫は「バスは一日に四往復しかないから、次は三時間近く来ない」と言った。

不本意ではあったが、ひたすら遠くまで続く道路を歩く事となった。空は曇っており、真治は美海部に冷たく出迎えられたような気がした。

道路は先程電車を通った線路に沿っており、向こう側には深緑の山並みと村落が見える。

「そっちに宿があったら楽なんだけどな、俺んちの宿はあっちだ」
山辺にある村落を見つめる真治だったが、道夫は真っ直ぐに延び

た道路の先を指差す。陽炎の所為で道路の少し先までしか見えず、いつまでも目的地に辿り着けない気がした。

道路を歩き始めて二十分くらいが経った頃。空を覆ってた雲が何処かへと流れ去り、先程まで黒く見えていた道路が突如灰色の姿を露わにした。と同時に、強烈な日差しが真治たち一家に差してきた。

「暑ー！」

「あちー！」

踏み切り前で立ち止まり、真治と道夫が同時に声を出した。自然とお互いの顔を見合わせる。

道夫は歯を剥き出してせせら笑っている。真治は舌打ちをして法子の方へ顔を逸らす。法子の口元も笑っていた。

真治は何事も無かったかのように、踏み切りを通り抜け、そそくさとひとりで先頭を歩き出す。

しばらく先頭を早足で歩き続けた真治だが、疲れてきた所為で足取りが段々と遅くなってきていた。

遙か遠くまで真っ直ぐに続くアスファルト。陽炎が立ち、その境界線が歪んでいて分からない。

直線に並ぶ電柱、青々と稲を実らせた田んぼ、深緑の山々、雲一つ無い青空。大自然ばかりが視界に入る。快晴の所為か風の音すらせず、相変わらず辺りは虫の鳴き声ばかりが響き渡っている。まるで人が感じられない。

真治は今頃になって右肩に下げたポストンバッグを重く感じ始める。ポストンバッグその物はそれ程重くはないが、重さで肩にぐいぐいと食い込んでくる。

真夏の陽射しと、終わりの見えない焦燥感と、右肩の痛みに耐えられなくなり、真治はアスファルトに座り込む。座り込んだは良いが、日差しによって温められたアスファルトの熱さに耐えられなくなり、真治はすぐに飛び上がるように立ち上がった。

その時、ぼろぼろの赤いバスがゆっくりと真治たちの横を通り抜けていった。

「おい、次のバスじゃんか！ 一日に四往復しか来ないんじゃないかなったのかよ！」道夫達に向かつて大声を出す。

「いやあ、まさかこんな早く次のがあるとはなあ」道夫はそう言つて、わざとらしく首を傾げてみせた。

「やってらんねえ」そう言つて真治はしゃがみ込む。

白いＴシャツが体にベツタリと張り付く。真治はＴシャツを引つ張り、上下させて風を起こそうとするが全然涼しくはならず、余計に汗が噴き出してくる。

「おいおい、俺はポストンバッグ二つ持ってるけど、平気だぞ？ 男ならもうちょい根性出せよ」

道夫が嘆くように言つてきたが、真治は決して返事を返さなかつた。そんな真治を見て、法子は小さな溜め息を吐く。

法子はポストンバッグから大きめのスポーツタオルを取り出し、真治に手渡す。

真治はタオルで額とこめかみの汗を拭つた。いくら拭いても汗は収まらない。諦めたようにスポーツタオルを首に掛け、ポストンバッグを持って立ち上がる。

先に歩く道夫と法子を無言で追い抜き、再び先頭を歩き始める。そんな真治の姿を見た道夫と法子は、顔を合わせて笑つた。

美海部に来てから一時間程が経ち、ようやく村民を目にした。七十がらみの老婦が、道路沿いに設置された木造のベンチで休んでいる。

長袖のシャツにゆるゆるな長ズボン、長靴、大きな日除けの帽子と軍手を装着している。見るからに田舎を感じさせる農婦に真治は嫌悪感を抱いた。

道夫は老婦に近付いて行き、一礼をして何かを話し始めた。それを少し離れた道路から、真治と法子が眺めている。

「あんな帽子被れば、この暑さに耐えられるかしら。私達もあの帽子欲しいわね」

法子がハンカチで額の汗を拭いながら、独り言のように呟いた。

「あんな格好、ダサいだろ」その言葉を聞き、法子ははたと鋭い目つきで真治を睨みつけた。

「ああいう農家の人のお陰でご飯を食べれてるの、分かっているの！」
「わ、分かったよ、ごめん」真治は顔をしかめながら謝った。法子に対しては弱腰になってしまう。

「あんだ、都会生活に慣れすぎなのよ。たまには田舎に暮らして、自然の有り難みを知りなさい」

法子が真治に説教をしていると、道夫が老婦にまた一礼をしてから戻ってきた。道夫の口元がにやけていた。

「田舎は狭くて、みんなが知り合いなんだ」

それからまた、真治らは道路を歩き続けた。今度は小さなトラックが通り過ぎて行った。荷台には大量の雑草や鋤、熊手などの農具が乗せてあった。

「まだ宿に着かないのかよ。どこにあるんだよお」

独り言のように真治がぶつぶつと文句を漏らし始める。すると、道夫がすぐ目の前にある森林が広がった山を指差す。

「もう、そこだからな」

真治は無表情を装っていたが、自分の輪郭が若干緩んでいることに気付いていなかった。

『ごみの投棄禁止！みんなの自然を守ろう』

『猪・猿出没注意』

擬人化された空き缶とごみ箱、猪や猿の可愛いイラストが入ったぼろぼろの看板を、森林に囲まれた薄暗い山道で見つけた。

長い年月の所為で看板の塗装が何ヶ所も剥げており、ぼつてんまークの目から涙を流す空き缶とごみ箱のイラストが、余計に虚しさ
に拍車を掛ける。如何にも田舎らしいな、と真治は呆れた。

道夫がひとりで空き缶とごみ箱のイラストに近付き、空き缶を指
差した。

「あら、どうしたの？」

「この空き缶のデコの所見えるか？」

道夫が指差した、イラストの額に当たる部分を二人は凝視する。よく見ると薄く文字が書いてある。何と書いてあるかは薄すぎて読み取れない。

「これ、俺がガキの頃に書いた落書きなんだ」自慢気に胸を張って言った。

真治は、一瞬でも気になって凝視してしまった自分を恥じた。

それから、辛うじて人が通れるようになった寂然たる山路を再び登り始めた。

固い土の道はでこぼこになっており、更には道そのものが急斜面で歩きにくい。先程まで歩いていたアスファルトの道路が恋しく感じてくる。

日差しは森林に遮られ、辺り一面が薄暗い。どこからともなく虫の鳴き声が聞こえた。この森林地帯の広さを物語っているようだった。

横倒しになっている大木や木の葉の隙間から僅かに漏れる日差しを、真治は退屈そうに見て歩いていた。

ジーーーーー……

シャシャシャシャシャ……

どこからともなくセミの鳴き声が聞こえてくる。真治にふと疑問が浮かんだ。

「あのさ、セミの鳴き声ってこんなだっけ？」

「そう言えば、聞き慣れない鳴き声よね。確かミンミンミンって感じよね？」

真治は法子に尋ねてみたが、しっかりとした解答は返ってこなかった。そんな中、道夫が子供のように目を輝かせていた。

「それはだな」

「まあ、どうでも良いや」真治は道夫の話を遮り、先頭を歩き出してしまふ。

「なあなあ、鳴き声の事教えてやるからさ。遠慮するなつて、なあ？」

近付いてきては騒がしい道夫に対し、真治はあくまでも「無視」を貫く。首に掛けたタオルで額の汗を拭い始める。ちょうどタオルで道夫の視線が隠れる。

絶対に教えたい道夫と絶対に教わりたくない真治。まるで太陽と月のように、絶対に交じり合わない二人。

それを見て、法子はまた溜め息を漏らす。道夫も諦めたのか、先頭を歩く真治の横から離れて法子と並ぶ。

「なあ、法子ー！ セミの鳴き声の事、教えてやろうかー！」

わざとらしく大きめな声で、隣の法子に話しかける道夫。地声が大きい所為で、一度は苦笑して耳を塞ぎそうになった法子だが、道夫の真意を理解して笑い出す。

「ええ、聞きたいわー！」

法子もわざとらしく大声を出す。気合いを入れ過ぎた所為か、道夫の方が耳を塞いでしまう。

そんな二人の大声を聞き、先頭を歩く真治は眉間にしわを寄せた。いた。

もしもここで「大声を出すな」と言った所で、どうせ道夫達は「二人で会話してるだけだ」と言い返して来るだろう。それを分かっていた真治は、ただ黙り込む事しか出来なかった。

ジー……

「さつきから聞こえる『シャシャシャ』って鳴き声は何なのー！」

シャシャシャシャ……

法子が言ったタイミングに合わせてるように、またセミの鳴き声が聞こえた。

「あれはなあ、クマゼミって言うんだー！ 俺らの住んでる東京にも生息してる事はしてるんだけどな、東京の南東の方に集中してるんだー！」

「なるほどー！ 私達が住んでる所から、微妙にズレてるのねー！」

口の近くで手のメガホンを作り、わざとらしく大声で棒読みをする二人。

「じゃあ、私達が普段よく聞いている『ミンミンミン』ってのは、何なのー！」

「あれはな、ミンミンゼミって言うんだー！」

「東京どころか、神奈川とか千葉とかでも昼間によく聞くよねー！
ここら辺で聞かないのはどうしてー！」

段々と真治は苛立ってきていた。だが決して反応しないように、先頭を歩き続ける。

「ミンミンゼミってのは関東地域には沢山生息していて、関東人はセミの鳴き声と言えば『ミンミン』が当たり前だと思ってる！でもな、ミンミンゼミは生息地域が関東に特別集中してるだけで、本当は関東以外には、そんなに生息してないんだー！ だから、ミンミンゼミってのは全国的に見ると、マイナーなセミなんだぞー！」

「えー、そうなのねー！」

「次いでに、豆知識だー！ ミンミンゼミとクマゼミの鳴き声は、人間の耳じゃ違うように聞こえるけどな、本当はベースの音が同じなんだー！ クマゼミの鳴き声を遅く再生すると、ミンミンゼミの鳴き声になるそうぞー！」

「えー、うそー！ 信じられない！ 道夫さんって物知りー！」

「いやいや、俺の親父が」

「もう分かったよー！」

道夫の話を遮って真治の大声が会話に割り込んできた。真治は立ち止まりはしたが、振り返る事はなかった。

「えらく良い勉強になった。ああ、なったな。いつか夏休みの宿題にでも使ってやるよ」

そう言って、真治はまた先頭を歩き始める。坂道だというのに少し歩調が速くなり、後ろの二人をどんどん突き離していく。

そんな真治の背中を見て道夫と法子はお互いの顔を見合い、口を尖らせながら首を傾げた。

真夏の直射日光を遮ってくれるという美点を持つ森林地帯だったが、体力の消耗を増やす激しい坂道、倒れた大木や枝に躓^{つまづ}かないかと神経を研ぎ澄まさなければならぬ等の難点があった。

ここにきて、体に蓄積された疲労に真治が悲鳴を上げ、付近の大きな石に腰を下ろした。

「無理して早く歩くからだぞ」

息を荒くして道夫が言う。しかし、真治よりは明らかに体力の余裕が窺える。額から大量の汗が垂れてきては輪郭に沿って伝い、顎へと集まり始めている。

元から道夫の顔を見ないようにしている真治だが、道夫の顎で光り輝く雫が目に障る。逸らそうとするのだが、視線がどうしてもそこへと戻ってきてしまう。

「汗拭けよ」と言えれば……。

真治は思い切って法子の方を凝視した。法子も息は荒々しいが、額にはそれ程の汗はかいていない。真治に比べれば、こちらも明らかに元気が残っているのが窺える。

女というのは、何で汗をあまりかかない人間が多いのだろうか？

真治は高校の体育の授業で女子を見るたびに疑問に思っていた。しかし、そんな事を口にしたら、無駄に知識のあるうるさい人間が割り込んでくるだろう。

「どうして女の事までそんなに詳しいんだよ」と道夫に言っただけは、「お前が疎すぎるんだよ」と茶化される自分の姿までもが、容易に想像出来てしまう。

真治は、込み上げてくる疑問を胸の中に留めた。

しかし、真治に熟視された法子は目をぱちくりとさせ、顔を見てくる。

「喉渴いた」そう言いたかつたんだ、と言いつくするように真治は嘆いた。

「そうね。喉渴いちゃったわね。こんな事なら、もっと余分にペットボトル買えば良かったわ」

水田近くを歩いていた時には、まだ真治らは温かくなったペットボトルを所持していた。しかし、真夏の陽射しを直接受けて大量の汗をかいた所為で、三人ともペットボトルの中身を飲み干してしまっただ。

ここまでの道中で、コンビニや自動販売機は見掛けなかった。今、真治らには水分を補給する手段が無い。

「もうちょっと我慢しろ。後少しなんだ」そう言って、道夫は先頭を歩き始めた。

真治は肩で息をしながら、法子と並んで道夫の後に付いていく。

少し森を進むと、道沿いに高さ三メートル程の小さな滝が見えた。檜ひのきで造られた懸樋かけいからは、音もなく水が流れ落ちては浅川に合流している。

ふらふらになりながらも、真治は早足で小さな滝に近付いた。間近に行くと、滝の音が僅かに聞こえるようになった。

金属の蛇口を伝ってくる水とは違う、自然を伝う水の音色。

静寂で薄暗い森の中、四方八方から聴こえる虫の音、浅川のせせらぎ、滝の音、それらが静かに交響曲を奏でる。

それは、昨晚真治がやった花と月明かりによる「癒やし」に通じる所があった。

真治は倉卒な呼吸をしながらも、静かに懸樋の先端と浅川を繋ぐ水の垂線に両手を入れた。水の垂線は断たれ、両手で作られた盆へと入っては小さく水飛沫を飛ばす。盆を溢れた水は盆の外を伝って、浅川へと垂れていく。

美海部に来てから初めての「冷さ」を掌が感じる。真治は勢いよく水を口に含んだ。

喉を通して体全体へと広がっていく冷さ。体が喜んでいるのが分かる。

真治は無我夢中で、水を飲む作業を何度も繰り返す。

「この小さな滝は、『ゴクリ滝』ってみんなが勝手に呼んでるんだ。まあ、本名は知らないけどな」

真治は道夫の話の聞かずに、顔から出た汗を水で洗い流している。洗い終わり、顔から垂れる水を腰に引つ掛けていたタオルで拭き取った。

次いで、道夫と法子も水を飲み始める。

「ふう」小さく溜め息を吐き、高く聳える木々を見上げる。

真治達よりも何倍も背の高い木々。日を遮る木の葉達は明るく光りながら、清風に吹かれ、小さく揺れては木漏れ日の形を頻りに変化させる。

ジー……

シャシャシャシャ……

クマゼミの鳴き声が極自然と入り込んでくる。真治は耳を傾けては目を閉じる。クマゼミの鳴き声が、綺麗な音色に聴こえ始める。結構良いかもな。こんなのも。

「おい、ポーっとしてないで、そろそろ行くぞ！ 後は下り坂ばかりだ！」

自然の中に「癒やし」を感じては意識を溶け込ませていた真治を、道夫が現実へ引き戻した。

「ちっ」真治は顔を歪ませ、舌打ちをした。

しばらく下り坂を進むと、壮大に広がった田園を俯瞰できる、立派な石橋に差し掛かった。どうやら山麓近くまで来ているようだ。

「ほら、あそこが美海部村だ。目的の宿もあの中にある」

道夫が指差した先には、小さな村落があった。

付近には水田や棚田などが多くあるが、緑色だらけの今までと違って、しっかりと多彩な色が見受けられる。真治はほっと胸を撫で下ろす。

真治はふと、村落からは少し離れた田園の方角を見た。

「ん？」今まで見てきた田園との違いは一切分からない真治だが、ひとつだけ見覚えのある物を発見する。

「真治、どうしたの？」法子が尋ねる。口を半開きにしながら、一

点を眺め続ける真治が気になった。

「あれ」

「あれ？」

真治が指差した先に、地平線と重なりかけて分かりにくい線路が僅かに見える。それを辿って行くと、見覚えのある駅が姿を見せる。

「ちよつと、あれって、もしかして」

真治に次いで、法子も口を半開きにして呆然とする。それに気付いた道夫が、二人の背後から近付いてくる。

「おいおい、お前らどうしたんだ？」

真治と法子は、道夫の方へ素早く振り向き、鋭い目つきで睨みつけた。

「ちよつと、あれはどういう事？」真治に代わって、法子が強い口調で尋ねる。

「あちゃー」道夫の口から声が漏れた。

「ああ、あれはさつき電車で来た美海部駅だ！」やけ自棄になったのか、道夫は堂々と胸を張った。

「じゃあ、美海部村って、線路沿いの道から見えてた麓ふもとの村落の事だったの？」

道夫は村が見えた時には、「あれじゃない」と否定していた。

「いやあ、だって、宿に荷物置いてから観光しようって言っても、真治とか来ないだろ」

そう言っただけで見てくる道夫に対し、真治は歯を見せてから舌打ちをしてみせた。

「それにしたって、中身少ないけどポストンバッグを持つてるのよ！ 真治だって喉が渴いて倒れそうだったのに！ もう、あなたには常識つてもものがないの！！」

法子が顔を真っ赤にしてまくし立てた所為か、道夫は親に叱られた子供のようにうつむいてしまった。

法子が先頭にならずかかずかと歩き出した。無言になりながら道

夫が後を付いて行く。

真治はふと、麓とは逆の方向を見下ろした。木の葉の隙間から小さな川が見える。ちょうど川の真上には木が無いのか、川面が日光を反射して、ダイヤモンドのように光り輝いている。

そんな川の岸边には白い小石と混ざるように、白い衣服を身に纏まとった人影があった。

女の子？

全身が白く、膝元の辺りまで伸びた裾が風に合わせて靡なびいている。恐らくは白いワンピースだろうか。年齢も真治に近い少女だと推測する。

風に飛ばされないように右手で白い帽子を、左手でワンピースの裾の辺を押さえている。帽子から肩にかけて黒髪が出ており、こちらにも風に合わせて靡なびいている。

真治のいる所からだ角度が急なのか、少女の顔は帽子の影に隠れてしまっている。

あの雰囲気だから、顔も可愛いかも……。

真治は頬を赤く染めながら、小さく見える少女の姿をぼうつと眺めていた。

川や白い小石、斜めに差し込む木漏れ日、虫の鳴き声、視界に入り込んでくる木の葉。自然の中に溶け込むかのように少女がそこに立っている。

あの子は、川原の妖精？ いやいや、俺、何考えてるんだ。

そう思いながらも少女から目を離せず、魅せられる真治。

「おい、真治！ とつとと来いよ！ 俺が怒られちまうじゃんかー！」

そんな真治を現実へ引き戻すのは、やはり道夫の仕事だった。真治は道夫を数秒間見据えて「ああ」と生返事をした。

最後に少しだけ、と思い再び川原を見下ろす。少女の姿が無い。

あれ？ ちょっと目離したただけなのに。はは、やっぱり川原の妖精だったりしてな。

ジー……

シャシャシャシャ……

セミの鳴き声にタイミングを合わせたように、真治は苦笑しながら早足に下り坂を歩き始める。

美音

急な山道を下っていくと、ようやくまともな道路に出た。未だに辺りは森林だらけだが、村が近い事を実感した真治は口元が緩くなってくる。

道路はY字型になっており、右には上り坂、左には下り坂がある。上り坂は日が当たっており、下り坂は未だ森林に日を遮られている。明るい上り坂と暗い下り坂。全くの対をなす二つの道だ。

「ねえ、左の下り坂を行くんでしょ？」

「いや、そっちじゃない」

「え？ じゃあ、右の上り坂？」

「いいや」

「じゃあ、何処よ！」

法子の質問に「待ってました」と言わんばかりに、道夫が口を横に広げる。

どっちでも良いって。早くしろよ。

道夫達のやりとりを、真治はしかめっ面で見ている。しかし、自然といつものようなストレスは感じなかった。

水分補給が出来て身体が落ち着いた所為か、先程の不思議な少女を見て精神が落ち着いた所為なのか。

「へへへ、俺らが行くのはそっちだ」

道夫は、分岐点とは全く離れているガードレールの方を指差す。

ガードレールを乗り越えた先は森林となっているが、人の通れる程度には道が出来ているようだ。

「ちよつと、また森林の中を通るの！？」

先程までは寛容だった法子も、これ以上は無駄に体力を削りたくないと思った。

「大丈夫大丈夫。下り坂歩いたら二十分くらいするのが、この中だと五分ちよいで着くぞ。ガキの頃によく使った近道だからな！」

子供のように道夫がはしゃぐ。法子は呆れ果て、鼻息を立てながらうつむいた。

抜け道は過酷で「けもの道」だったが、道夫の言うとおり五分程でまた道路と合流した。森林から出た瞬間、真夏の日差しが再び真治らを出迎えた。

同時に、木造の家が視界に入る。近くには小さな木造の小屋があり、すぐ隣には小型トラックが停めてある。小屋の付近には沢山の雑草が生えているが、高く伸びたひまわりが一段と目立つ。

先程までと比較すれば緩やかな下り坂が続き、左手には同じ高さに位置する民家の屋根がある。屋根と道との間には高い段差があり、落ちたら間違いなく怪我をしそうな高さだった。

右手には木造で古くささを感じさせる家がいくつも建ち並んでいる。背の低い石垣が道路沿いにちよこんとあるだけで、門がある訳でもないから簡単に敷地内に入れるようだ。

道路から石垣越しに、未成熟な柿の木や物干し竿が見える。付近の窓は全開になっている。道路から簡単にそれが見えてしまっている。もしも泥棒がやって来たら、いとも簡単に金銭を持って行かれるだろう。

そんな無防備な家が、沢山建ち並んでいる。逆を言えば、それだけ警戒心を持たずに人々が暮らしていける環境という事になる。

簾を窓に垂らした家、風鈴を窓に吊した家なども何軒か見掛ける。やはりそれらの家も、大半は窓が無防備に開いている。

真治達が歩く道は家が多く建ち並ぶが、少し遠くを眺めれば田園ばかりが、更に遠方には山々が広がっている。

まさに田舎だな。だせえ。

都会暮らしが体に染みついてる真治には、木や石で造られた物ばかりが並ぶこの光景が、許せなかった。

何でもっと発展させないんだ？ もうちょっと、まともに来るだろ。きつと、田舎人はセンスそのものが、ダサいんだな。

「おい、また田舎を馬鹿にしただろ？」

顔を歪ませた真治を道夫が注意する。真治はわざとらしく鼻息を大きく立てた。

田舎な家並みの中、場違いな程の大きな紅色の屋根が視界に入った。元々の家の大きさもあるが、特に新しく塗装したであろうテカった屋根が日の光を反射しているのが目立つ原因だろう。

「あの場違いな大きい家が、俺の両親の宿だ」

自信に満ち溢れた顔で、道夫が指差す。

「なあ、俺らがしばらく泊まるのって」

「ああ、俺の両親の宿だ。ちゃんと寝泊まりする部屋を確保してくれてんぞ」

真治は法子に尋ねるつもりだったのだが、道夫が横から勝手に答えた。

眉間にしわを寄せる真治だが、内心ほっと安堵していた。鍵すら存在していない可能性のある田舎の家々。自分の泊まる寝所もこんな田舎だったら。そんな不安があった。

まだ遠くに宿の一部が見えただけだが、想像していた「最悪な寝所」からは遠くかけ離れているのがすぐに分かった。

俺達の泊まる所だけでも、まともな所で良かった。

宿を目前にすると、やはり周りとは全く違う文化だな、と真治は感じた。

予め道夫からは小さなオンボロ民宿だと聞かされていた。しかし、それは嘘だとしか言えない程の立派な宿だ。

土地が広いだとか二階建てだとか、田舎なのだからそれには別段着目する必要は無い。しかし、造りが凝っている。

土や流木、丸太をふんだんに使った外装。庭には多彩に沢山の花が咲いている。

入り口までは、足下に丸く平べったい石が斑点のように続いている。その上を歩きながら、雲の絵が描かれた赤い暖簾のれんを掻き分け、玄関へ着く。

小さな天井には、電球が正方形を描くように四隅に配置されている。今は真つ昼間だからだが、電気は点いていない。夜になれば、玄関を明るく華美に演出してくれるのだろう。

枕木の踏み板などにもこの宿のこだわりを感じられる。まるで、料亭の入り口のような。

ボロつちい田舎の家とは、雲泥の差だな。あつちは強風ひとつで、畑の野菜みたいにすっぽりと抜けちまいそつだもんな、と真治は思う。

道夫が先頭になって、横移動式の扉を開ける。ガラガラと勢いよく滑った。

すぐに、吹き抜けのロビーとラウンジが現れた。やはり、中もほとんどが木造の物ばかりであった。様々な種類の木材にバラエティ豊かな塗装がされている。所々に動物の形をした置物がある。中でも、流木と馬車の車輪らしき物を使った照明器具が一際目立つ。

真治は艶のある木造ロビーの中に、椅子に座る人影を見つけた。どうやら、新聞を両手に広げて読んでいるようだった。

「おい、お袋ー！」

道夫の大声が室内に響き渡る。それと同時に、ロビーに座る人影は新聞を閉じ、こちらへゆっくりと腰を曲げながら歩いてきた。半袖のTシャツを着た七十歳くらいのしわだらけで白髪の老婦だった。「道夫かい」嘔れ気味な声で、老婦は言う。どうやら道夫の母みた이었다。

「よお、手伝いに来たぜ！」

真治と法子は、道夫が喜んでいるのを声から察した。興奮しているも以上に腹の底から出た道夫の声が、木造の室内にやたらと響き渡る。

久々の母親との再会に喜んでる道夫を見て、真治は少しばかり羨ましそうに見つめていた。

「何しとつたんだあッ！」

突如、道夫の母親が、丸めた新聞紙を我が子の顔目掛けて放り投

げた。

「うがあッ」勢いよく新聞紙が顔に当たり、道夫は後ろへよろめく。三、四歩で踏みとどまり、自分の母親を睨み付ける。

「てめえ、何しやがるんだ！」

「馬鹿者があ！ こんな時間まで何処をほつき歩いとったあ！」
道夫の大声に負けじと、道夫の母親も怒声を響かせる。真治と法子は呆気にとられていた。

「あ、あの」法子が右手を少し挙げながら、遠慮がちに言う。

「ああ、法子さん、よく来たね。一ヶ月前に結婚式で会って以来だね。挨拶遅れて悪かったねえ。で、何だい！」

「あ、お久し振りです。それで、えっと……」

道夫の母親の威圧感に圧され、法子は言葉を詰まらせてしまう。

真治は「我関せず」の精神で、ただ静観していた。

「悦子えっこばあさん、そんな大声出したら体に響くよおー」

二階の方向から朗々とした女性の声が、聞こえてきた。

すぐに二十代後半くらいの茶髪でウェーブをかけた女性が、木造のかね折れ階段（踊場で九十度向きを変える階段）を降りて来た。

階段はオープン型で筒抜けになっている。左手は手すりを掴み、右手には雑巾を引つ掛けたバケツを持っているのが、一階の真治たちから見えた。

女性が一階に到達する。青地のショートパンツに、透明なオレングジ色の上着。その下には、辛うじて水色のタンクトップを着ている。胸や肩の露出がかなり多い。

この猛暑を考えれば、特別違和感は無い。しかし、田舎という事を踏まえると、真治は違和感を感じざるを得なかった。

だが真治が何よりも気になったのは、人一倍大きな胸だった。視線が胸元から離れない。

「よお、純じゆんちゃんじゃんか！ 相変わらず元気そうだな」

「うん。道夫さんこそ元気そうだね！ そこにいるのは子供？ 道夫さんと正反対そうだねえ。てか、目つき悪いし、なんか生意気そ

うな顔してるねえ」

真治は純と呼ばれる女性へ嫌悪感を抱き、口元に大きなしわを作りながら睨み付けた。もう胸元に目線はいつていない。

真治の事を生意気だと言ったのもその一因だが、初対面でこれだけマシニングのようにどんだん言葉を吐き出す純に、「どこかの誰か」が被った。

「ん？ 何かあたしのこと睨んでる？ 嫌われちゃったかなあ」

そう言うと、純が目大きく見開きながら真治の目の前にやって来る。セミショートでリッジの強いウエーブだが、ほど良くラフに仕上げられてあり、个性的でありながらも大人な上品さを両立させている。

かなりヘアアレンジが上手いのが窺える。とても田舎に住んでいる人間の髪型とは思えない。

「こんにちはー！」

「……こんにちは」

道夫並みに声の大きい純に、真治は一步後退りながら対応する。

背は真治よりやや低めだが、威圧感を感じていた。

「ねえねえ、名前は？ 高校生？ 何年？」

「真治、高校二年生、です」

「へえ。ねえねえ、バンプアアって知ってる？」

「いや、知りません」真治は弱々しく返事する。

何故純から威圧感を感じていたのか、真治は漸く理解した。香水が臭いのだ。

「バンプアアって、今時の若者に大人気じゃん。巷じゃ、『ロツクの新星カリスマバンド』って言われてるよあ。あんた、年を鯖読サバヤキんでるでしょ」

純の強烈な香水の臭いが気になり、真治はなるべく鼻での呼吸を止める。純のアヒルのような口が、残念そうに窄んだ。

「同じ話題で仲良くなりたかったのになあ。でね、バンプアアはV系ロックバンドでさ、良い曲多いんだよあ。ジュードって呼ばれ

てるボーカルの声が良いの！ 強さの中に優しさがあある感じ！ 若者なら、流行に乗り遅れないように今度聴いてみなあ」

何故そんなに都会の話題に詳しいのか。真治は訊かない事にした。何処かの誰かと同じで、厄介事になるのが目に見えているからだつた。

触らぬ神に祟り無し。ことわざの偉大さを知る。

純が好き放題に喋って場を静まり返らせた所為か、道夫と悦子は袖手傍観していた。

「あれえ？ もう喧嘩終わった？」

純本人は、親子喧嘩が解決した主因が自分にあると、素で気付いていなかった。悦子は軽く咳き込む。

「もう昼過ぎだからね。道夫、さっさと父さんに挨拶して準備手伝いな」

悦子が場を取り仕切ろうと、道夫に指示する。道夫も「ああ」と素直に頷く。

「じゃあ、あたしが部屋に案内しまーす」

やけに舞い上がっている純に案内され、真治らは階段を上り出す。その時、真治は気付いた。

悦子が、険しい顔つきで真治と法子を見据えている。

ああ、そういう事か。真治は納得する。悦子も真治みたいに新しい親族が気に食わないのだろう。

そもそも自分たちと悦子が最初に会った時、法子に対してしっかりと挨拶してこなかった時点で、真治はおかしいと思っていた。

自分の息子と結婚したばかりの女が目の前にいるというのに、あの雑な挨拶だ。義娘への挨拶よりも、道夫の寄り道などを優先した。それが何を意味するのか。

悦子はここ数年美海部村から出ていなかった。道夫と法子が結婚式を挙げると聞き、漸く美海部村から出て来た。

道夫が法子との結婚について、最初に悦子や貞義さだよしに話したのは、

拳式の直前だった。

本来ならば、縁談が出た頃に道夫と法子が悦子らと会って挨拶をしておくべきだった。しかし、道夫が主任を務めるプロジェクトがちょうど大事な仕上げ期間に入ってしまった、美海部村に行く時間が無くなってしまった。

同じ東京都内だったならば、何とか会える時間は作れた。現に、東京に住む法子の両親には挨拶を済ませていた。だが、齢七十を超える道夫の両親に美海部村から東京へ出て来てもらうのは酷だった。それは結婚式の一回だけにしかかった。

両親に連絡を入れれば、その瞬間から両親は行動を開始するだろう。道夫の方から実家に行けないと言えば、無理矢理に上京してくるのは、目に見えている。

最終的に道夫が出した結論は、「じゃあ、挨拶も連絡もしないで良いや。直前に結婚式やるって呼び出せば大丈夫！」だった。

結局、法子と悦子らの初対面は結婚式となった。父の貞義は息子の愚拳に対して、「馬鹿なお前らしいな」と顔をしわくちやにして笑っていた。見た目と合致して、温厚な性格だった。

しかし、悦子はそれを許さなかった。別段礼儀作法に煩いタイプの間では無い。だが、結婚の挨拶に来なかった事だけは、どうしても悦子の許容範囲に収まらなかった。

笑いながら法子を祝福する貞義。その隣で値踏みするかのような眼光を放つ悦子。真治は結婚式での修羅場を、今でも鮮明に覚えている。

その時は、衝動的な怒りに駆られているだけかと真治は思っていた。しかし、事態は想像以上に複雑化していたようだった。

あの婆さん、気まず過ぎだ。やっぱり、家帰りてえ。

真治は肩を落しながら、小さく溜め息を吐いた。元気も一緒に吐き出してしまったのか、少しばかり体が重くなった気がした。

「真治君、どうしたかねえ」

回想世界に浸っていた真治を現実へ引き戻したのは、道夫ではなかった。布団に寝込んだ道夫の父親である貞義だった。顔を少し持ち上げながら、心配そうに真治に訊いてきた。

「あ、はい。大丈夫です」

「そうか、そりゃあ良かったなあ」

体を小さく震わせながら、やつれた顔を上げる貞義。頭に霜雪をおいているが、髭はまだ黒い。目元が薄紫色に変色している。純が慌てて枕へ頭を戻させた。

「親父、もう年なんだから、無理するなよ。ちゃんと寝てないと」

「ああ、分かっているさ。俺も、もう年だからなあ」

道夫が珍しく落ち着いた声で喋った。病気で床へ就く実父への気遣いなのかも知れない。

真治は和室の中を見渡す。部屋の中は綺麗に掃除されており、掛け軸や生け花、旅行先で集めた提灯ていとうなどが置いてある。

和の風情を大いに感じる部屋だ。和室だからではなく、布団や畳が敷いてあるからとかでもなく、和の情趣が自然と色濃く滲み出ている。

真治はそういった類たぐいには、すこぶる興味がある。だが、田園や田舎の家には美を感じられなかった。

間接的に触れる物であれば美の鑑賞として意義を持てる。だが、直接的に触れる物となれば美の鑑賞は好ましくない。そこでは実用性が最もな意義を持つ。

要するに、自分が見るだけの場合には見た目を綺麗にしる。自分が使う場合には便利にしる。それが真治の価値観であった。それは場合によっては多種多様な例外を生み出す。

「ご都合主義だと世間は呼ぶが、真治はこの価値観こそが個性の証だと信じている。価値観に対して善悪の値札をつけることこそが、群れるだけしか脳のない奴らのご都合主義なんだ、と。」

「親父、そろそろお袋の手伝いに行ってくるからさ」

「ああ、道夫、悪いなあ」貞義の声は低くて少し掠れた声だが、穏

和な雰囲気が入り混じっている。

どうすればこの親から、こいつみたいなのが生まれるんだ？

道夫は、真治が眉を顰^{ひそ}めながら横目で見てきている事に気付いていなかった。道夫や法子は、顔色悪く床に就く貞義ばかりに集中していた。

純だけが、真治の聞こえない程の小さな舌打ちにまで気付いていた。しかし、何一つ反応を示さすことはなかった。

「真治、私達は宿の手伝いで忙しいから、この部屋で大人しくして
るのよ。絶対、ふらふら何処か外に行っちゃダメよ」

五度目。法子に「外に出るな」と五度言われた。真治は座布団ふたつを連ねて座敷に寝転がりながら「ハイハイ」と片言のような返事をした。こちらも五度目。

真治は家族三人分の荷物番という名目を付けられ、寝泊まりする和室での暇つぶしを強要されていた。

座敷から僅かに段差のある縁側へ降り、玄関で靴を履き、入り口のドアを開けようとする法子。直前に肩越しに真治の方へ顔を向けてきた。

真治は頭の乗っている方の座布団を下から軽く手で持ち上げ、法子に視線を合わせた。法子の口元が微かに動き始めようとしているのが見えた。

「真治、ちゃんと部屋の
「ハイハイ」

六度目はぎりぎり阻止された。法子は不服そうに口を突っ張らせながら「感じわる」と言い残して廊下へと消えて行った。

部屋には自分ひとりとなった。真治は何処となく安らぎを感じる。横たわっている少し反発性の低い座布団の感触。体の軸を座布団の上に載せているが、腕や足は畳の方にはみ出している。その所為か、真治は腕や足が若干宙に浮く感覚を煩^{いら}わしく思った。

腕に畳の粕^{かす}が僅かに付いている。真治は畳の上で眠りたくはな

った。布団はまだ引いておらず、座布団の上で眠るしかないよう
ため息が出てくる。

次第に、部屋の中が暑く感じてくる。窓を全開としているのに、
風が全く入ってこない。せつかく吊されたガラス製の風鈴も、風物
詩たる由縁の美音を聴かせてくれない。

真治は意識を違う方向へ向ける事にする。改めて呼吸を試みる
と、畳の独特な香りが鼻を刺激してきた。くっせえな。でも、これ
くらいなら我慢出来そうだな……。

一面ガラスの窓に木漏れ日が反射し、真治のすぐ目の前の壁に薄
らと斑な模様が出来る。不思議な感じだな。何か気になっちまうな
あ……。

シャツ一枚だというのに、熱を体に感じる。シャツが自然と熱を
吸収しているようだ。

段々と座布団にも熱を感じ始める。触れている背中や後頭部も温
かくなってくる。気にするな。他の事、考えろ……。

山路を歩いていた時には頻りに聞こえていたクマゼミの鳴き声が、
今は全く聞こえない事に真治は気付く。あれ、こちら辺にはいない
のか？

額に溜まった汗を我慢していたが、遂にこめかみに伝ってきた。

我慢だ……。首筋からも汗が出始める。

タオル……。テーブルの上を一生懸命に手探りする。

真治が手を動かして何かを掴もうとする度に、物の擦れる音が静
かに聞こえてくる。タオルらしき柔らかかな繊維の感触を、見つけら
れない。

タオル……。胸元や背中から汗が噴き出し、シャツに染み込んで
くる。汗が汗を呼ぶ無限連鎖が生まれる。真治はもどかしそうに体
を揺らした。

「あー、やってらんねえー！」真治が座布団から勢いよく腰を上げ
た。テーブルの上にタオルは無かった。

真治は八畳くらいの和室を見渡す。古臭いテレビの横に沢山のボ

ストンバッグが置かれており、その中のひとつにタオルが載せてあった。

「何々だよ、宿なのにクーラーねえのかよ」

真治は既に湿り気味なタオルで額や首筋の汗を拭う。あまり清潔感が無い所為か、また汗が出始める。

シャツの中にタオルを突っ込み、胸元や背中中の汗を拭う。汗は止まらない。

「マジかよ。タオル、かなり湿っちまったぞ」

その時、洋服箆笥の開き戸から少しだけコードらしき物がはみ出しているのに真治は気付いた。

もしかして、と真治は戸を開ける。ハンガーには何も引っ掛けてはいない。しかし、それで空いたスペースに扇風機が収納してあった。

真治は余計に噴き出してくる汗など気にせず、重い扇風機をテレビの横のコンセントまで運ぶ。

何かに急かされるように、プラグを勢いよくコンセントに差し込む。埃が貼り付いた扇風機のプロペラが、間髪入れずに動き始める。静寂だった部屋を、風の起きる音が支配する。

扇風機の首を振らせないようにしてから顔を近付ける。あまりの涼しさに体中の汗の感覚が吹き飛んでいくようだった。シャツを脱ぎ、上半身に直接涼風を当てる。真治は目を瞑って安堵の深呼吸をする。その時、入口のドアが開く音がした。

「真治君ヤツホー。あら、上半身裸じゃん。でも、貧弱な体だね」

純が断りも入れずに、座敷に上がってくる。相変わらず、肌の露出が激しい服装をしている。真治は急いで湿ったシャツを着た。

「仕事良いんですか」真治がわざわざしく口を突っ張らせ、嫌み口調に言う。

純はそれでもニヤニヤと笑いながら、間近までやって来る。真治は頬を赤めながら、扇風機の方へ体の向きを変えた。

「良いの良いの。ちょっとくらいサボっても、バレないし」

真治は、悦子が道夫に手伝いを頼んだ理由が分かった気がした。純が扇風機の頭を真治から自分の方へ向けた。すぐにまた、真治が自分の方へ頭を戻した。

「あたしも暑いのお。ちょっとくらい、良いでしょー！」

しばらく、二人で扇風機の取り合いが続いた。最終的に、扇風機の首を振らせることに落ち着いた。

「ねえねえ、道夫さんのこと嫌ってるでしょ？ 貞義じいさんの部屋でそんな顔してた」

顔を見ながら話してくる純。不意に的を得てきた純が気になる真治だが、顔を見ずに扇風機だけを見続ける。

純の性格が苦手なのと、強烈な香水の臭いがするのもその一因であった。しかし、一番の要因は大きく露出した胸だった。

純は足を外に曲げ、体ごと真治の方を向いている。純の顔を見ようとすると、視界の隅に大きな胸が入ってきてしまう。

真治は純の顔だけを見て話せる自信が無い。高校生で思春期の自分が無意識の内にどんな表情や視線になってしまっただけか、それが怖い。

貞義の部屋での事をふまえれば、恐らく純はすぐに視線に気付くだろう。そして、立派な賢察をしては何を言ってくるか、真治には容易に想像が出来る。

真治は体を小さく震わせながら、無理やり今の体勢を維持する。

「あ、やっぱりあたしの言った通り、道夫さんのこと嫌いなんだね？」

人の顔色だけで判断出来てしまう洞察力に真治は舌を巻いた。顔に出したつもりは無いがそれすら察したのか、純は「凄いでしょ」と自慢げに言ってきた。

口数の少ない消極的な性格の真治にとって、一番厄介な相手なのかも知れない。

純が突拍子もなく扇風機に顔を近付け、無邪気に息を吹き掛けて遊び始める。すぐに純が噎むせる。扇風機にへばり付いていた埃が取

れて純の口に入った。

隣で行われた一連の動作に不意に反応し、口を押さえながら噎せている純を見てしまう。良い大人なのに子供みたいで苦手だ、と真治は再確認する。

噎せ終わりに、真治の顔を見る純。目からは涙が溢れており、恥ずかしそうに「へへへ」と苦笑する。真治は瞬時に扇風機の方へ視線を外した。

突如、真治の右肩に純が無理やり腕を回してきた。純の体が密着したことで真治は顔を赤め、一瞬体を震わせる。しかし、純の方向へ顔を向けることは無かった。

「ねえ、あたしなら親身になって相談乗ってあげるよ。この宿の中ではあたしが一番年が近いもんね。あたしとは仲良くやろうよお。あたしを真治君のお姉さんだと思って、ねえ？」

体を密着させたのは、性的な物などを一切切り離れた純なりのコミュニケーションだったのだらう。しかし、思春期の真治にとって女の体が触れるというのは逆効果で、警戒心を抱く物だった。

そして何より、間近にいる事で強烈な香水の臭いが鼻を強く刺激する。鼻を押さえられないだけに、我慢するのが辛い。

小さな親切、大きなお世話。また、ことわざの偉大さを知った。

「ねえねえ、顔真っ赤になってるよお。あ、もしかして大人のお姉さんは初めて？ 真治君、あんまモテなそうな顔してるもんねっ！」

「余計なお世話だ」と言いたい衝動を抑え、真治は尚も扇風機の方へ顔を向け続ける。ペースに乗ったら負けなんだ、と自分に言い聞かせる。

「ねえねえ、今誰か好きな女の子とかいるの？ お姉さんが恋の悩みを解決しちゃうよ」

我慢だ。返事するな。

「同じクラスとかに好きな娘いないの？」

我慢だ……。

「あのさ、もうちょっと笑ったり愛想良く出来ないの？ そうしな

いと女の子が避けて行っちゃうよ」

純の言葉が真治の胸に深く突き刺さった。どうしても触れられたくない所だった。

真治の頭に抑えられない熱が込み上げてくる。無意識の内に言葉を吐いていた。

「純さんには関係ないだろ」

「え？」

「良いから、部屋から出てってくれ！」

顔を真っ赤にした真治の怒鳴り声を聞き、純は目を丸くする。そして、不愉快そうに目を細め、アヒルのような唇を窄めた。

「感じわる」と言い残して部屋を出て行く。これで二度目だ。

玄関のドアが閉まる音を聞き、真治はほっと溜め息を吐く。

真治は扇風機をテーブルの横まで持っていく、靴から出した携帯電話の電源を入れる。

待ち受け画面は設定されておらず、メインディスプレイには初期設定の向日葵の絵と、大きな文字で「14:18」と、いつものアンテナマークの代わりに「圏外」が表示されている。

「ちっ。これだから田舎は嫌なんだ！」

真治の愚痴に反応したかのように窓際の風鈴がチリリンと、微かに綺麗な音を鳴らした。扇風機の風が届いたようだった。

携帯電話のアプリケーションを開き、ダウンロードしてあったゲームで遊び始める。

最初こそはテーブルにうつ伏せになりながら夢中で遊んでいた真治だが、時間が経つにつれて木のテーブルの固さが気になり出す。

胸部と肘と指に痺れを感じ始め、電源を切った携帯電話をテーブルに置き、テレビのリモコンを持ちながら座布団に再び寝転がる。

テレビを点けてみるが、見慣れないチャンネルナンバーと番組に真治は戸惑う。

如何にも三流な華の無い女性タレントが、如何にも三流な華の無いぼろぼろの中華料理店を訪問している姿が画面に映る。

画像編集やカメラワークの荒さからも、ろくな技術を持たない製作班だと読み取れる。

冴えない顔の店主が差し出した餃子を女性タレントは箸で掴み、醤油とラー油につけ、視聴者に見せつけるようにゆっくりと口に含む。滑舌悪く「美味しいです」と言い、わざとらしく目を丸くしながら笑う。

大根だな。全然食欲が湧いてこねえ、と真治は呆れる。次々にチャンネルを変えていくが、興味をそえられる番組は何も無かった。テレビの電源を切り、リモコンをテーブルの上の死角に滑らせる。天井を見つめながら、真治はぼうつと頭をめぐらした。

まだ始まったばかりの田舎生活について。道夫や法子、悦子、貞義のこと。電車内での清花や隼人との出来事。長い時間アスファルトの道路や山路を歩いたこと。

そして、純の言葉。「あのさ、もうちょっと笑ったり愛想良く出れないの？ そうしないと女の子が避けて行っちゃうよ」

「畜生っ！」扇風機と風鈴の音が微かにするだけの空間に、空に向けた真治の怒声が響き、そしてすぐに消えた。

「……恋か」頭を軽く捻って、窓に吊された風鈴を見つめながら、独り言を呟く。先程と違い、今は扇風機の風が当たっているから、座布団に寝転がっていても何処か心地良い。

「……河原の妖精」目を閉じ、山の中で見掛けた不思議な少女の事を思い出す。

ダイヤモンドのように光り輝く川面。岸部に佇む白いワンピースの少女。

今でも、あの神秘的な画趣が、鮮明に瞼の裏に蘇る。

耳を澄ませば、あの時の清風の音が聴こえてくる。もう、真治の耳には風鈴の音など入ってきてはいない。

清風に合わせ、揺れるワンピースの裾と帽子を押さえる黒髪の少女の華奢な姿。

木漏れ日が、セミの鳴き声が、木立の臭いが、その他にも様々な

要素が、あの異質な空間を作り上げていた。

あの女の子と話してみたいな。自然とそう思った。何でかと問われれば、しつかりとは答えられない。ただ、心の奥底から沸き上がってきたものだった。

寝転がっていた座布団から腰を上げ、日差し強い窓の外へと顔を出す。飛び移れる距離に木があることを確認する。

その際に、髪が風鈴に当たり、今までで一番大きな美音を鳴らした。

呼び声

相も変わらず真夏の太陽がじりじりと照っている。真治の体内から次々と水分を奪っていく。しかし、訪れた時に比べれば日差しが幾分か弱まっている。

携帯電話のメインディスプレイを覗く。『15:36』と表示されている。未だ猛暑の脅威は収まらないが、日は既に陰り始めているようだ。

クマゼミの鳴き声が聞こえなくなったのはそれが原因なのかも知れないな、と真治は考える。

美海部村を訪れた時には村民を見掛けなかった。今は打って変わり、路地に人の姿がちらほらとある。

老幼問わず、すれ違う度に「こんにちは」と会釈をしてくる。ここでは知人が否かは不要のようだ。だが、幼児や老人ばかりの野暮な景観に真治の不満は募るばかりだった。

空き巣狙いに親切な、窓が全開になった民家の竿から洗濯物が消えている。その民家の石垣の影に、小学生かそれ以下かと思われる青い短パンの男の子と赤いスカートの女の子がしゃがみ込んでいる。麦わら帽子を被った二人は玩具で遊んでいるわけでもなく、顔を近づけ合ってひそひそと話をしている。辺りには真治しかいないが、存在に気付いていない。

話の中身は秘密にするほど大層なものではなく、このくらいの子供にとっては言わばひそひそ話をするという事が、一種のコミュニケーションの取り方なのかも知れないな、と真治は思う。

真治は歩を止めることなく、そんな二人に気付かなかったかのように通り過ぎようとした。今は河原の妖精が最優先なんだ、と自らの足の運びを促す。

「ジュンおばちゃん、あそべないのぉ」女の子が声をあげる。

真治は思わず足を止めてしまった。子供二人が正面に佇む真治の

存在に気付き、石垣の影から小さな足音を立てながら駆け寄って来る。

「おまえ、みあまのひとかあ？」

無垢な瞳を携えて堂々と男の子が訊いてきた。真治が小さく鼻息を鳴らしてから答える。

「いや」

「お兄ちゃんくらい」

甲高い声の女の子からの奇襲を喰らい、真治は嘆きとも戸惑いとも取れない表情で軽くため息を零す。

子供のような大人ならば身近にいるが、本物の純粋な子供には免疫が無かった。

「なあなあ、どこからきたんだあ？」

「東京だよ」

「トーキョーって『カツコイーひと』がたくさんいるんでしょ？」

おにいちゃん、ださいよお」

真治は込み上げてくる怒りを抑える。相手は子供だ、ここでいきり立ったら子供のような大人の仲間入りだ、と何度も念仏のように唱えて自得する。仕方なしに真実を教えた。

「ダサイ人もいるんだよ」

「ああ、なるほどお」

屈辱と同時に憎たらしい隼人の顔が、真治の頭によぎった。この子供達が想像している「都会人」の理想像とは、ああいう人間なのかも知れない。真治にとつては不本意なことだった。

「でもジュンおばちゃんはカツコイーよねえ」女の子のばやきに男の子が相槌を打つ。

「ママがいつてたじゃんかあ。ジュンおばちゃんはちよくちよくトーキョーにいくんだぞお」

男の子から女の子へ相槌を打つ役目が交代し、そのまま二人は真治の顔を見ることなく、忙しく走り去っていった。公園までかけっこして、勝った方が家の冷蔵庫にあるスイカを独り占め出来るそう

だ。

ひとり取り残されたように真治が立ち尽くす。元から小さかった姿が更に小さくなっていく様を眺めながら、目を三角にする。

「ちっ。これだから子供は嫌なんだっ！」辛辣しんらうな言葉を吐いては溜飲を下げる。そのまま何も無かったように、再び夏山へと歩き始めた。

坂道に建っている所為か、少し斜めってる小屋がある。トラックが駐車してあり、付近には細長い棒に力強く巻きついたひまわりがある。

目の先には夏木立があり、その隙間に辛うじて通れる道がある。道夫が紹介した「けもの道」の入口だ。

ここを使えば、通常二十分を要するものを五分に短縮出来る。行かない手はない筈なのだが、真治は些いさか躊躇ちゅうちゆっていた。

道夫が子供の頃から使っていた道、通い慣れた道、邪道な選択、道夫と同じ思考……。

いや、あいつだけが使ってると思うか？ きつと、みんな使ってるんだ！

真治はそう自問自答して、裏道へと力強く一步を踏み出した。

森林に囲まれているお陰で、日照に頭を悩ます必要はなくなった。しかし、人間に容赦ない上り坂に真治は一苦労した。

ガードレールを乗り越えたと道路に合流した。Y字型になった分岐点が見える。一本道の方には通行止めのバーが置いてある。暗くなった下り坂と明るい上り坂と、陰陽のように全くの対象となっている。

道夫の話によれば、陰気な下り坂は「けもの道」の入り口へと繋がっているらしい。もう一方の明るんだ上り坂は何処へと繋がっているのだろうか。

真治は河原の妖精に辿り着く為の道筋を導き出そうと、おもんみ

る。妖精を見掛けた石橋から河原に下りられそうな道は無かった。となると、やはり日当たりの良い坂道が妥当な選択なのかも知れない。

真治は額に貯まり始めた汗を湿り気味なスポーツタオルで拭い、ゆったりとした足取りで坂道を上り始めた。

山に沿ってカーブが続く。再び『猪・猿出没注意』と書かれた看板を発見する。丸っこくて可愛いキャラクターのイラストだった。

このイラストは詐欺だ、と真治は思った。先程のような小さな子供がこれを見たらどう思うだろうか。こんな可愛らしく描いてあるが、実のところは凶暴な野生の生き物なのだ。

先刻の「けもの道」だって猪やら何やらの野生動物が作りあげた「跡」なのだ。大自然の中で強く生き残ってきた動物たちのその恐ろしさを、こんな可愛いイラストで隠匿してしまつて良いのだろうか。

可愛いイラストで描くなら、せいぜい空き缶とゴミ箱だけにしろよ。真治が心の中で愁嘆していた時、道路沿いに半鐘はんしやうを見つけた。

半鐘は小型の釣り鐘で、江戸時代に火の見やぐらの上部に取り付け、火災や洪水時に鳴らし、消防団の招集や近隣住民への警報として用いられていた。

しかし、サイレンなどが存在する現代では使い道を失くし、さびれたまま今、真治の目の前に佇んでいる。

半鐘の近くには道路に対して垂直に駐車するスペースがあり、車が二台停めてある。その正面に目をやると、白色が所々剥がれた鳥居が姿を現す。

容赦なく視界を悪くする日射から眼球を護る為、真治は臉を半分下ろしながら瞳を凝らす。額がくつかには薄ら「御天神社」と書かれているのが分かった。

「ごてん神社？」

周辺には草木が乱雑に生えており、鳥居の台石が半分草本に埋ま
っている。鳥居を越えて少し行った所に小さな拝殿があるのが見え
た。

小さな神社と不釣り合いな、巨大な鎮守の杜ちんじゆのもじが大きな闇を落と
している。

それと、真治の立っている入口からは境内に人を見掛けないのが
相まってか、何とも不気味に感じた。あまり近付きたく無い、と。

ジーーーー……

ジツジツジツジツ……

覚えのある忙しい鳴き声が聞こえてきた。東京の方でも夏場には
頻繁に聞いたものだった。

「アブラゼミ」自然と真治は呟く。

薄暗くて閑散とした境内に大きく響き渡るアブラゼミの鳴き声。

それは「御天神社」の不気味さに拍車を掛けるものとして、十分な
演出を為していた。

総毛立った真治は視線を境内から移した。鳥居の横に森林があり、
抜け道らしきものが見える。根拠は露程もないが、ここから川へ行
ける、と直感が告げていた。期待と懸念を胸に抱きながら、更なる
未知の領域への一步を踏ん切った。

数分後、真治が見たものと相違ない山川に辿り着いた。真治は自
らの処決が正しかった事を知った。

しかし、「河原の妖精」の姿は見当たらない。真治はこの結果を
大方は認していた。

帰するところ、「予想通り」だった。

河原の白い小石の上をつまづかないように、真治はそろりそろり
と歩きながら本川へと近づく。

中流域なのか、水流が遅い。鳥瞰ちんかんした時には川面が日光を反射し
ていて分からなかったが、限りなく透明な川の底には小石が露出し
ている。川底に付着した珪藻けいそう、魚類や水生昆虫の生息も見て取れた。

真治は全てを諦めたように長嘆する。そして、大きく深呼吸をした。目を瞑って耳を澄ます。瀬から聴こえる音が何処か心地よく、瞼の裏に清流が映し出される。

ジーーーーー……

ジツジツジツジツジツ……

真治の鑑賞を妨げるように、アブラゼミの荒々しい鳴き声が飛び込んできた。

だが、真治が憤ることはなかった。何とも不思議な感覚に陥っていた。

河原付近の森の中から聞こえるアブラゼミの声が、呼んでいるような気がした。気が付けば、自ずと歩み始めていた。

ヤナギやサクラなどの広葉樹がうねるように生え混じっている。

枝葉から漏れた日の光が、ほの暗い樹林帯の中を神秘的に彩る。

ジーーーーー……

ジツジツジツジツジツ……

アブラゼミの声の大きさが段々と増し、けたたましくなってきた。真治には「呼び声」の元へ近付いている気がしていた。

当初からの目的だった「河原の妖精」がこんな辺ぴな森にいる筈がない。そうは思っただけでも、強烈な何かに導かれるようで、真治の歩が止まることはない。

響き渡るアブラゼミの鳴き声や真治の何倍も背の高い樹木たち。

閑雅なそこは、仙境にでも迷い込んだかのような錯覚を引き起こす。宛てもなくそんな別世界を歩き続けていたが、突然不思議な声が出た。

『人間だ』

頭の中に直接意思が侵入してくるようで、真治には森そのものに話しかけられている気がした。

人間の言語では無かったが、理解出来た。言語を知らない外国人の気持ち、声色のみで汲み取る感覚に近かった。

今度は多種多様な「声」が響いてくるようになる。ひとつやふたつでは無かった。真治には、「こんにちは」と聞こえた。

閑静な森の所々から届く「声」たちやそびえ立つ木々、木漏れ日が美妙に混合する。神妙なこの世界に酔いしれてしまいそうだった。真治は覚束ない足取りで、飲み込まれるように、更に森の奥深くへと向かう。

次第に大きくなっていった「声」が、いつの間にか消えた。「ねえ」

今度はしつかりと、人間の女声が真治の耳に入ってきた。小さな声だったが、透き通るように響いた。

振り向けば、彼女の姿があった。先程見た「河原の妖精」と何ら変わらない格好で、細長いケヤキの木陰にいる。

レースの模様が入った白い半袖のシャツに、膝元まで伸びた同色のスカート。遠方からはひとつに繋がって見えたのも合点がいった。白い肌をしていて、顔の全てのパーツが小さい。ゆるいウェーブをかけたミディアムヘアは少しばかり茶色つけが混じって見える。電車内で会った清花に引けを取らない気がした。寧ろ、こちらの方が上だとさえ真治には思えた。

清花は「美人」という言葉に収まる。少女にも「美人」という言葉は使えるが、適切ではない。

何処か現実離れしていて、霊異な存在感を放っている。服装や肌などは「白」なのだが、全体的に「透明」な雰囲気だった。

特に白色の帽子の影に見える紺色の瞳が神々しく、まるで大自然そのものを宿しているかのようだ。

あつ。驚きと喜びを含み、真治は言葉に出していた。心臓の鼓動が急激に速まる。

彼女に降り注ぐ柔らかな木漏れ日が、透明な彼女に色を着けるように混ざり合い、より神秘的に感じた。雄大な大自然に見事に溶け込む少女。まさに「妖精」という呼び名が相応しかった。

妙に落ち着き払った表情で、少女が真治に近付いてくる。彼女の

悠然とした足取りが、寂せきばくな空間に音を加える。

俺を呼び止めたよな？ 何の為に？

真治に接近し、何処までも靈妙な瞳で見つめてくる。やがて、少女がおもむろに小さな口を開いた。

「色々と驚かせちゃって、ごめんなさい」

少女が頭を小さく下げる。申し訳なさそうにはなく、傲慢な態度という訳でもなく、謝る姿でさえも言葉に表せない神異な雰囲気があるな、と真治は思う。その声音は、楽器から発せられたかのように美麗なものだった。

何を謝られたのかは分からなかったが、真治は無言でこくりと頷いておく。

「ここに来るのは、初めて？」少女が訊ねてくる。凜とした表情をしている。

「あ、ああ」遠慮がちに真治は返事をする。

「都会の人？」

しとやかな少女が、少しばかり遠慮した口調になった。それが、真治を余計に緊張させる。

「東京から、来た」やや間を空けてから真治は答えた。

ああ、と少女が頷く。それから何も話さなくなった。しばらく沈黙の時間が訪れる。

ジーーーー……

ジツジツジツジツ……

アブラゼミの鳴き声が森閑な空間に響く。ふたりは互いを見つめ合ったまま、言葉を紡ぎ出せずにいる。少女の視線は真治から外れ、宙をさま迷っていた。

何と声を掛ければ良いんだ。話し掛けてきた少女が言葉を詰まらせていては、真治にはどうしようもなかった。

えっと、と真治は小さく言い、自分側に会話の主導権を移す。

「あ、はい」

少女が倉皇として真治に視線を戻す。だんまりむつつりとしたこ

の空気に、ちょうど嫌気がさしていたんです。そんな反応だった。

「名前は？」踏ん切りをつける為に、勇気を出して、言葉を力強く発していた。少し声が裏返っていた。「あ、俺は、真治」慌てて付け足す。

「私は」そこで少女の言葉が詰まる。何か考え事をしているようだったが、すぐに言葉を繋げる。

「私は、ちなつ。数字の千に、夏休みの夏って書くの」

照れ笑いする。千夏の頬が赤らんでいる。透明感のある肌だから、それが顕著に現れていた。

また、真治は次の言葉が途絶える。千夏も僅かに口を開けたまま、マネキン人形のように動かない。

俺は、一体、何をしてるんだ……。真治は不意に、自分の立ち位置が分からなくなっていた。

何故こんな森の奥深くへ来たのか。千夏に会う為だ。

彼女に会ってどうするつもりだったのか。ただ何となく、話してみたかったのだ。

何の接点も無いのに、何を話すつもりだったのか。それは、全く考えていなかった。

過去にもこんな失敗があったのに、片桐かたぎりの件を反省した筈なのに、何も成長してないんだ……。今までの所業の全てに真治は嫌気がさしていた。恣意的しじいな行動をすればかりで、自分は本当に最低な人間なんだ、と。

「よろしくね」

綺麗な声が心の中に染み込んできた。鬱々とした気分を、浄化してくれた。うつむき気味で小さな声だったが、透き通ったそれは海のように、自分は無抵抗なまま、中をひたすら漂っている。真治にはそんな気がした。

「あ、ああ。よろしく」弱々しい声で、真治がゆっくりと言った。なるがままになれば良いんだ、と思っていた。

「ここに、何をしに来たの？」千夏は特に訝いかにる様子も無く、純粹に

質問をしている顔だった。

「会いたかった」

意思が制御するよりも先に、口が勝手に動いていた。体の熱を感じし始めたのも、また静閑としてからだだった。

「わたしに？」少女は戸惑った表情を浮かべ、自分の顔をゆつくりと指差す。真治は細長くて華奢な指に見とれた。その先に見える頬は、赤色というよりは、桃色に近い染まり方をしている。

うん。真治は閉じた口の隙間から声を漏らし、こくりと頷く。こめかみから汗が垂れる。

真治は自分自身が信じられなかった。初対面の人間に、こんな赤裸々に打ち明けるなんて。俺は、どうなっちまったんだ……。

千夏からの返事は聞こえない。無音のままどれ程の時間が経ったのか、分からなくなっていた。

真治は緊張のあまり、千夏の表情を確認できずにいた。何処までも不思議なあの瞳に睨まれるのが怖かった。その時の陰湿な空間は、容易に想像できるものだった。

もはや意識をするしない以前に、勝手に、真治の脳裏にそれは映写される。千夏と寸分^{たが}違わない真っ白な服装や肌なのに、何故か睨みつけてくる顔だけは違っていた。

赤みがかかった茶色の髪を水色のゴムでアップにし、大きく露わにした額。綺麗に描かれた眉毛がその中で、真治の全てを否定するように角度をつける。

「いい加減にして。あんたなんか、大嫌いなんだから」

片桐が当時と同じように、柳眉を逆立てて真治に言う。それは、思い出すのさえ辛いトラウマだった。

「嫌い……？」自分の勘違いだったと受け入れているのに、片桐にとっては全てが「無駄」を超えて「害」になり果てていたと理解しているのに、それでも真治は小さな抵抗をしている。

「聞き取れなかった？　じゃあ、もう一度言うわよ」

億劫そうに言う。それでも片桐の目つきは相変わらず鋭い。

止めてくれ、もう聞かせないでくれ。心の中でそう祈る真治だが、当時の彼はまだ愚行を続ける。

二人の間でだけ、時が止まっている。その静寂を破るように、濃いグロスを塗った唇が、おもむろに開かれる。

「気持ち悪いんだよ。あたしに近寄るな！」

「あの、大丈夫？」

真治を現実世界へ引き戻したのは、馬鹿でかい声の義父や、声の掠れた義祖父でもなく、妖精の奏でる優しい音色だった。

眼前の少女は、元通りに、霊気な妖精の顔になっていた。少女の瞳が、心配そうに真治の顔面を映している。

「あ、ああ。大丈夫」

シャワーを浴びた直後みたいに全身が汗だくなのは、辛辣な記憶の所為なのか、盛夏の所為なのか、今の真治には分からない。

「なんか、辛そうな顔、してた」

「ごめん」と真治は謝る。

「わたしこそ、なんか、ごめんね」千夏も謝る。

お互いよそよそしいだけだな、と真治は後悔する。結局は片桐と同じで、俺の独りよがりだったんだ、と。

大概の病気は、気付くのが遅ければ遅いほど、悪化する。取り返しのつかない事態となり、「あの時、気付いておけば。ああしておけば」などと終末には嘆き苦しむ。自分の病気は「恋の病」と呼び、早期治療として、ここで妖精にさよならと言わなければならぬ。

「あ、あのさ」

「え、何？」

千夏の顔が若干怯えている。まるで、いじめっ子に呼び止められたかのように。

大丈夫だから、俺はいじめっ子じゃないから、と真治は心の中で語りかける。そして、「もう帰るから」と、言葉が口を通り抜けた。「う、うん。分かった」

千夏が言葉を発した時には、真治は、彼女の横を早足に通り過ぎていた。

顔を合わせないように枝垂しだれながら、前へ前へと真治は歩を進め続ける。後方の少女とは、どれだけ距離が開いたのだろうか。確認は出来ない。もう、今更、振り向けない。

「わたしも」

背後からあり得ない声があった。そんな色好いろよいな事が起こる訳がない。幻聴だろう、と真治は我が耳を疑う。

それでも足は停止して、真治はしりえに振り向いていた。そこには少女が、相変わらず神異な存在感を放ちながら、立っていた。我が目を疑う。

わざわざ追ってきたのか、そんな事は絶対にあり得ない。耳と目が同時に腐ってしまったのか。

「どうして」「真治がしどろもどろに言葉を発した。

「また、明日も会える？」千夏が言う。

「え……？」とっさに言葉が漏れ、それからまた、だんまりとしてしまう。

ジー……

ジツジツジツジツ……

アブラゼミが、真治の解答を催促するみたいだった。実は、ふたりの会話を分かっているのかも知れないな、と真治は思う。

「ああ」「そう答えるのが、精一杯だった。心臓の鼓動は、急速なままでいる。

「うん、また明日」「少女は照れながらも、にっこりと笑っていた。

ジー……

ジツジツジツジツ……

アブラゼミが、祝福している。ほの暗い森は確かな存在感を示しながら、ただ黙って、ふたりのことを優しく見守ってくれていた。

夏だというのに、村落はすっかりと、蒼然とした暮色に包まれて

いた。人影もあまりない。ぼろぼろの家屋たちは暮色の魔術にかかり、異次元への扉のように怪しく佇んでいる。

そんな暗闇の中、石垣の影に二つの小さな人影が蠢動しゅんどうするのが見えた。何だろうかと、真治は熟視する。

昼間に会った小学生くらいの青い短パンの男の子と、赤いスカートの女の子だった。

スイカの種を意味ありげに地面に並べて遊んでいる。二人は作業に没頭していて真治の存在に気付かない。

そろりそろりとしやがみ込んだ二人の間近に行こうとする。だが、女の子が先に真治の気配に気付き、仰視してくる。

「あ、ダサイおにいちゃんだあ！」

開口一番に出てきたのがそんな言葉で、真治はがっくりとうなだれてしまう。

「おまえ、まだそとにいたのかあ？」男の子も相変わらずだった。

「まだ、夕方だしね」真治は優しい口調を心掛ける。今ならば容易に出来る。

「はやく、いえにかえったほうがいいよお」女の子がくりくりした目で言ってくる。

「何で？」

「くらいじかんになると、ガキがでるんだぞお」男の子が真摯しんじな表情で言う。

真治はその単語を聞き、子供たちの発言の意図が分からず顔を横に傾ける。ガキはお前らだろ、と心の中で指摘する。

「ガキに会ったら、ヤバいの？」

「ヤバイよお」女の子も真剣そのものだ。

二人は実際に体験したというよりは、臨場感溢れる語りで誰かに怪談を植えつけられたようだった。そんな事するのは誰か。真治には大方推測ができた。

「それは、誰から聞いたの？」

「ジユンおばちゃんがいつてたんだよお」

やはり真治の推理は的中した。しかし、ミステリー小説と違って充実した解放感はなかった。

「そのガキに会ったら、どうなるの？」

「おなかがペコペコになっちゃんだぞお」と男の子。

「スイカのたねがあれば、セガキなんだよお」と女の子。

「ドクロなんだぜえ」

「ガキだなあ」

こいつら、一体何を言ってるんだ？ それが、押し寄せる言葉の荒波を越えた真治の感想だった。支離滅裂で、怪奇譚の本筋が見えてこない。

「ガキって、どんな感じなの？」

「ちいさくてね、ひよろくてね、おなかだけポツコリしてるんだってえ」そう言っつて、女の子は自分の腹部の上に両手で半球を描いてみせた。

ああ、と真治は小さく頷く。ようやく理解が出来た。子供という意味のガキでなく、妖怪の一種である「餓鬼」を言っていたのだろう。まだまだ謎は残されているが、一番重要だった箇所が解決したのは大きかった。

真治はつい顔をほころばせてしまう。妖精に餓鬼。田舎はやけに非現実的な所なんだな、と。

「おまえ、なにわらってんだあ」男の子に気付かれる。真治は返事をしない。

「おにいちゃん、なんかいいことあったのぉ？」子供ながら勘が鋭い。

「うん。まあね」

真治は具体的に答えるつもりはなかった。子供はこの程度の受け答えをしておけば、満足してくれるだろう、と。

「おんなのこにあつてたんだろお！」男の子が言った。根拠など無い筈なのに、やけに自信に溢れている。

「いいや」気持ちを混ぜないように、こんなガキに悟られないよう

に、と真治はゆっくり否定する。

ふふふ。女の子が何かを悟ったように口元を緩ませる。真治には嫌な予感がした。

「おにいちゃん、ホッペがまっかつかあ」

しまった、と瞬時に思った。口筋ばかりに神経を集中させていた。真治は、考えている事が顔に出やすかった。

「おまえ、うそつくのヘタクソだなあ」

「テレちゃって、かわいい」

二人とも他人の色恋沙汰に興味津々だ。純の影がちらつく。とんでもない教育をしたものだ、と真治は不満を募らせる。

本来の真治ならば、千夏のことを教えるなどあり得なかったが、今はすこぶる機嫌がよかった。

「会ったよ」

やっぱり！ 二人の目が輝く。真治に向かって一歩前進してきた。それくらいに好奇心が露骨に表れていた。

「どんな力なんだあ。カワイイのかあ？」

「おにいちゃんよりとしたあ？」

「なまえはなんていうんだあ？」

あれやこれやとマシンガンのように言葉を放ってくる。どこかの誰かに似ている。次々に受け継がれているのだろうか。ウィルス並にたちが悪いな、と真治は頭の中で罵る。

しかし、今は嬉しさの方が勝っていて、真治の口はなめらかに動いた。

「妖精に会っていたんだ」

二人がぼかんとした表情でいる。顔を合わせては、「ヨウセイ？」と小さな頭を横に垂らし合っている。真治は、ひとり勝ち誇ったようになっっていた。

「そう、妖精」と自慢げにまた言う。その響きが気に入っている節があった。子供たちが悩んでいる様が小気味よかったりもした。

「真治！」

後方で甲高い声が響いた。真治は振り返る。鬼のような形相をした法子がいた。薄く漂う暗闇は、母をよりいっそう鬼らしく見せ、心胆を寒からしめた。

「真治、勝手に外出して何やってるの！」

「いや、ちよつと気晴ら」

「良いから、来なさい！」

相変わらず真治は、法子の怒鳴り声に体をびくりと反応させてしまふ。この癖は一生抜けそうにない。

法子は左手で真治のTシャツを、もう一方の手で頭を掴み、謝辞を述べた。

「うちの真治が迷惑掛けちゃって、ごめんね」

法子はまだ小さな子供たちに頭を下げる。その際、強引に真治の頭も下げさせた。男の子と女の子は困惑した表情を浮かべている。

真治は羞恥心のあまり二人の顔をしっかりと見れずにいた。母親に怒られ、自分たちに頭を下ろさせられている「おにいちゃん」をどう思ってるのだろうか。情けなくて顔向けなど出来やしない。

「メーワクじゃないぞお」

真治は男の子の言葉に感動し、目を輝かせる。よし、偉いぞ。俺の無実を証明してくれ！

「別に無理しなくてもいいのよ。どうせ、真治があなた達をずっと振り回してたんでしょ」

法子は真治の行為全てを疑ってた。前科を持った人間が、事件があつた際に真つ先に警察に取り調べられては犯人扱いされるのに似ている。

結局、過去の汚点ひとつに全てをなすりつけなければいい。間違つたならば、汚点があるのがいけないんですよ、と言い逃れ出来る。真治はそう思った。

「この子らと会つたのなんて、ついさっきだから」

「そうなの？」法子は二人に確認をする。

「そつだよお。おにいちゃんはさつきまでヨーサーにあつてたんだよねえ」

余計なことを言うな。真治が顔を不細工に歪ませて子供らに合図する。当人たちは気付いていなかった。

「妖精？」法子は真治を訝しげに見ながら、首を大きく傾げる。

「真治、どういう意味？」

「お袋には関係ないだろ」真治は視線を合わせないようにする。

法子は「妖精」について想察していたが、早々と諦めたみたいであつた。再び子供らに頭を下げ、真治のＴシャツを異常な力で引っ張り、その場を後にした。

法子に引っ張られてじたばたしていた際、暗闇が充満する中で、真治のことを指差し笑う子供たちの姿があつた。

真治は次に起こりうる事態に焦りを覚え始めていた。勘の鈍い法子には「妖精」の意味が分からなかったが、厄介な人間が他に二人も残っていた。

恋愛話に敏感な道夫と純ならば、ある程度の事を把握してしまいきつな気がした。

そうしたら、どうなるだろうか。下手をすれば、「どれくらい可愛いかチェックする」などと言って千夏に会いに行く時同行するかも知れない。

真治はぴりぴりとした悲惨な空間を想像しては、長嘆息する。

全く、田舎つてのは面倒くさい所だな、と。

難局

聞き覚えのない虫や野鳥たちの鳴き声が聞こえる。辺りに大きく充満している。

すっかり暮色が濃くなった帰路に、電柱が直線に延々と続いている。真つ黒に覆われている所為か、終わりが無いように見えてしま

う。そんな中で、薄暗く光る公衆電話のボックスが存在感をしめしている。目に立つからか、ボックスの付近には虫が大量に飛び交っている。

この世の物とは思えない不気味な雰囲気を感じている。ひとりで電話をしていたら、後ろから幽霊でも現れそうだな、と真治は思う。静かに佇む家々の輪郭は、ぼんやりとしか把握出来ない。室内の灯りがちかちかと点滅している家もある。

何かを伝える暗号なのか、壊れたように独特なリズムで繰り返しており、凝視していると目が痛くなる。

耳を傾ければ、テレビの雑音が様々な方向から微かに流れ込んでくる。食卓で一家団欒いっかだらんとテレビを観ているのだろうか。

真治は隣と一緒に歩く法子をちら見する。顔は引きつっており、真治よりも若干歩調が速い。まだ憤っているのが分かる。

「なあ」と真治が遠慮気味に声を出す。

法子は歩調を少しだけ遅くし、こちらに一瞥いちへつをくれてから「何?」と訊いてくる。

「俺が宿を抜け出して、『みんな』、心配しているのか?」

『みんな』とは言ったが、実のところ世界一嫌いな人間のことだけを指していた。

「当たり前でしょ」と法子は語調を強くしてから、「心配しない親なんて、いるわけないじゃない」とぼそりと繋げる。

そのまま、また早足に足を運び始める。真治との距離を少しずつ

広げていく。

「ごめん」

法子に聞こえるか聞こえないかくらいの微妙な大きさと真治が言った。別に聞こえていなければそれはそれでいいや、と思っていた。前に行く法子の様子を伺う。相変わらず歩が速い。遠慮などという言葉を知らないかのよう。

「謝るならもつと大きな声で、相手の目をちゃんと正面から見て。でしょ？」

後方から法子の顔は見えないが、声はどことなく笑いが含まれているように聞こえた。

ふつ。真治は口の端からついつい声が漏れてしまう。そう言えば、昔から耳に穴が空くほど言われてたっけな。

「宿に帰ったら、ちゃんと、『みんな』に謝るのよ」

法子は『みんな』という単語だけを異様に強く発音した。

ふうー。今度はため息が漏れる。『みんな』、か……。

辺りが暗闇に飲み込まれている中、一軒だけけたたましい灯りが浮き上がっている。

田舎に存立しているのを疑ってしまう程の光度も去ることながら、それを反射している深紅色の屋根が一際目立っている。

依然と存在感を示すそれは、真治たちが寝泊まりすることとなる宿に違いなかった。

このど田舎な美海部村で、あんな豪華な建物があるというのは、如何なものか。周囲との格差みたいに感じるあれを、村民たちは快く思っているのだろうか。

そんなことを真治が考えていた時、夜道の先から話し声が聞こえてきた。かなり近くにいますようだが、姿形は闇に隠れてしまっている。

「げっ」と真治は口元を歪ませ、立ち止まる。

聞こえてきたのは、若い男女の声だった。しかし、その声質から

すぐに誰かが判った。

法子は全く意に介することもなく、そのまま声のする先へと歩いていってしまう。

どうしようかと真治は悩む。このまま進めば、「あの二人」に遭遇してしまう。しかし、もう法子の近くから離れるわけにもいれない。また鬼を見るのはうんざりだった。

深呼吸をする。精一杯に、田舎の澄んだ空気を肺に取り入れた。覚悟を決め、真治も前進する。

「あら」と最初に反応したのは法子だった。向こうも一瞬遅れてから気付いた。

「電車の中ではどうも」法子が一礼する。

「いえいえ、本当に何も悪いことはされていませんよ」

黒い長髪を垂らした女性が、弱々しい声で慌てている。隣の長身の少年は、ばつが悪そうに法子や女性から視線を逸らしている。

女性はモデルばりのスタイルをしている。ストライプのチュニックシャツにルーズネックTシャツ。下にはレギンス。

少年も長身でモデルのようなスタイル。ドクロの黒いシャツに、ブラウンの髪。険悪な目つき。

電車内と同じ格好のまま、二人が闇に浮かんでいる。

清花と隼人に、こんな所で出会でくわすとは思わなかった。

車内での短き恋の一件もあり、真治はこのカップルには会いたくなかった。

もう今は、千夏の件があったから、尚更トラウマである清花の存在は記憶から抹消しておきたかった。

「あなた達も美海部村の出身だったの？」法子は興味津津だった。

「はい。私は東京の大学に入学することになって四年前、あ、正確には三年半くらい前に上京したんです」清花が軽快に答える。

「あら。じゃあ、長期の休みになったら帰郷してたりするの？」

「いえ。美海部に帰ってきたのは、上京して以来、三年半ぶりなん

です」

なるほど。どつりで美海部の風景を懐かしそうに観ていたわけだ、と真治は納得する。

「都内の化粧品会社への内定も決まりました。ちようど夏休みなので、両親が住んでいる美海部村に戻ってきたんです」

懐旧の情からなのか、清花の聲が弾んでいる。隣の隼人はやはり無愛想なままでいる。

「それで、彼氏さんも連れてきて、結婚報告もしちゃおうってことかしら？」

そう言つて法子は遠慮なく隼人に近寄る。隼人は首を動かさずに、狐に似た細い目だけで法子の方を向いている。清花はといえば、鳩が豆鉄砲でも食らつたような顔をしている。

やっぱりこいつら夫婦だツ！ 真治が心の中で叫ぶ。余計なことないちいち首を突つ込む性分は、一緒なんだ。気が合ったのも納得だ。

隼人は煩わしそうに顔を歪めている。法子は、そんな隼人の表情を愉快そうに見ている。

「あら、私、彼氏さんには嫌われちゃつたかしら？」

やがて、隼人がゆつたりと口を開く。

「俺ら、姉弟ですよ」

「え？」声を上げて反応したのは、真治の方だった。

虫たちの鳴き声が、再び辺りに聞こえ始めた。野鳥はどこか遠方の山で一際大きく長い声を発し、それから全く聞こえなくなつた。雑草の臭いが充溢じゅういつしている。吐き気を催す程ではないが、昨夜嗅いだヒメヒオウギの上品な匂いとは明らかに違う。電灯の微かな明かりが四人をぎりぎりに囲っている。お陰で、辛うじて闇に飲み込まれないでいる。

それらを認識させる程に、その時の真治の感覚は冴えていた。電灯で隔てられた空間の時間だけが、止まっているみたいだった。

「あの、そんなに驚かなくても……」

清花のぼやき声はすぐに闇の中に消えていった。目をしばたたき、困惑を顔に浮かべている。

同じく当惑していた法子が「ああ」と声を漏らし、「なるほどね」と自得する。「ねえ？」と真治の方に顔を向け、同意を求めてくる。何が「なるほどね」なのかは分からなかったが、真治は一応「ああ」と首を縦に振っておく。

「そんなに……、カップルに見えちゃうんですかね？」

清花が若干いつもより丁寧な口調で訊く。今まで何回も勘違いをされてきて、その理由がどうしても気になったのかも知れないな、と真治は思う。

「顔が全然似てないし、とても姉弟には見えないわ。『モデルみたいな美男美女カップル』って方がしっくりとくる感じ」法子が二人に視線を配る。

「そ、そんな、隼人はとにかく、私は美人なんかじゃないです、滅相もないです！」

清花が顔を真っ赤に染めながら、首を目一杯の速さで横に振る。謙虚だな、と真治は内心で拍手喝采を送る。

「私なんて、都会で暮らすようになって数年するのに、全然隼人みたいにおしゃれになれないんですよ」

「うっん、あなたは今のままが良いと思うわ。変に厚化粧を施すより、素を前面に出しているのが一番」

そう言って法子が胸を張るのと同時に、また夏山のどこかで野鳥が鳴いた。「その通りだ」と、賛同しているみたいだった。

清花は顔をうつむけたまま、「はあ」とかしくまった声を出す。

一連の会話中、真治と隼人は気まずそうにそれらを静観していた。暗い風景しかなく観るものなど無いのに、目をきよるきよるとさせていた。

二人はたまに目が合うと、何事も無かったように敏速びんそくに逸らし合っていた。

それから清花は、逆に法子たちのことを訊いてきた。法子は、夫

の父親が病床にあり、母親の手助けをしに美海部村に來たと説明する。

清花は「私たちには何も出来ませんが、お父様の体調が早く治ることを切に願います」と一礼する。

そして、二人は別れの言葉を交わし合う。法子は深紅色をした屋根が目立つ宿に向かって、清花は真治らが來た道に足を動かし始める。

清花が別れの挨拶代わりに頭を縦に振り、真治の横を通り過ぎていく。相も変わらず、レモンの微香が鼻を刺激した。それから数歩後を隼人がのんびりと歩いてくる。真治もゆつくりと歩き始める。

尖った表情をした隼人が、真治とすれ違う。全くこちらには視線を向けてこない。

ただ、一言、「マザコン」とだけ小声を残していく。

真治の頭の中に猛烈な怒気が蔓延はひる。すぐ様に「シスコン」と小声で言い返してやる。

そこで背を向け合う二人の歩がぴたりと止まる。

しかし、お互いに振り向くことなく、また同行者の後を追っていく。

庭にある丸石の斑点模様を踏み鳴らしながら真治たちは歩く。目前に現れた雲の描かれた赤い暖簾のれんを掻き分ける。

昼間に見て予想していた通り、正方形を描くように小さな天井に設置されていた電球の明かりは、しっかりと点いている。淡いオレンジ色が玄関を丸ごと包み込み、暖簾が薄くて赤い光を落としている。

真治は自らのオレンジ色の手などをじっと見続ける。明るく華美に演出された玄関に、つつい見取れてしまう。これは立派な芸術だな、と。

真治がそうこうしている内に、法子がさっさと横移動式の扉を滑らせる。がらがらと逞たくましい音を響かせながら開いた。

吹き抜けのフロントとロビーも、昼間とは別の顔を見せた。暗闇の至るところにぼんやりと灯りが浮かび上がっている。高輝度な畜光素材を使用した置物が室内に色を着けているようだ。西欧を意識した、ろうそく型の物やガラスで出来た小鳥型、提灯型、招き猫型などが、光の色で個性をアピールしている。昼間にも気になっていた流木と馬車の車輪らしき物を使った照明器具は、唯一直接電気を採っていて、一際強い光を撒いていた。

それらがバラエティ豊かな漆塗りの壁や柱に模様を描き、また、反射した色たちが混ざり合っては新たな色を創造している。

真治は思わず賞嘆のため息を漏らしていた。隣の法子も足を止め、その芸術に見入っている。

そんな光の芸術の中に身を委ねていた二人に、大きな木造テーブルの方から声を送られてくる。

「おーい！ 真治、法子ー！」

道夫の声だった。やはり、現実世界に引き戻す仕事は、道夫の本分だった。この時ばかりは、法子も口を歪めていた。

「へへへ、なかなか立派だろ？」道夫が口を横に広げたまま、二人の前までやってくる。

「ええ、なかなか」と法子はすねた声で応える。

「あれ？ もう少し良い反応してくれると思ってたんだけどな」

道夫の太い首が横に傾く。何故、道夫に冷めた視線が集中しているのか、全く分かっていない。

「それはそうと、真治」こちらへ体を向けてくる。真治は矢庭に顔をうつむける。

「お前、こんな遅い時間まで何をやってたんだ？」

やっぱり来たか、と真治は舌打ちをする。絶対に、道夫や純には千夏のことを知られたくない。

「ちよつと美海部村を散歩してきただけだ」と真治は答える。僅かな動揺も見せてはならない。

「本当にそれだけか？」道夫の片眉が上がる。

「ああ、それだけだ」

「どうかなー」道夫が歯を剥き出しにする。

「お前さ、また女絡みじゃないのかー？」

やばいな、と真治は生唾を呑み込む。なんて勘の鋭さだ。

「あ、そう言えば」突然法子がぼそりと口にしては、続きの言葉を
嚙^{えんか}下する。

「法子、どうしたんだ？」

「あ、いや、そんな大したことじゃないんだけど……」

真治はぎよろつとした目で法子の方を見ていた。止めてくれ、「
ヨウセイ」の件を出さないでくれ。

「何言おうとしたんだ？ 遠慮なく教えてくれよ」

こんな時の道夫の笑顔は清々しい程で、全てを受け入れる態勢を
明示していた。

ダメだ、教えるな、ヨウセイを教えちゃダメなんだ、千夏とのこ
とは秘密にしたいんだ。

法子の唇が微動する。真治は全てを覚悟し、目を瞑った。

「さつき、電車内での若い男女にまた会ったわ」

違った。真治は口から不安を吐き出す。だがそれでも、道夫はせ
せら笑っている。

「へえー。じゃあさ、やっぱり電車内みたいに凝視してたんだろ？」

真治を見てくる道夫の顔は確信に満ちている。やはり真治は返事
をしないでおく。道夫の場合は、何を言おうが「凶星」にされてし
まうのだから。

「まあ、高校生じゃそんなもんだろ。思春期だもんな。女のことば
かりに興味湧いて当然、健康な証しだ！ 綺麗な女の子がいたら
ずっと目で追っちまうんだよ。いやー、健康健康」

真治はマシンガンのような言葉の乱射を食らった。千夏の事を知
られなかったのは喜ばしいが、これはこれで悲劇だった。

「じゃあさ、さつきもあたしの胸が気になって仕方が無かったのか
なー？」

一階の渡り廊下から声が飛んできた。真治は耳を疑った。まさか、
よりもよって、純まで会話に参加してくるとは。

純がきらびやかで多彩な光の中から現れる。昼間と同じで肌の露
出が高い服装をしている。

「おお、純ちゃん、当たり前じゃんか！ きつと真治の奴、その胸
しか見てないぜ。もしかしたら、まだ顔覚えられてないかもな」

「ははは。思春期だもんね。仕方ないよねー」

二人でげらげら笑う。

「いやー、でもね、胸がどうかは知らないけど、顔を覚えられてな
いってのは、当たってると思うよ」

「純ちゃん、どういう意味だ？」

「昼間部屋に遊びに行っただけ、真治君、無理やりあたしから
視線逸らしてた」

何かを確信したように道夫の口元が下品に歪んだ。

「真治、何で純ちゃんから目を逸らしてたんだ？ なあ、黙ってた
ってどうしようもないんだから、さっさと吐いちまえよ！」

とうとうと言いながら、道夫は真治に顔を寄せてくる。それに合
わせて純まで間近にやってくる。露出の激しい服装が真治の視線の
端に入る。

「あたしに怒鳴ったよね。あたしのこと嫌い？ どこがいけ好かな
いの？ ねえ、教えてよ！」

「あ、そうそう」法子が静かに口に出す。それに連動し、道夫と純
の視線が法子の方へ移動する。

「真治、『ヨウセイ』って何なの？」

遂に言われてしまった。何故か両肩が重く感じ、真治は呼吸を乱
し始める。自分でもしつかりと分かった。

道夫と純の二人は、目を爛々（らんらん）とさせている。

「ヨウセイ？ それって、森なんかにいるって言われてる、あの妖
精？」

純が眉をしかめる。道夫も懐疑を浮かべている。

もう、ダメだ。千夏との恋も終わりが見えた。ベルの音が真治の脳内に鳴り響いた。試合終了、と。

「妖精、妖精」と、二人はぶつぶつ発音を繰り返している。

「あんたら、何やってんだい」

ぶつきらぼうな言葉が飛んできた。悦子が呆れた顔で、純の後方に立っている。

「あんたら、こんな玄関でサボってないで、手伝っておくれよ」

「あ、ああ。お袋、わりい」道夫が申し訳なさそうにしている。

「とにかく、夕食の手伝いをしておくれ」

そうして、道夫と純は悦子の後を追って厨房の扉の中へと消えた。悦子に救われた。

「そう言えば、こんな田舎なのに客なんて来るのか？」

真治の問いに、法子はしっかりと胸を張って答える。

「ちゃんと来てるわよ。三組」

「三組も？ 物好きな連中だな」

はたと法子の顔が強ばる。鋭い眉毛や目つきが、余計に迫力を感じさせた。真治はしかめっ面になる。

「ああ、そうだな、良い趣味を持った人たちだな」

真治は改めて宿の中を見回してみる。少し立派な家を宿屋として改造したみたいで、高級とは言えないがど田舎の景観とは完全に不釣り合いな造りだ。

宿の一階にはロビーとフロントが一緒にある。扉がいくつも見当たるが、ひとつひとつの間隔の狭さからして宿泊する部屋とは思えない。おそらくは、二階だけに客室を置いているのだろう。

後は小さな厨房、どちらかと言えば大きめな台所があり、階段の裏には廊下が長く延びている。中央がライトアップされた中庭を覗ける廊下の先には、小さな宴会場らしきものがいくつも見える。

「真治、私たちは後から夕飯貰えるそうだから、部屋で待ってて」
法子は片眉を吊り上げ、「もう抜け出しちゃ駄目よ」と付け加える。

「ああ」と真治は頷く。「もうこんな夜なんだし、出掛けようがないって」

真治は法子と一緒にオープン型のかね折れ階段を上り、二階に行く。右には大きなガラスの窓があり、宿周辺の田んぼが眺められる。白昼は緑色がわつと広がっていたが、今現在は真つ黒い海面のように静かに存在している。左側は手すりとなっており、一階の幻想的な灯りたちが見下ろせる。ふと真治の足が止まる。

光の芸術の中に混ざり込んでいた時とは違い、上から俯瞰ふかんしてみただけで状況を判断し、また足を動かし始める。

法子の足音が止む。真治は母親の顔を見ずとも、瞬時に音の変化だけで状況を判断し、また足を動かし始める。

そのまま真つ直ぐ進んでいくと、右側にいくつかの客室が現れる。静閑な廊下に、室内の音が僅かに漏れている。だが、テレビなのか客の話し声なのか判断出来ない程度の微々たるものだった。

先頭を静かに歩く法子が肩越しに真治の方へ振り返ってくる。右手人差し指を鼻の頭に載せ、声にならない声で「しっ」と言う。

そんなことくらい分かってる。いい加減ガキ扱いするな、と言ってやりたかったが、真治は素直に首を縦に振る。

突き当たりを左へ曲がり、また左手にある地上のプラネタリウムを尻目にし、直線を進む。二階に上がったってきた階段のちょうど反対側に、真治らの部屋は位置している。

法子が赤いプレートをついた鍵をポケットから取り出し、鍵穴に差し込む。ガリガリと物が擦れ合うような鈍い音がしたが、真治は忘れておくことにした。

先上がり端に入った法子が素早くスイッチを押し、室内に明かりを与える。

そのまま入れ替わるように真治が入り、縁側に上がる。法子はそれをしっかりと確認し、廊下に出て扉を閉める。

また、室内には真治ひとりとなった。

座敷の奥のガラス窓はしっかりと鍵が掛かっているが、カーテン

の方は全開になっている。ゆつくりと一歩一歩を踏みしめながら近付き、窓を開け、カーテンをシャーッと軽快な音で滑らせる。

すると、真治が鼻歌を鳴らし始める。口元に深いしわが作られる。部屋の中央にあるテーブルへ、陽気なステップで向かう。足がとてつもなく軽く感じた。

「ふふふ」と、誰もいない室内に真治の笑い声だけがする。

テーブル横に、プールへ飛び込むかのように真治は勢いよく倒れる。寝転がり、座布団に抱きつく。そのまま、畳の上をごろごろと横に往復する。

「千夏、千夏」と何度も裏声混じりで、連呼する。

誰もいない部屋は、あまりにも開放的だった。普段は他人に胸の内を話せないから、だから今、真治の心の中の全てが解き放たれている。

真治は瞼を塞ぎ、千夏との出来事を想起する。木々を掠めて降り注ぐ陽光、存在を示そうと忙しく鳴き続けるセミたち。その中に千夏がいて、二人が向き合うと、場の空気を察したようにセミたちはだんまりとしてしまう。

千夏は、同じ人間とは思えないほどの霊異な存在感を持っていて、そんな彼女の神妙な瞳が、自分の事なんかを見つめていたのだ。

真治は自分でも分からない内に舞い上がっていて、千夏に会いたかった、とまで伝えた。それなのに、あるうことか、彼女の応えを待たずしてそそくさと逃げてしまった。

過去の失恋を引きずり、もうそんな辛い経験をしたくないと考えて、真治は現実から逃避してしまった。その先には更なる虚無の深淵が待ち構えていると知っているのに、わざわざ自分から足を突っ込んでいた。

千夏は、そんな自分に手を差し出し、救ってくれた。降りかかる木漏れ日は、妖精の微笑みをより一層眩しく演出した。

つい先程起きたばかりの思い出の中に溶けていくように、真治の意識は深く深くへと沈んでいった。

「真治くん」

明朗快活な声が、真治を夢の世界から掬い上げた。

「ほらほら、起きてー。真治君、夕飯だよー」

千夏のピアノのような繊細な声音に比べると、純の場合は、攻撃性を帯びたギターのように思えた。さしずめ、本人の好みと一致してパンクロックといった所か。

とても心地よい夢から無理やり覚まさせられた所為か、真治は不機嫌そうに起き上がる。

体が重たく、節々が言うことを聞かない。室内の明かりに妙な違和感を覚えては、じんじんとめまいがする。一度倒れそうになり、壁に寄りかかった。

「ほらほら、ダルくても頑張れー」と言つて、純は先に縁側へ降りる。僅か数秒間だが、純の尖らせたアヒル型の唇に真治は見惚れてしまう。

服に付いた畳の粕をやや乱暴にはたき落とし、純の後を追う。

真治はふと携帯電話の存在を思い出し、踵を返す。テーブル上に放置されている携帯電話を拾い上げる。その近くに、中身を失ったせんべい類の袋がいくつか散乱していた。

悪寒戦慄がした。電光石火の早業で、携帯電話を開いてみる。プッシュボタンにせんべいの粕が付着していた。それが純の仕業である事は、明々白々だった。

「真治君、何のんびりしてるの！早くあんたを連れてかないと、あたしが怒られちゃうんだからねえ！」

純が縁側から呼号してくる。わざと可愛らしく振る舞おうとしているのか、頬を風船のようにぷっくりと膨らませている。

まだ体中にこびり付く眠気の所為か、気骨が折れてしまいそうだったからなのか、真治は大意した。

そう言えば、道夫も山路で同じような事を言ってたな。やっぱり似た者同士ってことか。

肩がぱつかりと開いた純の背中をなるべく熟視しないようにして、後を追う。

一階の渡り廊下は大きなガラス張りにしてあり、中庭が一望出来るようになっていた。庭石にも畜光の塗料が使われているみたいで、ぼんやりと優美に光っている。

真治はひとたび立ち止まっては鑑賞をしたかったが、厄介事は御免なので素通りした。帰り際に寄って、好きなだけ観ていけば良いだけの事だ。

客の夕食後にすぐ掃除を済ませたらしく、小さな宴会場はこざっぱりしていた。座敷の横長テーブルには、既に道夫と法子の姿がある。

明かり障子を開けた途端に、「あ、来た」と法子が反応し、テーブルの反対側に座る道夫が「真治、遅いぞ」と茶にしてくる。

真治は片脇の純に鋭い眼差しを向ける。純は唇をにっと広げ、「あら、また思春期の反動なの？」と自分の胸を指差す。

純の顔しか見ていかなかったのだが、妙な羞恥の念が湧き上がり、真治は視線を外す。

「あたしの勝ち」強烈な香水の匂いを撒き散らしながら、自慢げに耳語じごされた。

座敷に上がり、真治が法子の隣へ座る。純は真治の真つ正面、道夫の隣に着く。

テーブルには既にいくつかの夕飯が雑然と置かれている。

「真治君が来るまで待っていてくれたんだよ」純が密かにウインクを送ってくる。

「優しい両親だねえ」

「こんなの、常識だろ」

「もう、何でそんなにツンツンとするかなあー」

純が呆れ果てたような表情をする。人差し指で空を突っついていく。

「真治は、昔からツンツンしてる所があつたわ」

箸で山菜を口に含みながら、法子がしみじみと喋る。

「でも、芸術家タイプなのかも知れないわ。高校一年生の時、コンクールで受賞してるし」

へえー。道夫と純が同時に頷く。

「真治君にそんな才能があつたとは、驚き。いやあ、本当にすごいなあ」

冷やかす訳では無く、ただ純粹に、純が褒め称えてくる。真治はこそばゆくなつて鼻の頭を搔く。

「なるほど、天才は難しくて面倒臭い奴ばかりって言われてるもんな。ひねくれた真治見てて妙に納得だ」

道夫は賛してくれず、早速冷やかしてくる。

「でもね、コンクールでの受賞は高校一年生の時だけなの。小学校だとか中学校の時は、芸術なんかとは程遠い子だったのに」

法子に連動されて純も首を傾げる。

「不思議ですねー。高校一年生の時、真治君に何か特別な出来事があつたつてこと……、かな？」

真治は耳を傾けずただ黙々と、テーブルに並べられた夕食を喉に通していく。

脳裏では、古めかしい校舎の屋上が、新鮮な映像として蘇りそうになっていた。「食べる」という行為に全意識を向けなければ、辛辣な過去が蛆虫のように湧いてきたかも知れない。

「そう言えば、純ちゃん、お袋はどこに行つたんだ？」

道夫が別の話題に切り替えた。真治は、この時ばかりは道夫に感謝の念を抱いた。

「悦子ばあさんなら、貞義じいさんの所だよ」

純がすぐに返答する。

「悦子ばあさん、貞義じいさんにだけは甘いんだよねえ。あたしには、『サボってないでしつかりと働け』とか口うるさく怒ってくるくせにさあ。ちょっと部屋のお菓子を拝借しただけなのに」

純の目に不満の色が浮かぶ。叱られて当然だろ。真治は眉をしかめる。

「はは。純ちゃん、そりゃあ叱られて当然だろ」道夫がけらけらと笑う。

真治は衝撃を受けていた。道夫と思考が被ってしまった。

「だって、とつても美味しそうだったんだよお。甘党のあたしに我慢しろなんて、いくらなんでも酷だって」

からりとした声で純が言い訳をする。それから彼女は、東京に行つた時に立ち寄つたスイーツ屋の話始める。

銀座のアンジェリーナのモンブランが何たら、今は自分の中でフワボワーズ（ラズベリー）がヒットしている、マンゴーのタルトやプリンが増えてきている、などと熱心に一人で語る。

とあるスイーツ屋で修羅場を迎えている二人のOLを見掛けた事についてまで喋りだす。知的な雰囲気を出している美人が、もう片方の地味な女性にフォークを突きつけていたとか。

実は地味な女の方が圧倒的にモテてるなーって思ったの。古臭いゴムで髪をゆわえたりしてわざとダサく見せてるけど、あれは百戦錬磨の猛獣よ。何で分かつたかというのと、それは女の勘よ。とにかく遊び歩いてたら、知的な女の意中の人かなんかを横取りしちゃつたんだと思うんだよねえ。だから、あんな修羅場になっちゃつたとまあ、これも女の勘だけだね。

法子と道夫は、スイーツについて熱弁されていた時には相づちを打つ程度だったが、OL二人の話になつた途端に饒舌をふるうようになった。

その、脳ある鷹は爪を隠す的な女性がどれほど男たちを弄んでいたか。その後の二人はどうなったか。恐らく二人は水面下の戦いをしたんじゃないかな。先に直接手を出した方が負け。女の根比べ。でもやっぱりどちらかが手を出しちゃつて、とんでもない暴力のふるい合いに発展しちゃう。結局、警察沙汰にまでなる。下手したら、死者が出たかも。ああ、女って怖いね。

真治はもう、うんざりだった。

醜い戦いをしている本人たちよりも、被弾しない高台から面白そうに傍観している人間たちの方が怖いと思った。

そんなこんなをやっている内にかなりの時間が過ぎていた。携帯電話の画面に表示される時刻は、部屋を出てから二時間経過したことを告げていた。

いくら宿泊客が夕食を済ませているとはいえ、こんな所で茶話をしていて良いのだろうか。真治は疑問を抱く。

「純、雑談はそろそろ終わりだ」

見覚えのない五十がらみの中年男性が、どこからともなく現れては純の肩を強く叩く。ばちんと綺麗な音が響いた。

純は突然の出来事に「きゃっ」と小さな悲鳴を上げた。振り返って中年男性の顔を見ると唇を窄める。

「沢木さん、女の肌に触るなんてセクハラですよー」

「そんなに肌を露出してる女が、何言ってるんだ」

「でも、別に叩く必要は無いでしょ。暴力だよー!!」

「お前は腑抜け過ぎなんだ。気合いを入れてやらんと」

沢木と呼ばれる中年男性は、純の勢いにつるたえる事なく堂々としている。坊主頭や太い眉毛、角張った輪郭と一致して厳格そうだ。

「沢木さん、鴨井かもしさんはどうしてるの？」

「お前と違って、ちゃんと厨房で皿洗いをしている。お前も今すぐ手伝え」

純は仕方なさそうに立ち上がり、弧影悄然としながら縁側へ歩いていく。一度こちらに振り向き、「沢木さんの意地悪、頭でっかち」と舌を突き出した。

沢木はそれに反応する事なく、腕を組んで純が出ていくのを見ている。真治としては、沢木のような人間の存在がとても有り難かった。

純がいなくなったのを確認すると、先程まで彼女がいた座布団に沢木が腰を下ろす。

「よお、お前が真治か」

沢木が厳しい視線を真治に送ってくる。嫌な予感が走った。

「道夫から聞いてるぞ。かなりひねくれたガキらしいな」

沢木の顔は強張っている。眉間と目尻に並大抵ならぬ深さのしわが作られている。どうして、そんな顔で見られなければならないのか。全く理解出来なかった。

「道夫、こいつ全然喋らないぞ」

「そいつは口数少ないけど、沢木さんの顔見たら、初見の人間は誰だって黙り込んでしまうって」

道夫が笑う。沢木は堅い表情のまま、歯がゆそうに鼻の頭を搔く。

「ちっ。相変わらず失礼な奴だな。言っとくが、俺は怒ってないぞ」

「沢木さんがそのつもりじゃなくても、顔が怒ってるように見えるんだって」

道夫が自分の額を指で小突く。道夫とのやりとりに気骨が折れたのか、沢木はまた真治の顔に視線を向ける。やはり怒っている顔にしか見えなかった。

「お前、勝手に宿を抜け出したらしいな」

沢木の魂胆をちらりと覗き見た気がした。沢木は味方としては頼りになりそうだが、敵にすると尚厄介な人間のようにだ。

「はい」一先ず頷いておく。

「まあ、これくらいの歳つてのは遊び盛りだからな。遊びたいだけ遊べば良いんだ。でもな、親に心配掛けるのは良くねえぞ」

「はい」分かりました、と真治は付け足す。

「沢木さん、その顔じゃなかったらすぐえ好かれるのになあ」道夫がにっと笑う。

「どいつもこいつも、いちいち人を顔で判断し過ぎだ」

沢木の顔は依然として怒気が感じられる。声色から、これは憤っているというよりは嘆いているのだろっとな、と真治は判断する。

「さて、俺も夕飯をいただくとするか」

沢木がまだ破れていない箸の袋を掴む。

「そう言えば、沢木さんは戻らなくて良いのか？」

「純と交代したから大丈夫だ」

それから沢木の話が延々と続いた。貞義はかなりの頑張り屋で、熱が出ても仕事を続けようとしたと語り、いつの間にか最近の若者は気が合いが足りないという話題に変わっていた。

沢木は、まるで若者の代表だともいうかのように真治の顔を頻りに睨んできた。少なくとも、自分みたいなタイプが現代の若者の多くを占めているとは思えなかったため、真治は当惑した。

「そうだ真治」と法子が呼んでくる。

「明日、みあま神社に行きましょう」

「神社？」なんで神社に行くのだろうか。真治には皆目見当がつかなかった。

「とても有り難い神社らしいの。あんたも何か祈ってみれば良いわ」法子の口の両端が吊り上がる。「例えば、今の恋が叶いますように、とか」

真治はとつさに道夫の顔を窺う。道夫は未だ沢木の長話に付き合わされ、くたくたになっている。幸い、今の法子の言葉は聞いてなかったようだ。

「鴨井さんが、私たちを案内してくれる事になってるわ」

法子が言った「鴨井さん」とは誰だろうか。真治は、先程沢木も同じ名前を出していた事を思い起こす。厨房の方で皿洗いをしているらしいから、おそらくはこの宿の従業員なのだろう。

「あ、そうだ」法子が何かを思い出したように声を出す。真治の心臓がどくんどくと脈打つ。

「もしかしたら、純ちゃんも来るかも知れないわ」

純と道夫がセット……。皿に載せていた箸が、ひとりでに落ちた。真治の産毛が逆立つ。不吉な事が起きる前兆なのだろうか。

千夏と会う約束もしている。どちらを優先するか。悩む必要など無かった。真治にとっては不毛な選択肢だった。

明日、神社に行くのを拒否しよう。

「真治、またどこかに行つたら許さないわよ」

法子がむつとした表情で、真治の退路を塞いでしまった。

「宿泊客がいなくなつて余裕の出来る二時頃に行くわ。余裕って言つても少しだけだから、すぐにお参りは済ませるけど」

暗闇の中にまだ一縷いちろうの光が指していた。真治はほつと胸を撫で下ろす。

神社の件をさつさと済ませ、その後、千夏に会いに行けば良い。

「その神社つて、どこにあるんだ？」

「山の中よ。私たちが村に来る途中でY字型の道路があつたでしょ？ ほら、道夫さんがガードレールを乗り越えた方が近道だつて言つた所」

真治の頭の中で何かが引つかかった。そちら方面の神社には覚えがある。

「村へ繋がつてる暗い下り坂と、明るい上り坂があつたでしょ？」

あれの上り坂の方へ進んでいくのよ」

真治が今日の白昼に通つた道のりだ。

「しばらく山道を登つて行くとみあま神社に着くそうよ」

それは、近くに古びれた半鐘がある、あの神社の事だろうか。真治は焦り始める。

あの神社の付近には、千夏がいた川がある……。

いや、あの神社は「ごてん神社」だから大丈夫だ、と自分自身を励ます。額束に書いてあつた「御天神社」の文字を思い返してみる。

「あつ」真治はたまげた声を出してしまふ。

「何、いきなりどうしたの？」法子が目をしばしばさせる。

「みあま神社の『みあま』つて、どついう漢字なんだ？」

「ああ、美海部村とは違う漢字なのよ。御前とかの『御』に、天使の『天』と書くの」

彷彿

真治はロビーの木製テーブルに座りながら、とても苛立っていた。ピアノを弾くかのように、頻繁に指でテーブルを叩き続ける。

御天神社に行くメンバーは五人で、十四時にロビーへ集合。法子にはそう聞かされていた。なのに、十四時半を過ぎてもロビーにいるのは、たったの二人だった。

「真治、テーブルを叩くのは止めなさい。耳障りだわ」正面に座る法子が言った。

真治はぶすつとした表情のまま、やはりテーブルを叩き続ける。法子は頬を引きつらせていたが、すぐに注意を諦めてしまう。

人差し指と中指、薬指の三本を動かして、鼻歌みたいな感覚で旋律を奏でる。一切意識していなかったため、自分が何の曲を演奏しているのかは分からなかった。

今は、集合場所にやってこない三人の事しか頭になかった。一人は道夫。家族で同じ部屋に寝泊まりしてるのだから、本来は真治たちと一緒にロビーで待ちくたびれている筈だった。しかし、十四時になる数分前に「煙草を吸ってくる」と言っただけで帰ってこない。二人目は純。これは予想通りだった。別段、真治も驚かなかった。

正直な所、この二人が遅刻した時は放置してさっさと御天神社に行ってしまうかと思っていた。その方が真治には都合が良かった。

しかし、よりにもよって、案内役の「鴨井さん」までもが不在と来た。これでは出発が出来ない。

真治は、「鴨井さん」が現れるまでの間に、道夫や純が来てしまわないように願う。「来るな、来るな」と心の内で連呼し続ける。

千夏との遭遇だけは絶対に避けたい。あくまでも可能性の話で、それは僅か数パーセントのものだろう。しかし、万が一にもその数パーセントに当たってしまったら……。

「ねえ、それって何ていう曲？」

突然法子に訊かれ、真治ははつと顔を上げる。声質はこれっぽちも似てないのだが、一瞬、純の声かと思った。

すぐに顔の力を抜き、平然とした態度を装う。「適当に叩いてただけだ」

ふーん、と言いながらも法子は釈然としない表情でいる。「何かその曲、聞き覚えがあるのよね。多分、最近だと思っただけだ」

「気のせいだろ」

「そうかしら。真治、もう一回叩いてみて」

そうは頼まれても、法子がどの曲の事を言ってるのかが分からない。そもそも真治は、自分が何の曲を奏でたかを知らない。

「無意識で叩いてたんだ。どんな曲を演奏したか覚えてない」

「あらまあ。あんたって器用ね」法子が感心する。そうすると、いきなり法子は指でテーブルを叩き始める。真治に比べるときこちない。「えつと、確かこんな感じだったかしら」

両指を駆使した、そのちくはくなメロディーに真治は覚えがあった。覚えはあるが、何の曲だか思い出せない。

唯一の手掛かりとして、頭の中にバラードのイメージが広がる。そのミュージシャンが歌っているイメージも沸いてくる。太い男声だが、優しさが内包されているような。そこまで来てるのに、声はつきりと聴こえない。歯がゆい。腰のかゆい所に手が届かないような気分だった。

そう、これは最近の事だ。中学校の時ではない。もっと近い……。そこでようやく、真治は思い出した。曲名やバンド名、彼らが歌っている姿、そして、この曲にまつわる思い出までも。

喉につつかえていた物が取れるような解放感と同時に、陰鬱な闇が差してきた。身体のあらゆる箇所から血液がさあつと抜けていくような感覚が真治を襲う。

法子は、すぐに真治のおう脳に気付いた。「真治、大丈夫？」

返事がない。真治はうつむきながら、小さく乱れた呼吸をしていた。十数秒後にやっと治まった。

「あなた、顔色がかなり悪いわよ。神社に行くのを止めて、部屋で休んでおく？」

そういうわけにはいかなかった。仮に千夏とメンバーが遭遇したとして、真治がその場にいなければ何の問題も発生しないだろう。千夏を見ただけで、真治と知り合いなどと見抜くのは不可能な筈だ。しかし、千夏がメンバーの中の誰かと知り合いの可能性があった。ちよつと井戸端会議でもして、話題によっては千夏が真治の名前を出すかも知れない。そうになると、厄介だ。美海部村に来る途中で、道端にいる老婦と仲良く話していた事を踏まえると、道夫はかなり顔が広いのだろう。子供たちの面倒をみてる純も同じだ。

田舎は狭くて、みんなが知人だ。ここでそれが生きてくるとは。真治は気分転換の為、一旦木製テーブルから離れ、ガラス張りになつた渡り廊下へ行く。

昨夜は中庭をじっくりと鑑賞出来なかった。夕食を済ませたらそうするつもりだったが、予定が狂った。あれから沢木の話がまたしばらく続き、耐えかねた悦子が癩癩かんしゃくを起こして中断させた。そして真治は道夫たちに無理やり部屋まで連れていかれた。もう夜遅いからほつつき歩かせないと、二人は口を尖らせた。

しかし、この宿の従業員はどこまで自由奔放なんだろうか。真治は募る不満をため息と一緒に吐き出そうとする。

自分たちの部屋にエアコンが無いのも納得がいかなかった。宿泊客の部屋にはしっかりと完備してあるらしく、それ以外の部屋には無い。

それは貞義・悦子夫妻の方針らしく、「クールビズ」なのだそうだ。真治には単なるケチにしか思えなかった。

中庭の中央には大きな柏かしわの木が一本。根元付近は赤茶けた花壇で囲われ、更にそれを囲むように芝や石が敷かれている。

真治は中庭の端に腰をかめる悦子の姿を発見した。小さなコニファーが足元にいくつかある。やや灰色を帯びており、上部は円錐形で下部は円筒形となっている。

悦子は小さくひ弱そうな体で、寄せ鉢を同時に二つ持ち上げ、そのまま室内に入ってくる。匂やかな風が花を渡ってやってきた。

「おや、まだいたのかい」

真治は口をもごもごさせたまま無言で頷く。実は、悦子とはまだ一度も話した事が無かった。例の品定めするような目つきが忘れられない。

「道夫さん達がまだ来ないんです」真治の背後から法子が現れて言った。

「へえ」悦子は不躰に返事をし、寄せ鉢を抱えたまま颯爽とロビーの方へ去ってしまう。一瞬だけ目尻のしわが増していた。

法子は表情を曇らせて立ち尽くす。それを見た真治も表情を曇らせた。それを察してか、法子はたちまち愛想笑いを作る。「あれはピラミダリスっていうのよ。真治、知ってた？」

「いや、知らなかった」

「ピラミダリスは寒さに強いけど、暑さには滅法弱いわ。だから、幼木の時ならインドアガーデンを造れるけど、その場合は室内外をローテーションさせないといけないの。室内に一週間、室外に二週間くらいが理想と言われてるわ」

真治は、法子の声が微かに震えている事に気付いていた。誤魔化し切れない動揺が、虚しさに拍車を掛けていた。

「インドアガーデンにするつもりなのね。きつと今日から一週間くらい、ロビーの隅にでもまとめて置いてある筈よ」

真治は無愛想に頭を前に振る。本人の中では、出来る限りの愛想を撒いてるつもりだった。

「随分と無関心ね。あんた、昨日から花が趣味になったんじゃないの？」

「昨日は趣味だった。今日からは、また趣味じゃなくなった」

「へえ、真治君は花が好きなんだ。意外だなあ」

突如現れたその女声は、法子のものではなかった。甘え方の上手そうな猫なで声の主は、純のものだった。「真治君が花かあ。あ、

でも、芸術家タイプだからありうるかもね」

「昨日限定の趣味らしいけどね」法子がふてくされた顔で補足する。真治は二人を無視してロビーに行き、木製のテーブルに腰を下ろす。三十分以上遅刻してきたくせに、謝罪のひとつも無いのか。不満で頬が膨らむ。

「真治君、ごめんね。貞義じいさんの看病や悦子ばあさんの手伝いもあつてさ」純が両手をくつつけ、申し訳なさそうに頭を下げてる。清花の時と同じように香水の匂いが鼻腔に流れ込んでくる。だが、鼻がひん曲がってしまいそうな臭さだった。頭を上げた純は、またいつものように振る舞い出した。「花かあ。あたしはあんまり詳しくないんだよねえ」

純はふと何かを思い出したように口の動きを制止させ、一寸間を置いてから活動を再開させた。「そう言えば、清花ちゃんが花に詳しくあったな」

清花という言葉を聞き、真治と法子は顔に反応を浮かべる。むずがゆい表情をする真治に反して、法子は嬉しそうだった。

「私たち、清花ちゃんに会ったわ」

「え、清花ちゃん、帰ってきてるんですか！」純の声が弾む。

「ええ、ちょうど昨日帰省したみたい」

「そっか。後で清花ちゃんに会いに行こうかな」純が独り言のように呟いた。たまたま近くを通った悦子が、純を睨んでいた。サボるな、という意味なのだろう。

それからすぐに、道夫と沢木、そして三十台前半くらいの女性が現れた。

髪は肩にかかるくらい長さで、少しだけ茶色が混じっている。右頬に小さなほくろがひとつあり、眉は少し太い。どこか田舎臭さのある顔立ちだ。女性は真治に挨拶をし、「鴨井」だと名乗った。

「外で煙草吹かしてたら沢木さんに捕まって、長話に付き合わされたんだ」道夫が遅刻した理由を説明する。沢木は太い眉を吊り上げ、

口を歪ませている。

「私も同じですよ」と鴨井が言う。喋り方がはきはきとしていて、どこか青年っぽさがある。

相変わらず目に角を立てている沢木に見送られ、真治たちは宿を後にする。

結局、道夫と純の両者が来る事となってしまった。真治の頭は、危惧の念で満たされていた。

真治の予想通り、半鐘が道路脇にある神社に辿り着いた。眩しい日差しなど気にせず、真治は急いで境内に目を走らせた。千夏の姿は今のところ無い。

鳥居の額束には「御天神社」と書かれている。鎮守の杜から降ってくる湿り気ある闇に当たりながら、拝殿に向かって歩いていく。

ジーーーーー……

ジッジッジッジッジッ……

所々からアブラゼミの鳴き声がする。ひとつやふたつではない。

アブラゼミのコーラスだ。

「何で御天神社は美海部村と違う漢字で書くのか、知ってますか？」
鴨井が尋ねてくる。

「元は神社も村と同じ漢字だったけど、こっちの方が神社っぽいから変更した、とかですか？」法子は自信なさげに言う。

「はずれー」これには純が応えた。「法子さん、半分正解ですよ」
純は子供のように無邪気な笑みを浮かべ、今度は真治に顔を近付ける。「真治君は何でだと思っ？」

真治は無表情に首を傾げる。「つまんない奴だな」と道夫が横からからかってくる。

「美海部村と御天神社は、実は全然関係が無いんです」鴨井は得意そうに顔を綻ばす。愉悦に浸っているようでもある。こういった所から、三十代前半の外見とは不一致な若々しさを感じる。

「この美海部地区は、昔は違う囲い方をした地区だったんです。そ

の時は海に面している部分がありました。漢字は、漁師という意味の海人（あま。漁師の古い言い方）や女性の方の海女（あま。上代（奈良時代）に朝廷に仕えた海部あまへという部民から来たとも言われています。どれが正しいかは分かりませんが、どれも海と密接してるからその命名ですので、ここまでは法子さんの予想と大体一致しています」
意気揚々と語る鴨井の顔は、二十代と見間違えてしまいそうだった。大人としての品格を身につけながら、若き頃の感覚もしっかりと保持した風だ。

「その、今とは形も大きさも全然違う頃、この神社は美海部に含まれていませんでした。櫛丑なづしという地区に入っていたんです。社伝によれば、その頃からこの神社は『御天寺』と名乗っており、農民達から大層支持されていたそうです」

「それで、後から美海部地区として御天神社も含まれた。つまりは、偶然だったという事ですね？」

「はい、そういう事です。同じ『みあま』ですからね。余所から来た人は決まって、何で漢字が違うのだろう、と疑問を抱くんです」

「もう一つ疑問ですけど、元は神社でなく寺だったんですか？」

「いえ、元から神社として創建されたんですよ。神仏混淆こんぶくわうと言いまして、土着の神祇信仰と仏教の信仰を折衷して一つの信仰体系に習合する現象があったんです。後に仏と神は性質が違うとなりましたが、当時は同格だったのでごっちゃ混ぜだったんです」

「なるほど」謎が解け、法子は満足げな顔となった。その様子を見て、鴨井が相好を崩す。

この話題の間、真治たちは鎮守の杜の下でずっと立ち止まっていた。頭上の薄らとした暗闇の中では、存在を示そうとアブラゼミたちが必死に鳴き立てている。

まるで自分の事のように喜んでいた鴨井だが、はっと目を丸くする。「無駄話をしてしまいました。すみません、早く拝殿に行きましょ」

そう言って、鴨井は忙しなく先行していく。真治たちもすぐに後

を歩き始める。

「別に無駄話じゃなかったのに」

「鴨井さんはとっても腰の低い人なんですよ」

「腰が低すぎる気もするけどな」

「真治君に少しだけ分けなければ良いのになあ」

「ははは。確かにな」

傍らでそんな言葉が飛び交っていたが、真治には聞こえてなかった。鴨井の『後ろ姿』に、己の目を疑っていた。

鴨井の肩まであるミディアムヘアに、枝葉の隙間から抜けてきた光の筋が刺さる。その姿は、『千夏を連想させた』。

千夏のような神秘的な霊気を放っている訳ではなく、顔も全然違う。だが、後ろ髪がそっくりだ。そう意識して見てみると、細身で背格好も千夏に似ている気がしてきた。鴨井の後ろ姿に、あの自然に解け込むような霊気を足せば、千夏の後ろ姿と同じになりそうだし、しかし、それがどうしたと言うのだろうか。顔が似ているのなら親子の可能性は無きにしも非ずだが、ただ後ろ姿が似ているだけではないか。真治は、自分の無意味な憶測に呆れる。

アブラゼミが鳴き頻る境内は、奥に進むほど暗さを増していくのが見て取れた。形を持たない恐ろしい何かが、潜んでいる気がした。真治の体に、恐怖にも似た奇妙な感覚が走った。鴨井の件は単なる偶然で、何も起こらないでくれと願った。

拝殿に近づくにつれ、周囲の景色が明色から暗色に変わった。陰鬱な影や湿気も増大してきた。石の舗道が拝殿まで伸びている。真治たちの靴の裏が敷石と触れ合い、乾いた音が発せられていたが、境内に鳴り響くアブラゼミの声にかき消された。真治たちを包囲するように、鳴き声が四方八方から飛んでくる。途中で純が何かを喋ったが、誰もはっきりとは聞き取れてなかった。

情け程度の小さな隨身門をくぐると、寂れた葡萄色の^{えび}拝殿に辿り着く。屋根は山の形状をした切妻造となっており、棟木が縦に通っ

ている。縦長で筒抜けとなつた拝殿の奥には一体となつた幣殿が、境内の片ほとりには手水鉢てみづばちが見受けられた。敷地は小さいが、とても由緒正しき神社だという事がすぐさま分かる。ここまで境内に入つ子一人見掛けなかつたのも相まって、真治の不安は余計に膨張していく。

まず最初に、鴨井が賽銭箱へ小銭を入れる。真治たちも各々小銭を入れ、手を合わせる。真治の願いは、「今ここで、千夏と遭遇しませんように」だった。

真治が目を開けると、千夏に似た鴨井の後ろ姿が真ん前にあつた。真治はすぐに細身に垂れる栗色の髪から目線を外す。この件は気にしない事にしたが、やはり視界に入るとそもいかなかつた。

道夫と純が同時に何かを言ってきたが、真治は無視した。全ての音をかき消すアブラゼミの鳴き声が、とても有り難かつた。法子が微かににやけていたが、それも無視した。どうせまた、ろくでもないことを考えているのだろう。

賽銭箱の前で一分程が経ち、鴨井が聞こえないと分かりつつも何か言葉を発した。それを読み取り、真治たちは踵を返した。

その時、木々の隙間を人影が這つた。

真治の顔は、青ざめていく。

ジツジツジツジツジツ

ジツジツジツジツジツ

鳴き声が邪魔で、法子たちの進行を止められない。真治は正視出来なくなり、顔をうつむける。

隨身門の死角から清花が現れる。更にその後方から、面倒くさそうな顔をした隼人も歩いてくる。洒落てはいるが、二人ともTシャツにジーンズと、昨日よりもラフな格好だった。真治たちと一緒に、急斜面の坂道を上ってくる為のようだ。

法子や純だけでなく、道夫や鴨井も嬉しそうな表情を顔に浮かべた。眉根を寄せる真治を置き去りにし、双方が歩み寄っていく。

清花たちと合流し、道夫の口が開いた瞬間だった。アブラゼミの

鳴き声が、突如一斉に止んだ。

純が判然としない顔つきで「あれ？」と言う。誰も反応しない。

あれほど騒がしかった蝉たちが、教室に教師がやってきた時のように、ピシヤリと黙り込んでしまった。それに釣られ、皆も口を紡いだままでいる。口を開きかけた道夫もすぐに閉じてしまった。

颯々（さっさつ）たる風が境内を通り抜け、大きな杜がカサカサと音を立て、地面に様々な影の模様をつくる。清花の長い黒髪もリズムに合わせて靡く。

真治は、この神秘的な空気に覚えがあった。昨日はこの現象の後に

すぐにまた境内に目を配る。廃れた葡萄色の拜殿。暗緑色の鎮守の杜。小さな隨身門。せつかく会ったというのに挨拶のひとつも無く、静寂に支配された道夫たち。

恐れていた事態は起きない。気の所為だろうかと真治は鼻息を立てる。

しかしそんな時、視線が背後から刺さった気がした。それと同時に、境内を取り巻いていたのは違う空気が漂ってきた。その場の全ての空気を攪拌かくはんするように、それが放り込まれた。

木陰にいたとはいえ、盛夏の熱は健在だった。なのに、真治のこめかみに冷たい汗が伝う。恐る恐る、振り返ってみる。

拜殿から見て西側、真治たちのいる所からは東側に、杜に見下ろされた小さな小道がある。

そこに、千夏がいた。

白いノースリーブに膝丈のスカート、帽子。昨日と全く変わらぬ全身真っ白な格好をしている。透明な肌からは、自然と一体化したような靈気が放たれている。青空の中に屹然と居座る太陽みたいに、圧倒的な存在感がある。

皆の視線が千夏に集まる。誰ひとり言葉を発せられない中、ぽかんとした表情の純が、辛うじて小さく呟いた。

「……妖精だ」

不意に音も立てず現れた千夏。真治は、奥歯に物が挟まったように口を歪ませる。

誰も純の妖精発言に反応を示さない。ただ静かに、立ち尽くしている。

真治の背中を生暖かい汗が這う。麻痺したように体の感覚が無い。呼吸をしている感覚だけが残っている。千夏もその場に立ち止まっており、相互が木偶でくのように固まる形となっている。

真治は千夏の瞳だけを熟視する。微動だにしない紺色の瞳は、真治というよりはこちら側全員を見ているようだった。

誰もが千夏の反応を待っている。そうしなければ、何も始まらないという空気が漂っていた。

静閑な境内に微風が吹いた。スカートや帽子が若干揺さぶられたが、千夏は一切気にしなかった。

そこで遂に、千夏が口を紡ぐ糸を解いた。だが口を半開きにしたまま止まり、そこから言葉は出てこない。

不安とも周章ともつかない表情を浮かべ、瞬く間に踵を返す。瘦躯がぐるりと反転した際、白地のスカートは無風の中で蝶のようにひらりひらりと可憐に舞った。

千夏が去ってから、そこに残された真治たちはだんまりしていた。音も無く現れ、音も無く消えた神秘的な少女。今の気持ちを形容する言葉が見つからない。

数秒後、痺れを切らしたように純がアヒル似の唇を動かす。「あの子、誰？」

「鴨井さんの知り合いですか？」法子が言う。「後ろ姿が似ている気がしました」

鴨井はその発言に驚き、目を白黒とさせながら首を小さく横に振る。

「私に？ そんな、私も全然存じない子でした。年齢的に、清花ちゃんや隼人君の知り合いではないのですか？」

「いえいえ、わたしも初対面です」清花が慌てて否定する。隼人も

首を傾げる事で否定を表す。

「じゃあ、もしかして」純がそつと真治に視線を向ける。「真治君の知り合い？ 昨日言ってた妖精って、あの子の事じゃないかな？」純は『妖精』という単語を口にした時には既に、目遣いが変わっていた。難解な謎を紐解いた喜びを必死に抑えているようだった。

しかし、今の真治には差ほど重要な問題では無かった。背を向けて去っていった千夏の心理をどうにか読もうとするも、全く以てお手上げだった。

千夏の後を追わなければ、もう二度と会えなくなるかも知れない。そんな予感が頭の中を支配する。

周りの誰かがはやし立てる声など気にせず、真治は全力で駆け出していた。

呼吸の間隔が段々短くなり始めている。全身で脈打っているような感覚がある。疲労はしつかりと体内に浸食していたが、真治はそれに気付かないふりをしていた。それを気にしてしまったら、途端に麻酔が切れてしまう事を無意識に理解していた。

千夏の髪が木漏れ日の中で舞ったあの時間は、鮮明な映像で保存され、脳裏で何度も何度も壊れてしまいそうなほど再生されている。千夏を追って、より湿度の高い山林に立ち入った真治だが、彼女の姿を見つucker事が出来ずにいた。色濃い木陰の中を、途方もなく走り続けているだけだ。諦観が徐々に心に染み込んできている。抑え込んでいた疲れが、今にも溢れかえろうとしている。

丈高く伸びた草花が運動靴に絡みついてくる。まるで真治の行く手を拒もうとしているかのようだ。

千夏に、もう会えない……。

麻酔が切れた。真治は遂に溜め息を漏らしてしまう。脚の力がふと抜け、崩れるようにひざまずく。大量の汗が地面に染み込む。

千夏も、片桐のように去ってしまった……。

体が震えている。全身の感覚を完全に放棄し、そのまま地に伏し

てしまいましたかった。全ての辛い現実から逃れられる気がした。

また明日会える？

昨日の千夏の言葉が、真治の頭の中で響いた。確証も無いのに、千夏との約束が、真治を現実世界に留めてくれた。

そうだ、約束したんだ。絶対、千夏に会えるんだ。

真治は全身に力を込め、立ち上がる。強い眼差しで、清閑な山林の先を見る。真治は再び足を動かし始めた。

気付けば、昨日の川べりに再び辿り着いていた。真治はたどたどしい足つきで本流に近付いていく。

真治を躓かせようとばかりに辺りに撒布された白い小石。それが、千夏の服装を連想させた。レースのシャツに膝元まで伸びたスカート、帽子。身に着けている物全てが真っ白い千夏。極めつけに、美白の肌ときていた。

千夏はまさに「白」だった。他の誰にも真似出来ないほどの「白」なのだ。昨日も今日も白い格好だったからか、真治には千夏が他の色を身に纏う姿が想像出来なかった。

「あっ」真治はふと声に出してしまう。今更になって、ある疑問が浮上してきた。

何故、千夏は昨日と同じ服装だったのだろうか？

御天神社で遭遇した時はそれどころでは無かったが、よくよく考えてみればおかしな事だった。思春期である高校生くらいの少女が、同じ服を二日連続で着るなど、有りうるのだろうか？

似たような真っ白い服装を自分が同じだと勘違いしただけなのだろうか？ それにしても、あんなに似た格好があるだろうか？

真治の疑問符は取れそうも無かった。

そんな事をしているうちに、支流の川面が眼前にまでやって来ていた。

川底が見えるほど透明な川に両手を突っ込む。途端、手のひらから肘の辺りまで冷たい感覚が走った。天然の恵みを両手のお椀で掬

い上げ、大きく開いた口に入れる。焦り過ぎたからか、口に入ったのはほんの僅かで、大半は汗だらけの顔に掛かった。鼻に水が入り、瞬間的に吐き気がした。

一息つく間も無く、また水を掬う。全身が震えている中、今度は慎重に喉へ通す。真治はようやく一息をつく。

ジー

……

ジッジッジッジッジッ……

どこに行こうと、アブラゼミの鳴き声と照りつける真夏の日差しだけは変わらず有り続ける。ちっぽけな真治には、それをどうする事も出来ない。大自然の広大さと、それに溶け込む千夏の偉大さを知った。真治はまた長嘆息する。

ある程度汗が収まり始めてるのを確認すると、真治はまた歩き出した。今度は、昨日と同じ森の中へ入ってみようと思った。

その時、周りの空気を支配していたアブラゼミの鳴き声が止んだ。真治の心に安堵と深憂が同時に起きた。真治は物々しく顔を上げる。本流を挟んで反対側に、千夏がいる。

やはり全身が白い。表情は距離があって見えない。真治と千夏はほぼ同時に、陽極と陰極を向け合った磁石のように本流の近くまで歩み寄る。ようやく互いの顔を視認出来るまでになった。

千夏もいかめしそうな表情をしている。目線が合った途端、千夏は顔をうつむけてしまう。真治は、申し訳ない気持ちで一杯になる。このままでは駄目だ。真治は運動靴とくるぶしソックスを脱ぎ、

川に向かって裸足を突き出す。川面に陰りが出来る。

そこで千夏が真治の行動に気付き、たまげた表情をする。「駄目、危ないよ」

そんな声を無視し、真治は足を垂直に勢いよく振り下ろす。水飛沫が夏日を反射させるのと同時に、足に凄まじい冷めたさが伝った。水が膾^{すね}まで達した頃には、全身が震え始めていた。

真治はかじかむ足を必死に動かし、川を前進する。中流域なので流れはさほど速くは無かったが、水深は腰の所までであった。気を付

けなければ、水禍の危険がありそうだ。

千夏は肝を冷やしており、頻りに「大丈夫？」と声を掛けてくる。爪先にぬめりとした感触があった。珪藻や魚類かも知れなかったが、真治は確認せずに歩を進め続けた。ズボンやＴシャツが水を存分に吸収しており、歩調は遅くなっていた。

真治はやつと千夏の方のみぎわまで辿り着く。膝まで川から上がった瞬間に気が緩み、水中の小石に躓いてしまう。

足に力を入れて必死に持ち堪えようとするも、不意の出来事だった所為でタイミングが遅く、そのまま倒れてしまいそうだった。しかし、慌てて千夏が川の中に踏み込んできて、白くて華奢な腕で真治の体をどうにか支えた。

その際、千夏の帽子がぼろりと頭から離れた。白い帽子はそのまま川に着水し、渡り舟のように優雅にのんびりと流れていつてしまった。

「帽子、ごめん」白い小石を指先で弄りながら真治は言った。

「ううん、別にいいよ」千夏は余所余所しく応える。

真治と千夏は、川原近くの平たい岩の上に二人で腰を下ろしていた。二人とも裸足を地面には着けず、宙にぶら下げている。千夏は濡れてしまったサンダルを傍らに置き、日光で自然に乾燥させている。真治はズボンやＴシャツが濡れていたが、千夏の前で脱ぐわけにもいかず、軽く水を絞り出す程度にしておいた。

「色々のごめんなさい」千夏が謝る。

真治は余計に落ち込んでしまう。千夏は初めて会った時、「ねえ」と呼び止め、次には「色々のごめんなさい」と言った。また繰り返されたのだ。彼女に気を使わせてばかりの自分が、不甲斐なく感じた。

「俺こそ、ごめん」

これも昨日、気まずい空気をより濃くしてしまった言葉ではないか。そうは分かっているも、己とは別の意思に操られてるかのよう

に、真治の口は勝手に動いてしまう。

今まで処世術だと思いついて込んで擦り込ませてきたそれらは、ただの現実逃避の道具でしかない事を真治は知った。真に世界をみてないから、空虚な言葉ばかりが出てきてしまうのだ、と。

「あ、さつき一緒にいたのは家族？」沈黙を破るため、どうにかして出した言葉みだだったが、千夏はすぐにその行為を悔いたように首を枝垂れさせる。真治は、初めて見る千夏のつむじをじっと凝視してしまう。頭のちょうど中心に綺麗な渦となっている。

「ああ。家族と、泊まってる宿の従業員と、後はちよつとした知り合いの姉弟」真治は答える。何で千夏がその時に走り去ってしまったのかは、訊かなかった。

「そんなに色々な人がいたんだ。凄いね、賑やかだね」千夏がやや声を上げて微笑むが、真治には下手な演技にしか見えなかった。テレビで観た、餃子をさも美味そうに食す三流タレントにそっくりだと思った。

「賑やか過ぎても疲れるだけだって」

「そうかな？ わたしはそんな環境が羨ましいなあ」

「いいや、静かな空間が一番だって。俺は、弧絶した森の奥深くなんかに住んでみたいんだ。『石に枕し流れに漱ぐ』^{くちすす}ってやつ。永住とまではいかなくても、大きな岩の上に座りながら『森の声』なんかを頻りに聴くのは、ある意味夢だと思わないか？」

真治のその言葉の後、千夏は悲しそうに目を細め、黙りこくってしまう。応答が途絶えた事は気になったが、真治は問い返したい衝動を必死に抑える。

仕方なく、目の前の森や川の清流をぼうつと眺めて待っている事にした。屹然と生い茂る木々たちに視線が吸い込まれる。漲る生命力が宿っている。川の流れる音しか聞こえない空間に清風の音が割り込んできた。

通常ならまだ鳴いてる筈のアブラゼミはどこに行ったのだろうか
と、様々な憶測を巡らせてみる。

それは、大自然が全てと繋がっているからではないかと思った。人間をはじめ、アブラゼミも、森林や川も、もう少し大きな視野で見れば山や海も。全ては運命共同体で、共振するのではないかと、と。しかし、どんな人間にも共通して存在する能力なのに、大半は使いこなせない。そもそも、己にそんな能力がある事すら知らない。自分もそうだった。

でも、千夏にはそれが出来た。自覚があるのかは知らないが、彼女は自然との調和が可能な人間なのだろう。

アブラゼミの鳴き声が止んだのは、千夏の「静かな空間が欲しい」という願いを彼らが察知し、気を利かせてくれたから。

とても非現実的で科学的証明は不可能な浅慮だったが、真治にはそれが一番納得が出来そうだった。

「わたしのこと、怪しいと思ってる？」まるで真治の頭の中を見据えたように、千夏が尋ねた。

真治はすぐに、「そんな事ないって」と返す。

「うっん、絶対に不信感を抱いてる筈だよ。例えば、鳴き声の事とか」

「セミが鳴き止んだのは、偶然だって」

「ほら」千夏は怒りとも悲しみともつかない表情でからつとした声を出す。「ちゃんと分かっているじゃない」

真治ははっと目を丸くする。千夏の罠に引っ掛かってしまったようだ。

「ねえ、何かわたしに訊きたいことは無いの？」

「無い」

「本当に無いの？」

「多分、無い」

「遠慮しないで、はっきり言ってくれていいよ」

あれほど神秘的で高嶺の花のように感じていた千夏が、今は自分にこの場の全てを委ねてくれている。真治は、自分の出すべき答の重大さにたじろいでしまう。

訊くべきか否か。人生の大切な分岐点に立っている気がした。これを失敗すれば、待ちかまえているのは片桐の時と同じ結末なのだろう、と。

千夏は「何でも訊いてくれていい」と言っている。ならば、是非とも尋ねてみるべきではないか。しかし、真治はそれではいけないと思った。自分が抱いてる懷疑は伏せ、別の質問を試してみよう。話題を変えるべきだ。

理由など露ほども無く、何の保証もされてない「勘」によるものだった。頭を切り替えた途端、浮かんできたものがあつた。

「御天神社の『みあま』って、どうして美海部村の『みあま』と違う漢字だと思う？」

「えっ？」千夏が素っ頓狂な声を発する。そのまま小さくて鮮やかな桃色の唇を、楕円の形で開きっぱなしにしていた。

それからまた長いしじまが落ちてくるが、千夏は目をぱちくりとさせながら思案に暮れている顔をしていた。しばらくして口が動き始める。

「たまたま同じ読み方だったから、だよな？」

「なんだ、やっぱり知ってるのか」真治は肩をすくめ、ため息を清風の音に溶け込ませる。

「美海部では結構有名な話だもん。村の人が子供たちによく聞かせる話のひとつなんだよ。それにしても、いきなりそんな質問してきたらびっくりしたよ」千夏が笑顔になっている。

真治は、体にのし掛かる見えない何かから解放された気分になる。気の所為か、千夏の顔も安堵を浮かべているように見えた。

「東京ってどんな感じなの？」今度は千夏が真治に訊いた。

「美海部とは全然違うところ」と真治は言う。指で千夏の背後に佇む森を差し、曖昧に宙を漂わせる。「こんな澄んだ大自然はそうそう無い」

「人間以外の生き物は暮らしにくい？」

真治は眉をひそめながら小さく頷く。「詳しくは分からないけど。

高校の生物の授業は苦手だし。でも、工場の煙や自動車の排気ガスなんかで空気が汚染されてる東京よりは、こっちの方が確実に幸せに暮らせる」

また千夏表情が曇る。しかし、今度はすぐに元の澄んだ表情に戻った。あまりに一瞬の変化だったので、真治は自分が幻覚を見ていただけのような気がした。

「ここにいる事だけが、幸せなのかな？」千夏の口がゆっくりと丁寧^{ていねい}に動いて言った。自らの言葉を噛み締めているようでもあった。「上京したいってこと？」

「ううん、そういう意味じゃなくて。『彼ら』の人生において、ここがスタート地点でありゴール地点でもあるのかなって」

千夏も森を指差しながら言ったが、真治には彼女の真意が分からなかった。ただ、千夏の心痛は都会の人間には決して埋められない繊細なものだと自得した。

「運命って信じる？」真治は唐突に尋ねる。

「ううん、もしかしたらあるのかも知れないけど、わたしは信じたくない」

「じゃあ、何でも出来ると思う。俺の高校に高井^{たかい}って奴がいて、『世の中に百パーセントなんてものは存在しない』って言ってた」

千夏が瞬きを数回する。「百パーセントは存在しない、か。何だか哲学的だね。素敵な友達がいって良いね」

「友達じゃなくて、ただの同級生だって」

「あ、そうなの。ごめんなさい」千夏がいたずらじみた笑みをつくる。真治も釣られ、口元が弛緩^{しかん}してしまう。

彼女のひとつひとつの動作に一喜一憂する自分がいる。真治は、初恋の時の初々しくて甘酸っぱい感覚を思い出していた。

しばらく二人は言葉を交わさず、山の端^はにかかる夕日や橙色に染まった森の中の山毛櫨^{まけ}、馬のいななきみたいな声を発しながら頭上を飛び交う駒鳥に視線を向けていた。

そろそろ帰らなければならぬなと思い、真治は腰を上げる。今

し方まで座っていた平たい岩には、真治の形の染みが出来ている。まだ岩に腰を下ろしたままの千夏が、紺色の瞳で真治の事を見つめてくる。「明日も会える?」

「ああ」思索を巡らさずに即答する。あまりに早い応答だったからか、千夏は少し驚いた顔をした後、透明感ある頬を桃色に染めて微笑んだ。

「そう言えば、明日はどこかで待ち合わせしよう」

橙色のフィルターが掛かった千夏は、しなやかに小さく唸った後、「お任せするよ」と返してくる。

そう言われて真治は困った。当然美海部の地には詳しくないのだから、待ち合わせ場所がぱっとは思いつかない。知り合いに出会いにくい場所という条件も含めてしまえば、精々が御天神社や今自分たちがいる川原くらいだった。

「また、ここじゃ駄目?」

「うん、ここ以外に行ってみたい」

「さっきの神社は?」

「ごめんね、そこも嫌なの」

「どうしても駄目?」真治は悪あがきをする。

「どうしてもその二つ以外が良いの。わがまま言っでごめんなさい」千夏の目が潤んできている。

真治は慌てて次の選択肢を探し始める。何故この二カ所を頑なに嫌がるのだろうか。特にこの川原など、彼女は好き好んで二日連続で来ている筈なのに。そう考えていると、真治は驚くべき真相に辿り着いた。

俺の所為だ……。

そもそも女の子がこんな山の中を歩いてきたらどうなるか。体力には個人差があるといえど、全く疲労を伴わないといえれば嘘になるだろう。

千夏は昨日、たまたま一苦勞してこの場所に遊びに来たのかも知れない。それが真治と約束したが為に、この辺びな川原までわざわざ

ざまたやって来たのだとしたら……。

全然汗をかいてなかった事から、千夏の体力消耗の可能性など念頭に無かった。真治は美海部に来た時、女性の発汗量について考察した事を思い起こす。

自分はとてつもない迷惑を掛けたのでは無いか。真治の頭に、どろどろとした憂鬱が染み込んできては、全身へと広がり始めている。とにかく、自分はどんなに苦勞してでも良いから、千夏に楽をさせよう。すぐに「千夏の家はどこにあるの？」と訊いた。

千夏の表情が堅くなる。まん丸い目を更に大きく見開き、口を小さく開けたまま、真治が視界に入っていないかのようにうつむいてしまう。

真治は、せつかく乗り越えた危機をまた呼び戻してしまった自分に、心底愛想を尽かしそうになる。

「あの神社の近くだよ。ずっと村に住んでるのに、神社やこの川やすぐ近くの森とか、そんな所しか行ったことないの。だから、わたしの知らない場所に行ってみたいなって」

真治はようやく千夏の気持ちを理解した。この川原まで来る事が苦なんだと思っていたが、そういう訳では無かったので一先ずは安心した。

次に、千夏をどこかに連れていきたいと思った。人間は自分の所持しないものに胸を焦がす傾向がある。千夏は見知らぬ場所、自分の所持しない「経験」に胸を焦がしている。どうにかして願いを叶えてやりたい。

「じゃあ、明日は正午に一旦ここに集合して、それから千夏が行ったことの無い場所に連れていくよ」

真治の妙案に千夏が瞳を輝かせる。今まで彼女から出たことの無いタイプの笑い方で、本心から喜んでいるようだった。

「うん、そうしよう。わたし、凄く楽しみにしておくね」

身を乗り出しながら無垢な笑みを浮かべる千夏。真治は改めて妖精の魅力、そして、それとの太い繋がりを得た己の明るい未来に心

を躍らせるのだった。

二人が別れる時には、既に真治の衣服は乾き始めていた。先程から衣服を伝ってやってくる寒気は、幾分か弱まっている。わざわざ川に入ってまた濡れるというのは気が進まず、真治はこちらの岸側から帰ることにした。

昨夕もあちらの岸に出たものだから、真治は帰り道を知らない。しかし、向こうの川岸とはそれほど距離は離れておらず、大体の方向を把握してさえいればいずれ知ってる道に合流するだろうと思っていた。

それが根本的な失敗だった。真治は見知った道に出れず、途方に暮れることとなってしまった。

美海部に来た時と同じ山坂の舗装路に出たは良いが、いくら進んでも辺りの山林の色が重苦しく濃くなるだけでしかない。日没による相乗効果もあるようだった。山裾すら木立の暗緑色に隠れて全く覗けない。真治の不安は膨張するばかりだった。

そんな真治を嘲笑うかのように、遠山で音程を狂わせた野鳥の間抜け声があった。真治は必死に拳を固め、ギチギチと歯を噛み締める。胃から喉元までせりあがってきてる吐き気を必死に抑え込んだ。

仕方なく前進していた舗装路も、遂には行き止まりに辿り着いてしまう。周りには墨まみれの森しかない。真治は、「この先私有地につき、通行禁止」と書かれた看板を涙目で睨みつける。

数秒後、目眩が真治を襲った。道路脇の木に上半身を預ける。木に面した右肘に力を込めるも、磁力に引きつけられたように離れられない。

もう日は所在してないというのに、真治の額や腕にねっとりとした粘り気ある汗が吹き出してくる。せつかく乾いたTシャツが再び湿り始める。

このままでは、帰れなくなるかも知れない。日没と連動して、真治の心の中の陰りも増加する。

千夏の所に一旦引き返そうとも考えたが、彼女がまだ川原にいる可能性は極めて低い気がした。万一いたとして、これ以上彼女の帰宅時間を遅くするわけにもいかない。

自分が危機に面しているというのに、真治は千夏を優先する事を選んだ。今の彼には、その結果訪れるものなどどうでも良かった。

ジー……

ジッジッジッジッ……

真治の粹に感心したように、アブラゼミが励ましの声を送ってきた。辺りはすっかり暮色に飲み込まれていて、もう既に時間外だといつのに、彼らは再び鳴き立てた。

真治には、森のどこかから聞こえるそれが、『神からの託宣^{たくせん}』に思えてならなかった。

この時間、ライトのひとつも持たずに森へ入るなど、自殺行為に等しい。そうは分かっているが、真治は森の中の『声』へ向かって歩きだす。

携帯電話をU字型に閉じたままにし、横に並ぶ三つのボタンを順番に押していく。しかし、どれもサイドディスプレイが青白く光るだけだった。手のひらサイズでぼんやりと暗闇に浮かぶその灯りは、とても頼りない。

試しにもう一回横一列のボタンを、今度は長時間押ししてみた。一つ目でカメラ機能が出てしまい、二つ目でマナーモードになってしまった。

そして三つ目の、他より少しだけ小さなボタンを五秒ほど押してみる。途端、目眩へといざなう強烈な光が、獲物を狙う獣のように飛び出してきた。

やっと便りになる灯りを得て、真治は乾燥した空間に吐息を吹き込む。呼び声のする、森の奥深くへとライトの光を移す。地面やその上に散乱した枝などに躓く心配もあったので、自分の足元もたまたまに照らしておくようにした。森、足元、森、足元と照度の高い光が往復する。

ジー——……

ジツジツジツジツ……

導きの声が段々大きくなってくる。今まで散々聞いてきたものなのに、緊張がほどけない。地を這う暗闇は、ライトに怯えながらも頻りに真治の足に絡みつこうとしてくる。何倍も背の高い木々が、真治を冷ややかに見下ろしている。

しばらく歩き続けると、千夏の時のようにまたアブラゼミの鳴き声が止んだ。唐突に静寂が訪れ、真治の頭に悪寒が走る。

立ち止まって、必死に倉卒な呼吸を整えようとする真治の耳に、微かな音が流れ着いた。まだその音源とは距離がありそうだったが、それは虫や野鳥の嘲笑とは明らかに違うものだった。

土を固めた人工的な道に出る。携帯電話の灯りの中にまだ姿を現さない音源に向かって、あゆみを運ぶ。金属を伝うのとは全く品質が違う、自然を流れるその音が近付いている。潤いを求める喉を必死になだめ、その音を聞く。

一分程が経つと、頼りない灯りの中に、三メートル程の小さな滝が入り込んできた。道夫が「ゴクリ滝」と言っていた滝のようだった。

真治は急いで檜の懸樋かけいの下に手を差し出す。携帯電話を小さな石の上に放置すると、程なくしてライトが切れ周りが暗くなったが、真治は気にしなかった。

歪な形のお椀に水を溜め口に含む。またすぐにお椀が作られる。飲む、お椀、飲む、お椀。その繰り返しだった。

洗顔も済ませ、ようやく呼吸が落ち着くと、今度は「ゴクリ滝」とほぼ垂直に交わる浅川のせせらぎに耳を傾ける。

昨日の昼間はクマゼミがめい一杯鳴いていたが、今は時間外なので完全に森の中に潜んでしまってる。交響曲は不可能のようだ。代理になりそうだったアブラゼミも、もう今は知らんぷりを貫き通している。風が通り抜けることもなく、ただ静寂と滝の音とせせらぎだけが辺りを支配している。

ようやく見覚えのある場所に着いたは良いが、真治は困り果てていた。ゴクリ滝は中継地点に過ぎず、これから先のゴールまでの道のりは分らないのだ。

再び携帯電話の強烈な灯りを点けながら、このゴクリ滝から先へ進んでみようか真治は悩む。もしかたら、昨日と同じY字型の分岐点がある道路に出れるかも知れない。

しかし、同じ場所でありながら、姿を全く別のものに変えてしまっているこのゴクリ滝を見ると、それは勝率一割以下の無謀な賭けに思えた。

U字型に畳んでいた携帯電話を開く。必死に抵抗していた灯りが弱まり、闇はここぞとばかりに真治を包み込み圧迫してくる。

真治はそんな恐怖に耐えながら、メインディスプレイのアンテナの有無を確認してみる。やはり、「圏外」の文字が一縷の光を遮っていた。それどころか、そこに表示されている数字に気骨を折られてしまいそうだった。

ここで夜が明けるのを待つというのも考えてみた。しかし、この手の山には危険な生き物がいる。山蛭やまひるやマムシ。こんな蒼然としていて、足元もちゃんとしてない所にとどまるのは、危険極まりない生物の授業をつつらうつらとしか聞いてない真治でも知っていた。

千夏とだべっている時にも思い出した生物の授業。ほとんどが眠気との戦いで時間が過ぎていくのだが、真治にとってそれは忘れられないほど特別な意味を持っていた。

真っ白くて脆そうなチョークが、紺色の黒板を引つ掻く。黒板は堪らず鳴咽おえんを漏らす。静まり返った空間によく響く。

真っ白なチョークと、その所持者の脂ぎった頭部に僅かに残された白髪。黒板の鳴咽と、チョークの所持者の嘆なげいているのか呻うめいているのか、はたまた囁ささやいているのかよく分からない喋り声。不思議な組み合わせにだけ、真治の意識は向いていた。

毎回真治には、これが生物の授業であるなどという認識はない。

夢と現実の間にある奇妙な空間にいて、チャイムが終了を告げるか教師が去って教室内に喧騒が巻き起こると、真治は突然現実の世界に引き戻される。そこでようやく、黒板に書かれたたんぱく質やらブドウ糖やらポリペプチドやらの文字を見て、ここで生物の授業が行われていたことに気付く。

そんなことが毎回繰り返されるだけの生物の授業。しかし、真治の記憶に深く刻まれたある日から、それは変わっていった。

その日の生物の授業も、始まってから四十分ほどは普段と何ら変わりない、ありふれたものだった。当然、真治も夢と現実の狭間にふわふわと漂っていた。

数学や現代文など、他の授業の際には残り時間を頻繁に確認する真治だが、生物の授業だけは確認をしない。そんな動作すらできないくらい、夢の世界からの触手に絡みつかれてはほどけないでいるのだ。

教師がチヨークをケースに仕舞い、大きな封筒をしわだらけな両手で持ち上げる。教師はそのまま教卓から窓際の最前列の机の方に歩いていく。その机で舟を漕いでいた茶髪の男子生徒は、教師が目の前にきたのを察知し、慌てて顔を上げる。

「ねえ、ちよつといい？」

教師を観察していた真治ははつとして、女声が発せられた真横の席にゆっくり首を捻る。照れくさそうな笑顔と、横に合わされた両手があった。

「教科書忘れちゃってさ。悪いけど、見せてくれる？」

その女子は、ブラウンの髪を水色のピンでアップにし、額を大きく露わにしている。唇に濃いグロス、チワワのような丸くて大きな目の周りにはアイシャドウが満面に塗られている。化粧が派手だが、元々が小さくて端整な顔だからしく、彼女にとてもよく似合っている。

赤いリボンが付いたYシャツの上に紺色のカーディガン。艶麗な彼女は見事に着こなしている。皆と同じ制服なのに、彼女のだけ色

気を放つ道具と化している。真治は、他の生徒の姿を認識できなくなる。

「教科書って、どういうこと？」上擦り気味な声で訊く。

「ほら、今、先生が演習プリントを配ってるじゃん。あれ、教科書ないといけないみたいで」女子が、封筒からプリントの束を出している教師を指差す。

「ああ、なるほど」真治は頷き、そしてすぐにまた頭を縦に振った。

「ごめん、生物の教科書は持ってない」

女子が首を傾げる。耳に軽く載っていた、辛うじて見えるくらいの細い褐色の後れ毛おくが、はらりと宙に垂れ下がる。「持ってない？ 忘れたんじゃない？」

「うん、教科書は買ってない。生物の授業は嫌いなんだ」

「生物の授業が嫌い？」ブラウンの女子がチワワのように潤った目をしばたかせる。その時、前列の男子生徒が振り返り、彼女にプリントを渡した。ちょうど真治の所にもプリントがやってきた。

ブラウンの女子は再び真治の方に向き直る。「嫌いなのにわざわざ生物の授業を選択するなんて、あたしには理解できないなあ」

「生物の授業は先生に勝手に決められたんだ。とにかく、この授業の何もかも解剖しようって姿勢がいけ好かないんだ。世の中には知らなくていい『神秘』がうんとある。それを全て解明してしまおうなんて、夢がない」

真摯な顔でそんなことを言ったからか、ブラウンの女子は訝しそうに目をぱちくりとさせる。周りの生徒たちは既に、見開いて癖をつけた教科書と演習プリントとを交互に見ている。書き込みを始めている生徒もいる。

カツカツカツと、シャーペンがプリントを引っ掻く音があちらこちらからする。それだけを除く、教室内の人間に纏わりつくあらゆる音たちが死滅してしまったようだった。

女子は黙り込んで真治から視線を僅かに逸らしている。真治はこの状況をしっかりと把握できてなかった。教室内を支配する静寂

の所為なのか、自分が失言をしてしまったからなのかよく分からない。

ブラウンの女子は真治に何の合図もせず彼女の隣、真治の二つの隣の席にいる制服がいまいち似合っていないロングヘアの女子の肩を人差し指で突つづいた。既にプリントに記入を始めていたロングヘアの女子は作業を中断させ、ぶつきらぼうにこちらに顔を向ける。

ブラウンの女子がロングヘアの女子の耳元に顔を近付け、何かささやいている。真治はさり気なく耳を傾ける。咳の一つでも教室内にえらく響いてしまうのに、彼女が何をぼそぼそ話しているのか聞き取れなかった。

それから少しして、ロングヘアの女子とブラウンの女子が自分たちの机を密着させた。ロングヘアの女子の教科書が開かれた状態で二つの机の継ぎ目に置かれる。真治から見える、ブラウンの女子の外はねに纏められた後髪が、天井に突きつけるように持ち上がった。それと同時に、褐色が僅かに行き渡ってない襟足が現れた。

ブラウンの女子はロングヘアの女子の教科書を見て、丁寧な書き方で演習プリントの空欄を埋めていく。真治はただ何もせずに、彼女たちや演習プリントと必死ににらめっこしてる生徒たちを眺めているしかなかった。

白髪の教師が机の間を徘徊している。生徒たちは必死に演習をやっている気付かないのか、全然反応を浮かべない。教師が間近にやってくる、真治はプリントにのんびりと氏名を記入し始める。

教師の丸まった背中が見えるようになると、真治はほつと息を吐きながら握っていたシャーペンをプリントの上にとりと落とす。

ブラウンの女子はシャーペンの突先を机に押し付け、芯を仕舞う。ブラウンの女子がロングヘアの女子に再度礼をしている。プリントへの記入が終わったようだった。

真治は自分の手元にある白紙の答案用紙に目をやり、愁いを帯びた面差しとなる。ロングヘアの女子と一瞬視線が合った。自分にも教科書を見せてほしいと希^{こいねが}う真治を余所に、ロングヘアの女子は無

表情なまま、机を元に戻す作業に取り掛かりだした。

真治は何もかもを諦めて眉を八の字にしていたが、ブラウンの女子が今度はこちらに机をくつつけてきたのでたまげる。

「はい、お待たせ。字がめっちゃ下手だけど、我慢してね」ブラウンの女子が笑いながらぼそりと言った。しつかりと解答欄が埋められたプリントが真治の机にそつと滑ってくる。

真治はブラウンの女子のうぶな瞳に目が釘付けになりそうだった。彼女から視線を外し、平坦な口調で「ありがとう」としか言えなかった。

それから真治は、教師に見つからないよう細心の注意を払いながら答えを速筆で写していった。途中、二人が言葉を交わすことはなかった。

真治が解答用紙を完成させてから間もなくして、教師が終了の合図を出した。教室内は残念な結果からくる唸り声と開放感から出た歓喜の声、ただ単におしゃべりする声で満たされた。

その中で、か弱い体をした教師が声を懸命に絞り出し、後列の方から前列の方へ早くプリントを回すよう促した。

真治は直ちに前の机の生徒へプリントを渡す。同じくプリントを手放したブラウンの女子がこちらに顔を向けてくる。「さっきのこと、同感だなあ」

歯切れよく彼女が言った台詞の意味が飲み込めず、真治は戸惑う。「同感って?」

「ほら、さっき言ってた、解明されちゃいけない神秘の話。あたしも、『神秘』は『神秘』のままであってほしいなって思うよ」

授業の終了を告げる鐘が鳴った。生物の教師は回収したプリントの枚数を銀行員顔負けの猛烈な手さばきで確認し、教室を早々と去っていった。こういう時はよぼよぼの教師だろうがきびきびと行動をする。

教室内は蟻の巣よろしく、目まぐるしく人が行き来し始めた。真治は休み時間に談話することを夢見、筆記用具を片付けている最中

のブラウンの女子に声を掛けようとする。

「片桐、今からダンス部のミーティングあるってさ！」

真治の小さな夢は、教室の入口から大声を出す髪に赤いメッシュを入れた女子によってかき消されてしまった。体育祭や遠足、その他色々な行事において常に中心で目立っている女子だった。

「うん、分かった！ 今すぐ行くよ！」ブラウンの女子は赤いメッシュの女子に負けなくらい大きな声で返事をし、真治の方を向く。「そういうことだから、じゃあね」

ブラウンの女子は筆箱とノートを抱えながら廊下に出た。ブラウンの女子は赤いメッシュの女子と何やら談笑したまま、手品のように死角にぱっと消えてしまった。

理科の授業は他のクラスとの合同授業で、生物の他にも化学や物理が選択できる。

ブラウンの女子には「生物の授業は嫌い」と言ったが、実は真治は理科系の授業全てが嫌いだった。「解明する」のは、生物の授業だけではないからだ。

真治は理科系の選択希望の紙を白紙で提出した。結果、生物に飛ばされたというわけだ。

ブラウンの女子とはクラスが違い、生物の授業以外には特に接点はない筈だ。生物の授業は週に二コマ、月曜日と木曜日にある。ブラウンの女子と会話したその日は月曜日だった。

真治の頬が緩み、笑みの形を成した。三日後が楽しみで仕様がな

い。
携帯電話よりも遙かに強力なライトが真治を包み込んだ。あまりに眩しすぎて、真治からは持ち主の顔が確認できない。

しかし、それからすぐに「こんな所にいやがったのか」というガラガラな男の声が聞こえてきて、真治は誰なのか判った。

沢木は浅川近くの木々を掻き分け、真治の突っ立っているゴクリ滝の方まで一目散に走ってくる。途中で一回、木の根っこに躓いて

コケた。間抜けでありながらも、とても笑えない雰囲気はその場に蔓延していた。

「この糞ガキ、今まで何してやがったんだ！ みんなで探し回ってたんだぞ！」眉間に丁字型のしわを深く作りながら、沢木が怒鳴った。

沢木は常に般若みたいな憤然とした面もちをしているとの話だったが、声からして、これは本当に怒りがたぎってるようだった。

「若いうちはやんちゃをしたくなるだろうが、親に迷惑を掛けることだけは絶対にするなと言っただろうが！」

沢木の拳固が真治の頭頂部に見事命中した。真治は両手で頭を抱え、その場に膝を着いた。

呻き声を出す真治を馬鹿にするように、どこか遠い暗がりでは野鳥が鳴いた。

模索

案の定、沢木に連れられ宿に帰った真治を出迎えたのは、法子のピンタと道夫の拳骨だった。流石の真治も今回ばかりはそれらを甘受した。

悦子はただ寡黙にせつせと仕事を続けていたが、時折、野卑な俗物を見るような目をこちらに向けてきた。真治にはかなり徹こたえた。

沢木は先程真治のことを殴ったが、まだ物足りないらしく、もう一発殴らせると言い出した。怒り狂う沢木を、鴨井が必死になだめてくれた。

道夫たちの話によると、真治を搜索する為に従業員を割り、宿の営業がまともな流れに乗らなかつたらしい。法子の指示により、真治は皆の前で土下座をして謝った。

鬼の形相となっていた法子だが、真治が無事で本当に良かった、とせきを切ったように泣き崩れだした。純が法子にハンカチを渡し、肩をさすってやった。真治は心の底から反省した。

こうして真治失踪の件はどうにか收拾がついた。しかし、真の問題はその後にあった。

今日は精神的に疲れてしまったらしく、法子が早めに就寝することとなった。それを心配してか、道夫も夕飯を済ませずにさつさと部屋に引き上げていった。

また前日と同じよう、真治はこざつぱりとした小規模な宴会場で夕食をすることになった。不幸中の幸いか、今日は宿泊客の数が通常よりも少なく、手の開いた純と鴨井が同席するらしい。

昨晩はじっくり観賞できなかったこともあり、真治は宴会場に行く途中、中庭に接したガラス張りの渡り廊下で立ち止まった。ガラス越しに中庭を眺めてみる。柏の木の根元付近には、高輝度の畜光素材の石が撒かれている。田舎の宿とはにわか信じがたい幻想的な

光景だ。

昼間、悦子が使ったのと同じ庭木戸を開け、真治は中庭に出てみる。庭木や光る庭石を觀賞する客を考慮したのか、渡り廊下付近は石畳が敷き詰めてあり、座る為の小さな段差もあった。

真治はその石段に腰を下ろし、ポケットを膨らませていた小さなフェイスタオルを取り出し、額や耳の後ろなどの汗を吸い込ませる。やはり外も暑かったが、通風性の悪い蒸した室内よりは幾分か心地よく感じた。

真治はタオルをうちわのように扇ぎながら、夜陰の中で蛍のように儚げに浮かぶ庭石たちと、鈴虫のものらしき流麗な音色に感覚を溶け込ませた。

真治は意識を完全にそちらの世界に浸らせていたので、開いた庭木戸をのんびりと通り抜けてくる貞義の存在に気付いてなかった。

「真治君、何してるんだい？」貞義が背後から声を掛けてきた。

思いがけない出来事に仰天し、真治は突如石段から立ち上がる。間近でそれをやられ、貞義の方もたまげる結果となった。

「体の方、大丈夫なんですか？」真治は表情を改めてから尋ねる。

「いいや、俺も歳だからな。まだまだ体に鉛をくりつけられてる気分だよ。でも一日中寝てたお陰か、昨日よりは少しだけ楽になったんだ」マスクをした貞義の声は籠もっていて聞き取り難い。

「そうなんですか。良かったですね」真治はどこか他人事のような口調で言う。

「部屋から抜け出てきたこと、悦子には内緒にしといてくれよ」貞義がいたずらじみた表情で唇と鼻に人差し指を重ねる。

それから貞義も真治の隣の石段にそつと腰を下ろし、無言で暗がりにはぼつぼつと浮かぶ庭石を覗だした。集中力を削がれた真治はもはや庭の觀賞をする気が失せていた。

現実という名の地から僅かに浮遊している場合は、時間というものが空を渡る雲のようにあつという間に流れていく。しかし、現実という名の地に足がしっかりとして着いている場合は、そうはいかない。

真治は逃げ出す機会を窺っていた。

「昨日今日と色々あったんだって？」貞義が首だけこちらに捻って和やかに言った。

真治はどんな言葉で表現すればいいのか分からず、こくりと頷くだけにした。それを察したのか、貞義も声を発せず、首を縦に振った。相変わらず赤ん坊の歩行を見守る親のような、柔らかな顔つきをしている。

「これから夕飯を食べるんで。それでは」真治はゆっくりと立ち上がり、木の扉の方へ心持ち早めに歩いていく。

「悦子はどうだい？ 君らに対して愛想が悪いだろう？」

貞義の言葉に真治は足の運びを中断させる。そうしたのは、話し掛けられたのを無視するのは失礼だと思ったのと、千夏とは逆の意味で動向が気になる悦子の話が出たという両方の事由からだった。

貞義の問にどう対応しようか悩んだ。そんな簡単に肯定するのは立場上よくない気もしたが、貞義が現状を理解して言ってるのだとしたら否定すべきではないとも思った。

真治が答えるよりも先に、貞義がにやにやしながら次の言葉を発した。「あいつは無愛想で疑り深いけどな、決して悪いやつじゃないよ」

悦子のことをそうは言われても真治にはどうすればいいのか分からず戸惑った。決して悪い人間じゃないと頭に叩き込み、あの悦子に笑顔で馴れ馴れしく接しろというのだろうか。初対面から続く、自分たちを品定めするあのイメージが拭いきれないのだから無理だと思った。

真治は貞義に助けを乞う目線を送る。貞義はしわだらけな尻を余計くちやくちやにしながら二度顎を引いた。

「いきなり、『はい、そうですか』なんてのはやつぱり無理だよなあ。でもちよつとだけで良いから、真治君が心を開いてみればあいつも心を開いてくれる筈さ。あいつと四十年以上を共にしてる俺が保証するんだから信憑性があるだろう？」

「確かにありますけど……」真治は言い淀んでしまう。適切な受け答えの仕方が分からない。貞義の助言がどれほどの説得力を持っていたとしても、結局は同じことだった。

「真治君がどれだけの愛想を撒いた所で、最初のうちは悪態をつくだろうなあ。そこは我慢するしかないな。とにかく、執念で何度も悦子にぶつかっていけばいいんだ。好きな女にがむしゃらに体当たりするのと似た要領さ」

「はあ……」悦子とはできるだけ距離をおきたい真治にとって、その例えはしつくりとこなかった。

「引き留めちまって悪かったね」貞義に言われ、真治は口を歪に結びながら軽く一礼しそそくさと中庭を後にした。

貞義に言われたことを実行する決心はまだついてなかった。もう少しだけ、頭の中にある曖昧模糊としたものを整理する時間が必要だった。

案外早く、真治は選択を迫られることとなってしまった。こじんまりとした宴会場の縁の前で、悦子と遭遇したのだ。

悦子は首元がしつかりとした無色のシャツに、脂肪がなさすぎる細い足よりも一サイズ分だけ大きいズボンを履いている。なんとも味気ない格好だがどこか威圧的な雰囲気纏っている。

「純と鴨井さんが待ちくたびれてるよ」骨の上に薄皮が張り付いただけのような指が宴会場に向けられた。

閉められた襖の先から例の騒がしい声は聞こえてこない。やけに静かだ。悦子が嘘をついていて、本当は無人なのではないかという気すらしてくる。

「どうしたんだい？」悦子が不審そうに見てくる。「純たちはわざわざ食べるのを我慢してるんだよ。これ以上待たせるのは良くないよ」

寒心のあまり真治は口を動かさず、首を縦に振るだけしかできない。悦子は釈然としなそうな顔をする。だがそのまま何もなかった

かのように歩きだす。

悦子が自分の横を通り過ぎようとした時、真治は勇気を出して喉の奥から声を絞り出した。「あの……」

悦子が立ち止まり、枯れ木を彷彿させる首をゆっくりと曲げる。しなる音が聞こえてきそうだった。「なんだい？」

悦子の静かな迫力に真治はそそけ立つ。肺がぎゅっと驚掴みにされているような痛みがあった。

「素敵な旦那さんですね」

えっ、と悦子が聞き直してくる。耳が遠いからではなく、真治の言葉の意味が把握できてないからのようだった。

真治の頬が徐々に紅潮していく。一呼吸してからもう一度言う。

「夫の貞義さん、優しい人ですね」

悦子が薄目になりながら口を開けっ放しにしている。完全に不審者を見る顔だ。言ってから真治は激しく後悔した。

「出し抜けに気持ち悪いこと言いだして、変な子だね。そやしたって何も起きやしないよ」

そのまま悦子は渡り廊下を歩いていつてしまった。真治は極度の緊張とじくじから解放されてひと安心するも、悦子の言葉に心くじけそうになった。

これで本当に何かが進展したのだろうか？ 真治は遅効性のこの行いが最低、悪い未来に結びつくことだけはないでくれと祈った。

襖をそつと少しだけ開けてみれば、純と鴨井が座敷のテーブルに着いているのが微かに見えた。しかし、二人はやけに静かだ。会話が全く交わされていない。

鴨井は性格を考えればとにかく、純が話し相手が正面にいなからも大人しく夕食を食べていることに驚いた。とても非現実的な光景だ。

真治は襖を境目にしてあちら側は異世界であるかのような不可思議な感じを覚えた。境目を越える勇気は一応あるのに、足の神経に

生ぬるくて重たい何か纏わりついている。

そんな時、鴨井が襖の隙間でまごついている真治に気付く。「真治君、こちらですよ」

鴨井に言われ、真治は襖を開け、緊張した面もちで座敷に上がる。鴨井の声は当然聞こえた筈なのにそれでも純は黙々と食事を続けており、真治の方に全く顔を向けてこない。

真治は鴨井の隣の座布団に着き、対角線にいとでも不気味な純を横目だけで窺う。純は八モの天ぶらを小皿に作った天つゆの池に浸け、口に運ぶ。紙吹雪のように微小のレタスを付着させた唇が、縦に横にと動かされる。

隣の鴨井も箸を休めて純の様子をずっと凝視している。真治も同様に待つしか選択肢はなかった。

純の箸が破けた箸袋の上にそつと横たえられる。箸袋に極小の黒い染みが広がっていく。純は唇に付着するレタスと天つゆの跡を人差し指と中指で取り除き、顔をゆっくりと持ち上げる。

「真治君、あたしが何を訊きたいか分かるよね？」

真治は即、状況を理解した。鴨井の様子と純の溜、宴会場に渦巻く重苦しい雰囲気全てが一つに集約した。

これは、「妖精」をめぐる壮絶な駆け引きの開始なのだ。

「訊きたいことって何ですか？」真治は箸袋をゆったりと破きながら訊く。

「そんなの『妖精』に決まってるでしょ」純が言う。

「妖精？ 何のことですか？」真治は惚ける。

純が頬杖をついたまま呆れた顔をする。「真治君、よく今更そんなこと言えるよね。妖精って言えば、昼間、御天神社で会ったあの女の子に決まってるじゃん」

真治はのんびりと小皿の縁にわさびをこすり付け、それ目掛けて真上から醤油を垂らしていく。作業を終えると、鮎の刺身を使ってそれらを丹念にかき混ぜる。

「ああ、妖精って、あの白い格好をした女の子のことですか？ 知

り合いでも何でもないし、先ずあの子とは今日が初対面ですよ」「真治はひたすら悪あがきを続けるしかない。

「真治君、白々しいよ。いい加減観念して全部を暴露しちゃいなさい。そしたら楽になるよ」「純が目力と語調を強めてくる。

「純さん、真治君は言いたくないみたいですし、問い詰めるのはよくないですよ。思春期は繊細で難しいんです。秘密にしたいことだつて当然あるでしょう」「傍らの鴨井が言った。真治は心の中で頷いて同意する。

「でも鴨井さん、『妖精』が自分と後ろ姿がそっくりだったことは気になつてるんでしょ？」

真治は純が気軽に妖精という単語を出すことに不快感を覚えた。

「ええ、確かに気になりますよ。解答を教えてくださいのならば、是非とも教えて頂きたいです。でも、その為に真治君が害を被るといふのなら、私は遠慮しておきます」「鴨井が真摯な顔で言う。

「鴨井さん、真面目過ぎい。もうちよつと肩の力を抜きなよ。元彼にも『お前は真面目過ぎるんだ』つて別れを告げられたんでしょ？」純が茶化す言い方をする。

「ちよつと、純さん」鴨井が苦虫を噛み潰した顔になる。

「その元彼つて確か、京都のコンサルティング会社に勤めてる人だっけ？ うなじや耳たぶを愛撫するのが好きで」

「純さん、止めて下さい。それについては触れないで！」鴨井が興奮して言った。

あの冷静な鴨井が頬をピンク色に染めて純に屈している。真治は改めて純の情報網の恐ろしさを痛感した。

鴨井はこれ以上自分の過去に踏み込まれたくないらしく、主役の座を真治になすりつける。「真治君は、純さんや道夫さんに追及されると思つたから、嘘をついてるんですよね？ 別に、あの女の子とは友達つてだけでしょう？ それくらい言っちゃってもいいじゃないですか。隠しことは良くないですよ」

鴨井の裏切りに真治は眉をしかめる。鴨井は真治にだけこっそり

と目で詫びをいれてくる。

真治は精神の安定を図り、にんじんやパイナップルの入ったヴィネグレット使用のコールスローに箸を伸ばす。何度も何度も時間を掛けてキャベツを噛む。

「真治君は、初対面の女の子をいきなり全力疾走で追いかける人間だったの？ ちょっとがっかり」塩焼きにされた鮎を箸で崩しながら純がため息を漏らす。

千夏を追いかけた件により、初対面では筋が通らなくなってしまった。ここは千夏とは知人だと、事実のみを打ち明かした方が良くかも知れない。

「そうですね」真治は箸を動かす手を止め、肯定する。「あの女の子とは昨日にも会ってます」

純の唇が笑みを作る。達成感が溢れ出た笑い方だった。やはり内緒にしておいた方が良かったのではないかと真治はすぐに後悔した。

「真治君は昨日初めて美海部に来たから、妖精とは昨日初めて会ったんだよね？」

「はい。そうですね」

「宿を勝手に抜け出した時に会ったんだよね？」

「いや、違います。でも、正確に『対面した』という意味では宿を抜け出した時ですけど」

純が意味不明だと言いたげに小首を傾げる。「まあ、正直そこはどうだっという問題……」

真治の表情が強張ってくる。次に純の口から出てくる言葉が直感で分かってしまったからだ。

「真治君。問題はね、真治君があの子とどこまで進展してるかってことなの」

遂に純の専門分野に突入してしまい、真治の心に諦観が滲みだす。もう純を欺くのは不可能に近いだろう。

突っつかれることは分かっているが、それでも真治には言い訳をするしかなかった。「進展って、ちょっと不適切な言葉ではないで

すか？ 可愛い子と仲良くなっただけで恋愛関係がどうのこうのはおかしいです」

真治の発言を聞くや否や純が突然立ち上がる。真治と鴨井は何事かとその動きを目で追う。

すると純は真治の隣の誰もいない席にミニスカートであるのもお構いなしに勢いよく座り込んだ。同時に強烈な香水の匂いが落ちてきた。

相変わらず胸元が大きく開いたノースリーブを着る純が間近で真治の顔に視線を固定する。

「うっん、真治君はあの女の子を好きになってる。一日中あの子のことばかりが頭の中を所狭しと飛び交っているに違いない。賭けてもいいよ」

真治は視線をどうにか豊潤な胸の谷間から外そつと顎を浮つかせる。「どこからそんな自信が湧いてくるんですか」

「女の勘よ」

これは駄目だ、と真治は思った。そんな不確かでしかも偶発的ではあるが見事に的を得てしまっているものは、どんな理論を用いても崩しようがない。

それからの真治は一言たりとも喋らず、夕食のみに口を使うことにした。隣の純が何と言おうが無視を徹底した。

流石の純も反応されないと大層辛いらしく、途中から話の種を鴨井に戻した。鴨井は元恋人の性癖についてあれやこれやと純に追及され、顔を茹で蛸のように真っ赤にしていた。

真治には早く終わらせないとならないノルマがあった。それはとても厄介で他人の力が必要不可欠だ。しかし、純ではその役目は無理だと思った。

道夫と法子も危険だ。悦子は不可能ではないだろうがあまり安全とは言えなそうだ。沢木や貞義も別の意味で厄介になりそうだとすれば残るは鴨井だけになる。

しかし、鴨井も危険な気がしてきた。今回のやり取りを見たことで「裏切り」が発生する可能性が出てきたのだ。

真治はいよいよ困り果ててしまう。つい数時間前、山の中をさまつては行き止まりの看板に突き当たったのと似た感覚だった。

「ねえねえ、真治君」純がまた話し掛けてきた。彼女の手にはビールの缶とまだ未使用のコップが握られている。

「もう話すことなんて何一つないですよ」真治は突き離すように冷淡な口調で言う。

真治の前に未使用のコップが置かれ、缶にぽっかりと開いた穴からビールが滝のように降ってくる。泡がコップの最上辺まで登ってきて、数秒すると何者かに足を引っ張られたように下にずり落ちていった。

「真治君も飲まない？」そう言った純の顔は少し赤くなっている。

「いや、結構です。そもそも俺は十七歳ですよ？ 未成年なんだから、例え飲みたいと思ったとしても飲めないんです」

「真治君も堅いなあ。好奇心つてもものはないの？」純がコップの縁を真治の口元に無理やり近付ける。「ほら、試しに一口だけで良いからさ」

真治はそつと手でコップをはねのける。「お断りします」

「つまらない男」純が畳に大の字に寝転がる。ぴっちりとしたノースリーブとミニスカートの隙間からへそが覗いている。ちょうど腰の所に座布団が当たっているので、腹が山のように佇んでいる。

鴨井が「はしたない」と注意するも、純はとつくに深い眠りの世界に引きこもっていて無意味だった。宴会場の中には微かな寝息と香水の匂いと酒気が漂っていた。

従業員専用の部屋には冷房はないが小さな浴室は付いている。高級ホテルみたいにシャワーが固定されていないのが自慢な、チンケな浴室だ。

真治は昨夜、ここで汗ばんでいた体や髪を洗った。懐旧の情から

でもあるのだらうが、家の浴室の方が何倍もマシだと虚しい気分
させられた。

だが、そんな真治に吉報が訪れた。鴨井の粋な計らいにより、宿
の温泉に入らせてもらえることとなった。ただし、「他の人にバレ
ない」という条件の下でだった。

鴨井が浴場の入口まで親切に案内してくれるらしい。腹をもろに
出し、足を大きく広げ、口から涎を垂らした酷い寝相の純を置き去
りにし、宴会場を出る。

ロビーとは別の方向に伸びた渡り廊下を進む。渡り廊下はガラス
張りなので、ロビー付近を徘徊してる悦子や貞義に発見されないか
と真治は心配で落ち着けなかった。

浴場の入口はひとつで、宿の入口と同じ赤地に雲の絵が描かれた
暖簾が垂れ下がっている。真治は改めて周りに注意を向けてみる。
人の気配はない。

「シャンプーやトリートメント、ボディシャン、ドライヤー、バス
タオルなどもちゃんとありますよ。手ぶらでも安心して入ってきて
下さい。中でお客様に遭遇したとしても、自分も宿泊客だという振
る舞いをしていれば大丈夫です」

鴨井に一礼し、真治は暖簾を潜る。先には更に二色の暖簾が下が
っており、真治は青い方を通り抜ける。すると脱衣場が現れた。

大きな鏡がひとつあり、そこにドライヤーや安そうな櫛、未開封
の小さな袋がある。袋の中にはカミソリが入っている。他に体重計
や部屋にあったのと同じ扇風機が置いてある。

真治は脱衣場を覆う湿気からなるたけ早く解放されたい一心で次
々と服を脱いでいく。籠に入れられた衣服たちは生気を抜き取られ
たように虚しく萎れていた。

スモークガラスの戸を開けると大量の湯気がダムの決壊のように
解き放たれて真治の裸体を撫でた。浴場には温泉が三つあった。小
さくてシンプルなものに湯気がひときわ強く舞っているもの、角度
が九十度くらいの扇状になったものだ。

真治は平等に三つの温泉に入っていく。そして一番浸かり具合がしつくりときた扇状の温泉に深く身体を沈めた。

真治は気持ちよさに体を預けながら辺りをのんびりと観察する。浴場には曇り気味な鏡とセツトで背の低いプラスチック製の腰掛けと取り外し可能なシャワーが四つずつある。その近くにはシャンプーやトリートメント、ボディシヤンなども完備されている。

今この広い空間には裸の自分ただひとりしかない。初めて来た場所だという新鮮味が拍車を掛けているのだろうが、シャボン玉の中を魚となって優雅に泳いでいる気分になった。

考えてみれば、昨日の昏間に美海部に来たばかりだというのにやけに頭に馴染んできている。それはやはり、千夏という存在が過ぎゆく時間の感覚を濃縮してくれたからだろうか。

いつまでこの村にいるのだろうか。千夏とはあと何回会えるのだろうか。

誰にでも等しい「時間」は残酷だ。もしも魔法なんてものがあるのならば、二人の時間を止めたい。

シャボン玉のように虹色で半透明な幕が二人を優しく半球型に包み込む。その幕は不規則に、川のように穏やかで精美な流れを繰り返している。でも実はその流れの正体が「時間」だなんて二人は知らない。

馬鹿らしいのは分かっているが、真治はそんな魔法の存在を願った。

真治はふと外に通じるらしきスモークガラスの扉を発見した。この手の場合は恐らく露天風呂があるのだろうと思った。真治は温泉から上がりスモークガラスの方へ歩いていく。自分ひとりしかないとは言えタオルで下半身を隠した。

重めのスモークガラスを横にスライドさせる。少々腕に力を込めないで動かない代物だった。開けた瞬間、外への脱出を求める大量の湯気が真治の背中を押してきた。背中をすり抜けた煙たちは今度は真治の前方を半透明な白で霞ませた。

真治はその湯気の間を、針に糸を通すように熟視してみる。すぐ近くに温泉とそこから立ち上る若干弱気な湯けむりがあった。しかし、そこには温泉に肩まで浸かる先客の人影もあった。

湯けむりの中の人影は段々輪郭をはつきりと持ち始める。こちらに後頭部が向いていることから、真治はこのままそつと引き返そうかと思いつく。

だが、岩盤のようにながしりとした肩や後頭部が横に回転し始めたのでその選択肢はなくなってしまった。

こちらに向けられた顔は四十がらみのものだった。見事な弧を描いた眼と綺麗に揃えられた顎髭が目立つつややかな中年男性だ。

「おや、君も宿泊客かい？」その中年男性が訊いてきた。低音でありながらとても澄んだ声だった。

真治は焦燥感にかられながらも、鴨井にアドバイスをされたことをとつさに思い出す。「はい、宿泊客です」

中年男性は知的な雰囲気秘めた眼で真治の全身を見つめてくる。やがて右手で整えられた顎髭を弄り始め、左手で手招きをしてくる。「とにかくこちらに来なさい。そこにいたら寒いだろう」

真治は指示されるがままに藍色の露天風呂にゆつくりと足から順に身体を沈めていく。中年男性から少し距離を置いた。煙で霞む水面にはいくつもの湯玉が沸き立っているのが見えた。

「君はあまりスポーツをやってないな。そういう人間の体つきではない」中年男性が言った。

唐突な言葉に面食らいながらも真治は応える。「はい。体育会系と文化系のどちらかと言えば、文化系に違いありません」

「私は昔、ジムのインストラクターをやったことがあってね。一目見れば大体その人の運動習慣が分かるんだ」再び右手で顎に触れながら中年男性が言った。

中年男性を改めて近くで見ると、湯からはみ出した右腕には練磨された立派な筋肉が付いていることに気付く。

「じゃあ、今は何をやってるんですか？」

「今はしがないフリーのカメラマンだ。たまに記事を書いたりもするけど、基本的には雑誌のコーナーを担当したりする。この仕事もかなりの体力がいるから、筋トレなんかは毎日欠かさずにやってる」
そう言っつて中年男性は右腕をくの字に折り曲げ、上はく部に瘤こぶを隆起させた。

「美海部村には仕事で来たんですか？」

「『ひなの風光』つて特集をやるつもりでね。実際訪れてみて良かったと思ってる。ここは本当に風情に富んでいて素晴らしい場所が多い」

その時、真治の頭にひとつの着想が浮かんだ。「美海部の色々なところを見て回ったんですか？」

「ああ、かなり回ったよ。お陰で今日はくたくただ。だからこうやってのんびりと温泉でくつろがせてもらっつてるといふ訳さ」

そこで真治はひとつの決心をする。「どんな場所がありましたか？ 何かお薦めの場所がありますか？」

「お薦めの場所？」 中年男性の太くてがっしりとした首が横に傾く。

「はい」 真治は口調が段々強まってくる。「例えば、デートするのに最適な場所とか」

中年男性が目を細める。「君、美海部村に来たのは初めてなのかな？」

「はい、初めてです。昨日来ました。だからこの村については全然無知なんです」

「親と来たのか？」

「はい」

「昨日来たばかりなのに、近いうちにデートをするの？」

「はい」 もう真治には隠し立てなどする余裕はなかった。今日の前にいる中年の男性だけが真治にとっての希望だった。

「ははは」 中年男性が笑いだす。二人きりの空間に低くてよく通る声が響いた。「君はなかなか面白そうな子だな」

それから中年男性は顎髭に触れながら無言になった。表情は真剣

そのもので、記憶の中の風景を一生懸命手練り寄せているようだった。

真治はその間何も話したりすることができず、辺りを観ているしかなかった。温泉のすぐ近くにはつやつやした狸の置物がある。麦藁帽子を被った狸がタオルを三個詰めた籠を左の腋わきに挟んでいる。これから温泉に向かうというデザインのようだ。

他には塀があり、高低差のお陰で山の中腹と山の麓の森が見える。湯けむり越しに見る夜の田園風景は白昼とはまた違う芸術になっていた。

「美海部村で長時間潰せる場所というのは難しいな。そもそも君くらの年のカップルが遊べる場所がない。そういうのは田舎の短所だな」

中年男性からようやく出てきたのがそんな言葉で真治はがっかりする。「別にテーマパークみたいに遊べる場所じゃなくていいんです。その子に美海部の地を紹介できさえすれば、それでいいんです」

「その言い方だと、デートする相手も初めて美海部に来たのか？ 田舎というものを知らない初心者同士だと尚更この地はつまらないだろうな。厄介だ」

「いえ、相手は美海部の子です」

中年男性が訝しげな顔つきで真治を見てくる。「美海部在住のくせに、昨日美海部に来たばかりの奴に美海部を案内してもらおうと？ 奇妙奇天烈な話だな」

「その子、ちよつと世間知らずな箱入り娘みたいなものなんです」「これはまた面白いカップルだな」中年男性が顎髭を掻きながらにやける。何かを閃いたような表情だった。真治はそれに淡い期待をしたのだが、中年男性の口からは特に何も出てこなかった。

真治は仕方なく温泉から出て室内に戻る。長い間入浴してた所為で夏の夜風に体を震わせた。

もやもやだらけの室内に戻り、シャワーのある所に向かう。あまりに低いので失敗して尻餅をつかないようにと、プラスチックの腰

掛けにそつと足を曲げながら座る。しゃがみ込んだように足を深く折り曲げた形となる。腰が僅かに浮いている奇妙な感覚があり、心がどうも落ち着かない。

曇り防止された鏡の中には白い霧に包まれた不安定な世界がある。そちら側に住む自分の顔を見つめる。憂いを帯びた目には期待を裏切られて失望している千夏の顔が薄らと映っていた。

それを忘れようと真治は顔面にシャワーのお湯をぶつけた。ノズルから慌てて飛び出てくるつぶてたちは深憂を一時的に弾き飛ばしてくれた。このまま延々とこの動作を続けられればと真治は思う。

そんな折、室内に渦巻くある一定の流れを保持していた空気が突如として変わった。開けられた扉から外の寒気が雪崩れ込んできたのだ。

真治はそちらに一瞥もくれずにシャンプーの容器に手を伸ばす。元々自分よりも早くから露天風呂にいたのだから、そろそろ戻ってきたって何もおかしくない。

「いい場所があった」胸の大きく割れた、岩を想起させる硬質な体が霧の世界に紛れ込んでくる。

「いい場所って、どこですか？」タオルを一切巻かない体から視線を外すようにして真治は訊いた。

「五仏坂いほとけまがという場所はどうか」中年男性が真治の隣の腰掛けに座る。

「五仏坂ってどんな場所なんですか？」

「御天神社のある山とは村を挟んで正反対に位置する山の麓だ。特別に面白いものがある訳ではないが、とても豊饒ほうじょうな自然に囲まれている。いちおしの見好み花畑もあるから、二人でのんびりと散歩するにはうってつけだ」

「それはちょうど良い」真治は頭の上でシャンプーを泡立てながら頷く。「そういうのを求めていたんです」

「そうか。それは良かった」ボディションをつけたタオルをはちきれんばかりの力で体に擦りつけながら中年男性が言った。

中年男性は全身を三分ほどで全て洗い終え、そのまま浴場を後にした。最初のシャンプーすら洗い流せていない真治には驚愕の早業だった。

しかし、すぐにまた扉が開かれ、中年男性が真治の背後に立った。「報恩という言い方は些か卑怯で躊躇してしまうところなんだが……。とにかく、明日のデートがどうなったか私に教えてくれないか？」

真治はトリートメントを髪に馴染ませながら答える。「どうしてまたそんなことを？」

「また言い方が悪いんだが、君らは何とも珍奇なカップルだからね。ある意味、美海部の取材よりも君らの方が面白そうに思えたんだ」

真治は鏡越しに中年男性を見ながら、目をしばたかせる。「まさか、俺らのことを雑誌に書いたりしませんよね？」

中年男性が顎を引きながら低く笑う。「まさか。流石にそれはないよ。私が担当しているのは旅行雑誌であつて、女子高生用の雑誌やゴシップ誌のような他人様の色恋沙汰の需要なんてない。ただ単に、記者というよりは私個人として興味を感じただけさ。約束する、決して君らのことは私の胸の内だけに留めておくと」

真治はそれを聞いて仕方なく納得する。「はい、分かりました。どこに行つてどれくらい進展したかを教えます」

中年男性は「ありがとう」と言つて、勇ましい足取りで浴場を去つていった。真治は今度こそ本当に浴場でただ一人となった。もうこれ以上は客と逢着しないのを祈願し、また先程の扇型の温泉にゆつくりと浸かり、明日の風景を霧の世界にパステル色で描いていく。花畑を見ながら、満面の笑みを浮かべる千夏と自分の姿がそこにあった。

不安の先

休み時間が後一分ほどで終わろうとする頃、既に教室の外には次の授業の為に待つ他クラスの生徒たちの姿がちらほらとあった。見るからに勤勉な印象を受ける生徒を除けば、男子はそれほどいない。おおよその男子は始業の鐘が鳴ってから教室に移動してくるのだ。

真治のクラスの教室はちょうど生物の授業を行う場所であり、真治は移動する手間暇が掛からないのを幸運に思ってきた。だが今は真逆にそれを不運に思っていた。教室の中から扉のガラス越しに見える廊下には、知り合いがいないで退屈そうに壁に寄りかかっている例のブラウンの女子の姿があったからだ。もし自分も移動する側だったら、この時間、彼女に話し掛けることができただろう。

いよいよ鐘が鳴り、真治のクラスの男子生徒たちも大方は別の場所へと移り始め、廊下に待機していた生徒たちが入れ替わるように教室の中に流れ込んできた。

ブラウンの女子はその流れの後尾にいた。狭い入口のところでは生徒たちがごった返すのが終わった頃に、彼女がおごそかな表情でのびのびと教室に入ってきた。左手には教科書と筆箱を抱え、右手でいまいち定まらない後れ毛おくを調節している。その様子を始終見ていた真治は、彼女が周りの生徒よりも幾らか大人びているように感じた。

ブラウンの女子が依然として堅い表情でポンパドールを触りながら真治の隣の席に着く。彼女は髪に夢中なのか、真治とは一切視線が合わず、挨拶もなかった。真治は待ちくたびれた三日間を想起し、この結果に納得しなかった。

「この間は解答用紙見せてくれてありがとう」真治が横から声を掛ける。

そこでようやくブラウンの女子は真治に気付いたみたいで、はっとした顔でこちらに向いた後に表情をやんわりと解いた。「あ、う

ん。お久しぶり」

そこで真治は話の種がないので何も言えなくなる。ブラウンの女子は何事もなかったように自分の携帯電話を弄り始める。シルバーのボディにハート型のデコレーションが施された携帯電話だった。

「えっと、名前は何だっけ？」真治は無理やり話題を作ろうとする。ブラウンの女子が携帯電話を開いたまま、真治の方に体を向ける。「みんなからは『片桐』って呼ばれてるよ」

「そうか。片桐さんか」真治は彼女が以前、赤いメツシユの女子に片桐と呼ばれているのを覚えていたが、素知らぬふりをする。

「皆してあたしのことを名前じゃなくて苗字の方で呼んでくるの。酷いよね」片桐は姓で呼ばれることに拒絶を示した後、真治の顔を指差す。「まだあたしも名前聞いてなかったよね」

「ああ、そうか。忘れてた。俺は真治」真治は待っていた質問に素っ気ない答え方をした。

「真治君かあ。ねえ、真治君は何か部活とかやってたりするの？」
「いや、部活は何も入ってない」真治は罪悪感があるように小さな声で答える。

「えー、勿体ない。高校の部活って楽しいよ。あたしはダンス部入ってるんだけど、みんなと苦労を分かち合ってるのはとても貴重な思い出になるよ」

真治は声を口内に閉じ込めながら頷く。自分が部活に入って、皆と一緒に汗を流す姿がどうしても思い浮かばなかった。「じゃあ、考えておくよ」

片桐がうんうんと満足げに頷いた時、例の生物の教師が教室に入ってきた。生物の教師はYシャツの上に白衣を着ており、その細身の体と相まって何とも軟弱な印象を与えている。

先程まで教室のそこら中で所狭しと飛び交っていた声は教師が教卓に着くと同時にぼつぼつと減っていき、最終的には完全に消えた。そんな無音の教室にチャイムが鳴ってから動き始めた男子たちが続々入室してきた。教師は彼らに注意を促すことなく、そのまま自分

の授業を始めた。

そんな時、隣の片桐が小さな声で「あっ」と言った。何かと真治がそちらに視線を移してみると、片桐が照れ笑いしながらこちらに教科書の表紙を向けていた。

「何かあった？」真治がぼそりと訊く。

「生物じゃなくて、家庭科の教科書持つてきちゃった……」片桐が間延びした声で答えた。彼女の手握られている教科書の表紙には確かに「家庭科」という文字が大きくあった。「あちゃー、あたしつて本当に間抜けで嫌になっちゃっ」

真治は口元を緩める。「そもそも生物の教科書を持つてない俺よりは、全然マシだった」

「あ、そりゃあそうだね」片桐がアイシャドーで真っ黒くなった目を細めながら、クスクスと笑った。

「いやー、危ない危ない。今日は演習なくって良かったあ」片桐が椅子にふんぞり返りながら天井に向かって言った。真治はその際、ミニスカートから出た片桐の艶やかな太股に一瞬目をやってしまい、すぐに彼女の机に視線を外した。

「あ、そんなの気にしなくても良いのに」真治の行動に気付いたらしく、片桐がくすりと笑った。

「いや、そういうのはやっぱり……」真治は同級生を相手に段々とかしこまってくる。教室内は退屈な授業から解放された弾みで一層がやがやと騒がしくなっており、真治の小声など飲み込まれてしまっているように思えた。

片桐は爪がマニキュアで浅紅色に塗られた手を使ってスカートの裾をささっと直し、椅子に座り直す。「真治君って教科書を買わなくてちよつと不良っぽい一面があるけど、根はめっちゃ真面目なんだね」

「買わないのは生物の教科書だけだった。他はしっかり買ってるさ」
「本当に生物の授業が嫌いなんだねえ」片桐がしみじみと言った。

それから二人は好きな授業や嫌いな授業についての話などをした。しかし、真治と片桐のクラスは違うのだから当然同じ授業にしても担当している教師は違うので、話題が合わないことがあった。面白い教師や評判の悪い教師、変わり者の教師の話が片桐の口から出ても真治には全く以てちんぷんかんぷんだった。真治はその度に寂しい気持ちになった。

だが、休み時間が終わる頃に片桐がメールアドレスを聞いてきたので、真治の心は嵐の後の見事な快晴のように清々しくなった。

「真治、何か嬉しいことでもあったのか？」真治は気が置けない友人と一緒に自転車で下校しており、その途中で友人が訊いてきた。

隣から覗いてくる友人とは対照的に、真治は真つ正面を見ながら自転車を漕いでいる。「いいや、別に何も無いって」

「嘘だ。顔が微妙ににやけてるぞ。絶対に何か良いことがあったに決まってる」

「にやけてない、お前の目がおかしいんだって。ほら、正面に気を付けるよ」真治が顎で前方を指す。真治たちはちょうど坂を勢いよく下つているところで、友人の正面には歩いて下校中の女子高生が二人いた。

片方がブラウンの髪をしており、もう片方が赤いメッシュを入れたショートヘアをしている。真治はそれが片桐と、以前廊下から彼女を呼んでいた活発で有名な女子だと少し後になって分かった。だが声は掛けないことにした。

友人はブレーキを軽く効かせ、スピードを僅かに落としながら真治の自転車の後ろに付く。二人の女子高生の横を通り過ぎる際、友人が首を少し捻って彼女らをちら見した。

「なあなあ」坂を下り終えて平らな道に出た時、友人がまた隣に並んで言ってきた。「さっきの女子、片桐と立川たちかわだよな」

片桐の名前が出て真治は一瞬固まるも、すぐに平然とした態度に戻る。「誰だよ、それ」

「お前、知らないのか？ ああ、でも、お前はクラスが違うし、女子のことはあまり興味ないもんなあ。まあ知らなくて当然か。あの二人、結構な有名人なんだぜ」

「どういった有名人？」真治は訊く。気になって仕様がな

目の中の踏切の遮断桿しゃだんかんが下り始める。急げば間に合いそうだと悪い意識が背中を押してきたが、片桐について集中して聞きたかったので真治はパーキングブレーキを握った。友人もそれに連動して自転車を止めた。

友人はハンドルバーを握りながら、おもむろに口を開く。「なあ、真治。女子つてのは幾つかの大きなグループがあつて面倒くさそうなのは流石に知ってるだろ？ さっきの片桐と立川は、俺らの学年で一番幅を利かせてる女子グループの中心メンバーなんだ。赤いメッシュにした方が立川で、ブラウンの髪をした方が片桐。二人とも所謂幹部みたいなポジションに就いてる」

真治は絶句した。片桐の本性を突然こんな形で知らされ、しばらく頭の中が真っ白くなってしまった。

「あの二人が？ 俺には全然そういう風には見えなかったぞ」真治は友人が言ったことを否定するしかなかった。三日前や今日のやり取りから、片桐が悪い人間などと信じられる筈がなかった。

そうとも知らない友人は、真治を世間知らずだとも言うように呆れ果てた目つきで見えてきた。「立川の髪を見ただろ？ まともな高校生、いや、人間があんな派手な髪をするかよ。真治は顔や爪と見てないから仕方ないけど、あの二人、かなりケバいんだぜ。いくら女子高生で色気づいてくる時期だと言っても、あの化粧は異常だ。あり得ない」

そこまで言われ、真治は何も言い返せなかった。実際、片桐が派手な色の口紅やマニキュア、アイシャドーなどをしているのを間近で見て知っていたからだ。

警報機が大きな音を鳴らしながら赤い閃光灯を光らせ続けるばかりで、電車は一向に通過しない。このまま永遠にこの踏切を渡れな

いような気すらした。

「おい、真治。どこか調子悪いのか？ さっきまであんな幸せそうな顔してた癖に」賑々しい駅前のゲームセンターの駐輪場で友人が心配そうに言ってきた。

真治はただ黙って、鬱憤晴らししようと早足でゲームセンターの入口に向かう。

ゲームセンターのドアがひとりでに開いた瞬間、耳をつんざく巨大な雑音が封印から解かれた魔物のように飛び出してきた。真治は構わずエスカレーターに乗って二階に向かった。

途中、真治と同じ高校の制服を着たカップルがクレーンキャッチヤーをやっているのが見えた。男子はごくごく平凡な高校生という感じだったが、ロングヘアの女子の方はモデルのように綺麗な小顔とバランスのいい体型をしていた。真治はその男子と女子両方に見覚えがある気がしたが、カップルはどんどん斜めに小さくなっていき、アーケードゲームの広告が貼られた壁の中にあっという間に消えてしまった。

二階に着いた真治はそのカップルや片桐のことをすっかり忘れるようにして、両替機で千円札とメダルを交換した。友人を置いてけぼりにして、さっさとコインを落とすゲームの椅子に腰を下ろす。友人は「慌て過ぎだ」と文句を言った。

左右に動かせるレールを経由して、コインがゲームの中に滑り込んでいく。コインは前後に動く台の上に落ちる。そこには仲間たちがたくさん群がっている。仲間の上にピラミッドのように乗っかる不届き者たちがいるが、真治の手放した最後のコインは嬉しそうにそこに飛び込んだ。後には、奥底に潜む者の歓喜の音だけがあった。真治は長嘆をつきながらガラスに頭を寄りかからせる。「今日は最悪だ」

「お前、相変わらずコインゲームに弱いんだな」真治の隣に座る友

人の手元には、コインが溢れ出そうなケースがある。真治は「少し分けてくれ」とぼやいたが、辺り一帯に轟く機械音にかき消されてしまった。

仕方なく席を離れて両替機のあるところへ向かう。道中、ワック^{けいかん}スで鶏冠のように髪を立たせている店員とすれ違い、無表情に「いらっしやいませ」と言われた。その店員は監視の役割を担っているのか、店内をぶらぶらと歩いては近くに客がいると同様の挨拶をしていった。

しかし誰も返事や頷きをしなければ、店員を気にする動作すらしない。皆、目の前のゲームに意識が溶け込んでしまっている。それは当然と言えば当然のことなのに、真治は自分が直前まで彼らと同じ状態だったことを想像し、静かに身の毛をよだたせた。

真治が両替機の前で財布を開いたまま手を動かせなくなっていた時、すぐ近くのエスカレーターに先のカップルが乗り始めていた。

それに気付いた真治はどうしてか心が焦り始め、せかせかと財布に手をつ突っ込んで千円札を出そうとするも、手を滑らせて小銭をばら撒いてしまう。大小様々な小銭が奏でる音はやはり轟音に飲み込まれてしまった。

気忙しく小銭を拾っていると、カップルがエスカレーターを降り、真治の目の前に立った。すると二人は急いでしゃがみ込み、床に撒かれた小銭を拾い始めた。

見える限りの小銭を全て財布に戻し終えたが、カップルは未だに周りを確認していた。真治は悪く思い、「もうこれで全部です。ありがとうございました」と丁寧にお辞儀した。カップルは両名ともかしくまった態度で「いえいえ」と一礼した。轟然^{こうぜん}たる店内の所為で、互いに声を張らした。

「あ、同じ高校ですよね？」モデル顔の女子が真治の制服に気付いて言った。

男子が目を凝らして真治の顔を見てくる。「確か、俺と同じ六組じゃなかったっけ？」

真治はそう言われてみて、男子が自分と同じ学級にいたことを思い出した。彼がいつもお調子者の男子と一緒にいる休み時間の景観が容易に浮かんだ。名前を知らなかったり意識をしていなくても、自然と視界に入っていたそれは脳の深層に根付いていたようだ。

しかし、女子の方は男子よりも見覚えがあるというのに、学級内に馴染む映像がこれっぽっちも浮かび上がってこない。映像が浮かばないのはクラスが違うということなのだろうか、どうしてこれほど鮮明に彼女に覚えがあるのだろうか。廊下か何かですれ違って、彼女の強烈なオーラが記憶の端に付着したのだろうか。

真治の固定された視線に感じたらしく、女子がクリクリとした目をぱちくりとさせながら口元に微笑を形作る。「わたしの顔に何か付いてる？」

「いや」真治は声を籠もらせながらすぐに視線をずらす。

「えっと、名前は何だっけ？ 悪い、覚えてなくてさ」男子が苦笑いする。

「俺は真治。別にいいよ、クラス同じでも話したことなければ、そんなものさ」

「そうか、真治君か。俺は勤つとめ。今日はデート中だからさ、今度話そう。ここじゃ煩いしな。それじゃあ」

そう言って勤は女子の手を握り、コインゲームの密集地に消えていった。去り際に女子が人懐っこい笑顔で真治に一礼していった。

真治は何気なしに二人を見送ったが、自分もコインゲームのところに帰ることをふと思い出し、帰ろうにも帰れなくなってしまった。しばらくの間、突っ立っているだけだったので、真治は今の女子について考察してみた。容姿は言わずもがな、雰囲気も大変好感が持てるものがあった。当然、真治が女子に惚れることはなかったが、彼女が多くの男子から好意を寄せられているのは想像に難しくなかった。

それを踏まえると、どうして彼女は勤を恋人として選んだのだろうか。こういう言い方は至極失礼ではあるが、勤のような平凡な雰

困気の男では彼女に釣り合わないと思つた。きっとそれを補うだけの魅力を内側に潜めているに違ひなかつたが、それにしてもあれは、『何か特殊な作用が働いた』気がしてならなかつた。

時間を置いてから友人のいる場所へ戻つてみると、彼の手元にはコインが溢れ出そうなるケースが二つあつた。これも、何かしらの特殊な作用が働いているように思えた。

「よお、遅かつたな。どこをほつつき歩いてたんだよ」

「店内にはどんなゲームがあるのかなつて、見て回つてた」

「まあいいや。それよりも、さつき勤と篠ちゃんがいよいよ。仲良く手を繋いでいやがつた」コインの挿入口に伸ばした手を宙ぶらりんにしたまま、友人が不機嫌そうに言つた。友人の口元は、こみ上げてくる不満を完璧に抑えきれていなかった。

「それつて、モデルみたいな顔した女子と男子のカップル？」

「そうそう、その二人。でもな、篠ちゃんはモデルみたいじゃなくて、本当に雑誌でモデルをやつてるんだぞ。大した知名度がある雑誌じゃないけど、全国にファンがいる。うちの高校には秘密裏にファン倶楽部が存在してるんだぜ」

友人に解説され、真治の頭に余計濃いもやもやが立ち込めてきてしまつた。それでは尚更、篠の心を射た勤に疑念を持たざるを得ない。「勤つてのはどうしてそのモデルと付き合えたんだ？」

「そうなんだよ。お前もそう思うだろ！」友人は真治が疑問符を投げ掛けてくるのを心待ちにしていたようで、ここぞとばかりに言葉の調子を強めた。「学年、いや、学校中の誰も不思議に感じてる。本人たちは何も教えてくれない。判明しているのは、二人が生徒会で知り合つたということくらいさ」

友人も篠のファンなのだろうと真治は理解した。そして真治はとつさに、勤に今の自分と似たところを発見した。

自分と片桐、勤と篠。そこに共通しているのは世間体という壁だ。篠との間に大差が生じているのに、それを埋めることに成功した勤。評判がすこぶる悪い片桐に恋し、苦悶している自分。

自分と勤は似ているのだ。ベクトルが違えども、二人のスタート地点は同じなのだ。そして、全くの別方向にも関わらず、行くてを阻んでくる向かい風は両者同じだった。つまり、二人は真の意味において似ているのだ。

責任感を勝手に抱き、即席の観客席を作ってはいつの間にか腰を下ろしていた人間たちの黄色い声をはねのけ、勤は前進した。ならば、自分もやってみるべきではないか？ 似た者同士だ、きつと異なる方角へ進んでも、いつしか同じ終着点で顔を合わせる筈だ。

真治は勤に働いた『魔法じみた力』を少しだけ理解できた気がした。それにより、力をお裾分けしてもらえないだろうかと淡い期待を胸に宿した。

瞼を開けた瞬間、灰色に染まった天井が目についた。真治は今まで見ていた夢の残滓ざんしにしがみつくとなく、枕に載せた気だるい頭を左右にゆっくりと動かした。

部屋はほの暗い闇に包まれており、しんと静まり返っている。離れたところにある二つの布団の中に法子と道夫の姿を確認し、建物の間を通り抜けるすきま風のようにそつと息を吐き出した。

道夫の寝息が僅かに聞こえた。しかしそれは、開かれた窓の外に広がる爽やかな明け方の空気に溶けていった。この部屋の時間は止まってしまっている。些細な物音もご法度てんめんだろう。

真治はそつと枕と頭の位置をずらす。ついうっかりと布団の擦れる音を室内にさせてしまったが、両親は一切反応しなかった。

そうして邪魔を払いのけた真治は、どうしてあんな夢を見てしまったのかと考え始めた。今は千夏という輝かしい存在があるのだから、粘り気ある闇が纏綿てんめんしている片桐のことを想起する必要などない筈なのだ。それでも彼女がまた現れたのは、何かしらの警鐘なのだろうか。

窓枠に収まった夜明けの向こうから、鶏の鳴き声が出た。真治は思考を中断させ、枕の側にある充電器に嵌った携帯電話を掴む。時

刻は五時。七時間後には、川原で待ち合わせた千夏と会っているだろう。でもそんなことがあるという実感はこれっぽっちも湧いてこない。

しかし、今はとにかく眠い。また片桐関連の夢を見ないようにと願い、真治は流されるがままに再び瞼を閉じた。

「真治、そろそろ起きなさい」寝起きにも関わらず、真治は法子の言葉をしっかりと聞き取った。

小声でうーんと唸る真治の布団を力づくで引き剥がし、法子は強い語気を含ませて言う。「真治、いい加減にしなさい」

真治は虚ろな表情で上半身を起きあがらせ、大きく伸びをする。澄んだ朝の空気と一緒に、畳の臭いが鼻腔に押し寄せてきた。

法子は真治が起き上がるのを見届けると、自分や道夫の布団を綺麗に畳み始める。道夫はと言えば、窓際の肘掛け付きの椅子に座って寛いでいる。旭日に照らされた煙草の煙が、ゆらゆらと空を泳ぎながら開け放された窓口を通り抜けていく。

真治はとうに充電の完了している携帯電話を開き、眠気のものし掛かる瞼を指で擦ってから時間を確認する。六時。二度寝してから一時間しか経っていないのに、片桐の夢を見たのがもつと前のような気がしてならない。

道夫は足を組みながら地方新聞を広げていたが、随分と長い間一面のページで読む手を止めていた。ようやくページを捲る時、やるせない顔で「よくもまあ、いけしゃあしゃあと風邪だなんて嘔^{うそ}けたものだな。どう見たって、ただの酔っ払いだろ」と言った。

全員分の布団を片付け終えた法子が窓際に放置された鞆を漁り、化粧道具を手にして洗面台とトイレが付属の浴室に向かった。浴室の扉がぱたと閉められた音を聞くと、道夫はガラスのテーブルに新聞を置いた。

「真治、今日もあの女の子に会うのか？」

「ああ。美海部村で知り合えた数少ない同年代だからな。美海部を

もつと案内してもらおうと思ってる。いけないか？」

「え、ああ……、別にそうすれば良いじゃんか」真治の意外な返答に道夫は言葉を詰まらせた。

今まで道夫に対しては一切無視を続ける方針だった真治がそうしたのは、昨夜の純の件に懲りたからだだった。口は災いの元、言葉を発しなければ万事全て上手く行くなどというのは大きな間違いだったのだ。

「思春期真っ只中の少年よ、あんな可愛い子を連れてどこに行く気だい？」道夫が暢気に訊いてきた。

そんなところにはばかり興味をそぐなど、真治はげんなりする。「さあ。まだ行き先は決まってる。そこらを適当にぶらぶらと歩くだけなんじゃないか」

「ふん、ここ二日間みたいに法子を心配させる真似だけはするなよ」真治の目をしっかりと見つめながら、道夫が真面目な顔で言った。

「そんなことは分かってる」
「本当に分かってるかあ？」

真治は仕方なしに首を前に振った。道夫個人の忠告程度だったら意に介することなく済んだのだが、法子の名前を出されたのが不味かった。法子がいない隙を狙ってきたあたり、道夫は確信犯の可能性が高い。

「法子に関わらず、女を心配させたり泣かせたりする男は最低だぜ。お前は今のところ、それを二度もやっちゃまって。最低な行為を二日間に二回もだぜ？ とんでもないガキだな」

道夫の言葉攻めを反撃することができない。それが覆しようのない事実だということは、真治自身が一番よく了解していた。「絶対に、もうそんな失態はしない」

道夫が惚けた顔で首を傾げる。「本当かよ。俺には信じられねえな」

「父親なら、息子の言うことを信じる」

髭剃りがまだ済んでない道夫の口元は、真治の発言にすぐ反応を

示した。瞬時に口角が斜めに向かった。「お前が『父親』とか『息子』なんて言葉を使う日が来るとは。ああ、俺はとても嬉しいぜ」
真治は自分の犯した過ちを悔いながら道夫を睨みつける。「とにかく、信じる」

「ああ、そうまで言うならお前を信じるしかないよな」道夫はそう言つて右手を前に突きだしてきた。

真治が小首を傾げていると、道夫の右手の人差し指が何度も前後に折り曲げられた。それはまるで、人差し指が腹筋をしているようだった。そこで真治は、道夫が誓いの握手を求めているのだと感知した。

「ほら、男と男の約束だ」道夫が恥ずかしげもなしに真剣な顔で言う。

真治は内心じくじたるものがあつたが、ゆつくりと道夫に近付き、広げた右手を差し出す。法子が化粧を終えて浴室から出てくる前に、さっさと握手をしてしまおう。

ところが、真治の右手が触れる直前に道夫の右手が小指だけ残して折り曲げられた。その瞬間、道夫の小指が猛スピードで鎌のように振られ、真治の小指を捕らえた。捕まってしまった小指は強い力で押さえられ、逃亡を許されなかった。

突然のできごとにどきまぎする真治を後目に掛け、道夫がまんまとしてやったりという風に澆刺はつらつとした笑みを浮かべた。

「ゆーびきりげーんまん、うそついたらはりせんぼんのーます。ゆーびきつたー」

真治は茫然自失してしまい、いつものため息を零す行為すらできなかった。

その後、化粧を完了させた法子と道夫は、真治に七時半頃になったら例の小規模な宴会場に来いと伝え、先に悦子たちが朝食の作業を始めている台所へと行つてしまった。

既に布団などの一式を片付けられてしまった真治は、このまま部

屋で寛いでいては駄目だと分かっていた。布団が残されていたのを除けば昨晩も真治は同じ状況になっており、観れる番組のないテレビを見つめている内に段々眠気がやってきて、「少しだけなら」と瞼を下ろしてしまったのだ。八時になっても一向に宴会場に現れない真治を法子が見にきて、散々怒鳴り散らされてしまった。

その出来事を反省した真治は、いくら意識していても眠気の再襲撃にはあっさり敗北してしまうと判断し、柄にもなく早朝の散歩に出ることにした。

早朝の清涼な空気は肌に心地よく馴染むので、盛夏と言えどもあまり暑いとは感じなかった。次第に習慣となりつつある首にタオルを掛けておく行為も忘れずに、真治は宿を囲む塀に沿って歩いていった。

辺りに壮大に生える稲たちは、朝日の発する傾斜した光芒を反射させ、田んぼそのものが輝いているように見える。朝明けの空の影で、山々も一層豊かな緑を咲かせている。民家の塀の付近には、朝顔が立派な漏斗型じょうごの花を咲かせているのが見受けられた。

真治はふと千夏と落ち合う、御天神社や川原がある山を探し当て、回れ右をして反対側にそびえ立つ大きな山を見つめる。恐らくこの青嵐とした山の袂たもとに五仏坂があるのだろう、と予め確認しておく。

昼間は農業にいそしむ姿以外は殆ど人というものを見なかったのだが、朝方は今までと違う人々の姿を垣間見れた。真治と同じように散歩中の中高年が数人いたのだ。中にはランニングシューズや短パン、タンクトップといった完全装備で走っている中高年もいた。

真治以外は皆、眠気というものを一切感じさせないきびきびとした活発ぶりだった。老人たちはすれ違う毎に皆しつかりと挨拶してきたが、真治には「若者のくせに情けないな」と嘲笑されているように感じられて仕方なかった。

悔しくなってきた真治は、年寄り連中には負けなないようにと走り出した。そんな中、昨夜温泉で知り合った中年男性に道端で出会し

た。

中年男性も運動好きな老人たちに負けず劣らずな完全装備でのランニングをしている最中だったようで、額には大量の汗の玉が浮かんでいる。タンクトップや短パンからはみ出す体はやはり屈強だ。有名なスポーツブランドのサングラスやシューズなどからも、運動が慣習になっっているのが窺えた。

「やあ、こんな時間のこんな場所で会うとは思ってもなかったよ。私に『運動不足』だと言われたのを気にしてしまったかな？」中年男性が真治の後方から横に付き、走る速度を落とす。

「いえ、単なる朝食までの暇つぶしですよ。運動不足とは一切合切無関係なのであしからず」

「暇つぶしが早朝からの運動とは。なかなか感心だな」中年男性はスポーツマンらしくからつと笑う。

真治は中年男性を煩わしく感じていた。千夏と二人だけで共有する筈だった思い出が、第三者に一部でも流れていってしまうのが気に食わなかったのだ。

しかし元を質せば、真治が断れるものを断らなかったからこうなったのだ。中年男性と宿の人間が、客と従業員の関係を逸しない限りは情報が漏れることは先ずあり得ないだろうと、つつい気を許してしまっただのがいけなかったのだ。

しばらく二人は、無言のまま田と塀ばかりの道を何周かし、早くも疲労と倦怠感が蓄積されてきた真治が先に引き上げることになった。中年男性は後もう少しだけ走ってくると言い、塀の死角に消えていった。

中年男性は一度たりとも、昨晚の約束の件については触れてこなかった。真治にはそれが不思議でならなかった。もしかしたら、あまりにも心ない発言だった為に言い出しっぺの彼が忘れてしまっているのではないか。それはとても無責任な話だが、真治は寧ろそうであって欲しいと思った。

予定通り七時半に宴会場へ行き、食事を済ませた。昨日は寝坊し

たから家族での朝食となったが、いざ計画に従ってみると、本来は宿泊客の中に真治ひとりが紛れ込むのだと判明した。手伝いをする法子たちに合わせていたら、真治があまりにも腹を空かせてしまっただろうという配慮だったようだ。

宴会場には齡六十くらいの老夫婦に、三十代後半くらいの両親に幼い子供といった三人家族がいた。まだランニングをしているので、カメラマンをしているあの中年男性の姿は当然ない。

あの中年男性には「家族で来ている」と言ってしまった。中年男性がこの宴会場に來たら、当然真治の存在に気付くだろう。同時に、ひとりであることも。それはとどのつまり、中年男性に浅はかな嘘が見抜かれてしまうということだ。

真治は中年男性との接触だけは避けたかった。幸い宿の人間とは今日はまだ会っていないので、もう一度部屋に戻って寝てしまおうかと考えた。しかしそれはそれで法子に何と怒られるか知れないし、あの中年男性ひとりの為にそこまでするのも馬鹿馬鹿しく感じた。

真治の導き出した答は、「中年男性が来る前に食べ終えて、引き上げてしまおう」だった。今までやったことのないくらいの早さで朝食をあくせくと掻き込み、その場を後にした。一部始終様子を見ていた周りの客たちは顔に驚きを浮かべていたが、どうにか中年男性との遭遇を免れただけで真治は満足だった。

それからは、大人しく部屋で時間を過ごすことにした。千夏との待ち合わせは正午。絶対に遅刻だけはしたくない。真治はあの川原まで行くのに掛かる時間を踏まえ、十時半くらいに宿を出る計画にしている。現在は八時。残り二時間半。

どうせめばしい番組などやってないのは分かっているが、真治はテレビのリモコンに手を伸ばす。テレビの電源が点いた瞬間に現れたのは、青ばなを垂らした坊主頭の子供だった。如何にも田舎臭い子供を前景にし、後景には古びた焦げ茶色の神社と地方らしい幾つかの小さな屋台がある。その神社で行われた祭りの様子を放送しているようだった。真治はまさかと思いいじつと画面に食い入る。し

かし御天神社とは似ても似つかなかった。少しの間それを観ていたが、どう楽しめば良いのか分からなかったのでチャンネルを変えた。他のチャンネルを回してもこれといって気を引くものはなかったので、テレビの電源を切り、リモコンをテーブルの上に滑らせた。真治は初日と同じよう、寝転がっている座布団に蓄積されてきた熱が鬱陶しくなってくる。

起き上がって携帯電話に表示された時刻を見る。現在は九時二十四分。ここを出るまでは後一時間以上を潰さなければならない。しかし手段がもうない。

そこで真治は、下見を兼ねて五仏坂を散歩してみることにした。思いたったら早く、すぐにタオルと携帯電話を持って玄関へ移った。一昨日は外出するのに部屋の窓を使ったが、今日は堂々と宿の中を経由して出れた。真治はかね折れ階段を降りてる際、水色のエプロンをして雑巾入りのバケツを運ぶ純に出会すも、「夕方にはちゃんと帰ります」と一言伝え、「ねえねえ、これから誰と会うの」と探りを入れてくる彼女を無視して急ぎ足で宿を抜け出した。

五仏坂はその名が表す通りずっと斜面が続く、山の麓に位置しているだけのことはある場所だった。とは言っても気に障らない程度の非常に緩やかな坂なので、千夏と二人で歩き回るのに弊害を伴いそうな雰囲気はなかった。

御天神社の周辺に比べれば樹木の生えている密度はやや小さく、木そのものが質素にやせ細っている。坂から転げ落ちないよう根だけは太く張っており、必死で地面にしがみついている。しかし枝葉は色鮮やかな薄緑で、夏日を神秘的に吸収して見事に坂を美麗に彩っている。

真治の立っているところは斜面が始まるちょうど手前であり、近くには「五仏坂」と書かれた、空き缶やゴミ箱のイラストを彷彿させる色の掠れた古びた看板が佇んでいるので、ここから五仏坂に当たることは明瞭だった。坂道は複雑に揺らめく炎のように数多もの

曲線を描いているので、いくら緩い傾斜と言っても真治のいるところからでは五仏坂の大部分は見通せなかった。

それでもここが素晴らしい場所であるのは間違いがなさそうだ。あの中年男性のカメラマンがこの坂を推薦したのも納得がいった。

真治は本日何度目か知れない携帯電話の時刻確認をする。現在九時五十七分。今から移動したとしても、しばらく何も無い川原で待つ羽目になるのは目に見えている。しかしながら、余裕綽々（しゃくしゃく）と道草を食っていた所為で時間に間に合わなくなる、とだけはいきたくない。千夏が遅刻を咎める性格ではないにしても、真治本人が自尊心からそれを許せる筈がなかった。

ではここは中間をとり、岩に座って数分間だけ休憩しよう。今日は美海部村生活の中で一番長い距離を歩くだろう。太ももがぱんぱんに張って悲鳴を上げるに違いない。そういう考慮をし始めると早朝のランニングがすぐさま思い出され、あれは失敗だったかも知れないなと反省した。

五仏坂の看板の近くに腰を下ろせる大きな石を発見し、歩み寄ると、石の影に隠れた小振りな地蔵が足元にあるのに気付き、真治は足の動きを止めることなくすうつと避ける。

目的の石に座り込むと上半身だけ前に突き出し、踏んづけてしまいそうな場所にある地蔵を斜め上から覗き込んでみる。娑婆の平和を心から祈る神聖なる菩薩の尊容がそこにあつた。真治ははなはだしく恐懼し、覗き込むのを止めた。それ程までにこの地蔵には言い知れぬ慈愛が溢れているのだ。

清浄なる地蔵の目前には供え物が幾つかある。万が一にもあり得ないだろうが、地蔵や供え物を踏んでしまったら大変だ。真治は直ちに立ち上がり、地蔵から離れる。

ふと五仏坂の名前の由来はこの菩薩から来ているのではないかと思つた。「五体の仏がいる坂道」だから「五仏坂」というのはどうだろうか。菩薩と仏はそもそも別物ではあるが、鴨井の説明にあつた「神仏混淆」のような入り乱れた事情があつてこうなつたのかも

知れない。美海部村や御天神社の由来を念頭に置けば、この推測は全くの見当違いではない筈だ。

しかしそうなれば地蔵は五体あることになる。ここにあるのはたったの一体。後四体はどこにあるのだろうか。恐らくは、この長い坂道のあちらこちらに点在しているのだろう。

千夏と歩き回りながら一緒にそれを探してみるのも悪くない。地味ではあるが話題に困らない素晴らしいイベントができた。機嫌を良くした真治は、鼻歌を奏でながら五仏坂を後にした。

昨日一昨日と続けて通った迷うことなき安全な山道を行き、真治は御天神社の前まで辿り着いた。額東に書かれた「御天神社」の文字に一瞬目をやったのち、鳥居の脇にある木陰濃き小道に入る。携帯電話の時刻は十一時二十分を示している。ここまで思ってた以上に時間を消費している。五仏坂から寄り道をせずに直接ここまで来て正解だった。

もう後僅かで千夏との長い時間が始まる。それを考えると心臓の鼓動が高まってきて、額や首筋に汗が浮かんでくる。もう三度目なのに、千夏と会うことに緊張しているのだ。彼女が神秘的な雰囲気纏っていて、自然とガラス細工を扱うように慎重になってしまうのを踏まえても、この不安は尋常ではない。

それは喜ぶべき未来で、寧ろ期待を抱いて鼻歌混じりに歩み寄るものの筈なのに、自分は徐々に迫りくる選択肢なき現実を恐れているのだ。片桐の件から学んだ、忘れかけていた感覚が澱んだ沼の底から顔を覗かせている。もうすぐ、全身が現れてしまう。

ジーーーーー……

シャシャシャシャシャ……

日射が差し込む山林のどこかでクマゼミが鳴き立てている。大概の場合はアブラゼミだったが、蝉の声はいつも真治の心に底知れぬ温みを与えてくれている。それは母なる温かさとは異なる、自然そのものに抱擁されているような体温を用いない温かみだ。

傷みの底なし沼に足を突っ込んでしまった真治を、今回も助けようとしてくれていたのかも知れない。そう意識することによって、真治は心の中にちらつく黒い汚れが払拭された気分になれた。

例え誤解だとしてもいいから、後先など考えずに千夏と一緒にいれることだけを喜んでいよう。そうしないと散歩を快く承諾してくれた千夏に失礼だ。真治は先程よりも断然軽やかな足運びで、険しい山道を下り始めた。

不安の先には、いつだって脆い希望がある。過去に身を以て学んだ、その教訓を記憶の一隅に追いやるように。

川原に着くと、千夏が既に大きな石に座って待っていた。今日はレースが入ったピンク色のノースリーブに茶色いタイトのハーフパンツを着用している。真治を助けようとして紛失してしまった帽子は当然ない。昨日まではサンダルだったのに、今日はカジュアルなスニーカーを履いている。山などを歩き回るのに適した格好だ。

真治が懸念していた、全身真っ白い格好ではない。結局あれば、単なる早とちりだったのだらうと自得する。連日同じ服装だなんて不思議過ぎるし、何よりそんな奇行に走る理由がないのだから。

千夏は手で口元を覆いながら、抑えきれない興奮を静かに漏らす。「凄く楽しみにしてたよ」

「たくさんの候補の中からようやく決定したんだ。五仏坂ってところに行こう」

「五仏坂？」千夏が小首を傾げる。美海部の地を紹介する為今日企画が立てられたのだから、当然の反応だった。

「特別面白い場所がある訳じゃないけど、凄く自然が豊富なんだ。のんびりと散歩するにはもってこいかなって。それで良いかな？」

「うん。わたし、是非そこに行ってみたい。今日はずっと、真治君に従って付いていくからね」

千夏が自分に全てを委ねてくれている。昨日会った時もそうだった。千夏は美海部という地に長くいなながらも美海部についてあまり

詳しくない。真治は思った。言わばそれは、籠の中の鳥のようなものだ。

飼い主の自室で一生を過ごした鳥の内、その部屋のことを正確に把握できていた鳥は何割くらいいるのだろうか。放し飼いされていた鳥ならば、机の裏にどのような埃があるか、どのような物が落ちていっているのかが分かるかも知れない。だが籠の中の鳥にそれはできない。

飼い主やその家族が机の裏に物を落としてしまう瞬間は目撃できても、その落ちた物が長い年月を経てどのような状態になっているかは分からない。それを知る為には、現物を見る他ない。籠という狭い範囲しか移動できない鳥が、どうしてそれを成し遂げられようか。

千夏もそれに似ている。美海部という地に住んでいた経歴はあっても、鳥籠に入っていた彼女は美海部についての知識が乏しいのだ。今日、自分は鳥籠を開けて彼女を外に放す。真治は己の役割を理解した。

「ねえ、早く行こうよ」千夏が石から勢いよく立ち上がった。

川面から反射してやってきた日差しが彼女の細やかな栗色の髪ではじけた。真治は光の残滓でより一層輝く彼女の透明な微笑みに目が眩みそうになった。

二人はすぐに来た道を逆戻りした。御天神社に面した道路に出た時、千夏は鳥居や半鐘に目を配り、避けるように早歩きになった。真治は気になりながらも、その理由を問い質すことはしなかった。彼女は今さっきまで自分がいた鳥籠を振り返りたくなかったのだらう。

当初から案じていた千夏の体力に関しては至って問題がなかったみたいで、彼女はちゃんと真治の横に並んで山道を下った。その途中で真治は、自分が身を置いている宿について色々と語って聞かせた。田舎とは不釣り合いな外装なのに、金には貪欲な部分がそこか

しこにあること。でもそのお陰で見ることができた「地上の星空」。

真治は何の飾り気もなく真顔で、それらの出来事を誰がどうしてこうなったと忠実に報告していったが、千夏は所々で些細なことも笑みを浮かべていた。いよいよ山麓まで来たという頃、どこが楽しいのか尋ねてみると、千夏は「個性豊かな人たちに囲まれていて楽しそう」と軽快に答えた。

例のY字型の分かれ道のところに着き、ガードレールを跨いだ先に待ち構えるけもの道を時間短縮として普通に使おうと考えたが、千夏があまりの急斜面に足を痛める可能性があったので止めた。代わりに木陰が濃厚な下り坂の方を進んだ。

真治もこちらの道を使うのは初めてだったので言い知れない不安に駆られたが、殊の外、複雑に絡まる頭上の枝葉によって辺りがどんより暗くなっている以外は何の問題もないただの一本道だったので、取り越し苦労に終わった。寧ろ真夏の日射を幾分か妨げてくれるその場所は、真治に冷静な頭で会話するのに一役果たしてくれた。

「真治君はお父さんのことが嫌いなんだよね？」千夏が和やかな表情で訊いてくる。喋ってる内容の深刻さとは不釣り合いな表情だった。これでは真治が、『大好きな父親』について語っているみたいだ。

「いいや、あいつにそんな感情を抱く筈がないだろ。ひと様に『俺の父親はこんな人です』と自慢できる箇所がない。威厳がこれっぽっちもないんだ。最低だろ？」

千夏は鼻柱に折り曲げた人差し指を当ててほんのり笑う。「なんでお父さんが好きか嫌いかの話になってるの？ わたしはただ、真治君がどうしてお父さんを嫌ってるのか理由を聞こうと思ったただなのに」

「千夏の目が、『本当はお父さんが好きなんですよ？』と言っているから」

「なにそれ」千夏がおどけるように目を細める。「わたしはそんな目をした覚えのないなあ。真治君の勘違いでしょ」

もうその件についてはどうでもよくなつた真治は、話の焦点を変
えることにした。「千夏の親はどんな感じ？」

千夏は答えずに、うつむいたまま歩き続けている。服や透き通る
ような肌に施された明暗の斑な化粧は、千夏の表情をより暗澹とし
て見せた。真治が冷や汗を書き始めた時、場を取り繕うように千夏
が嬉々とした口調で言った。

「とても素敵なお母さまだよ」

微量の陽光を漏らしていた緑色の網の天井がなくなると、二人の
前に美海部村の大半を一望できる開けた丘陵が現れた。千夏がわあ
っと言つて充溢する光の中を駆けていく。真治も歩調を早めてそれ
を追い掛ける。

先行する千夏の髪は無造作に波をつくり、先端は彼女の晒け出さ
れた白い肩をくすぐるように陽気に跳ねている。太陽光線を浴びな
がら動くそれは、濃艶な海原だった。美海部が喪失してしまつたも
のがそこにはあつた。

立ち止まるのと同時に、千夏の髪に宿っていた光輝がすつと抜け
た。鴨井と被る華奢な後ろ姿にやっと思ひ着き、真治は声を掛ける。
「千夏、はしゃぎすぎだつて」

こちらへ振り返らずに村落を見つめながら、千夏が囁くように静
かな声を出した。「こんな風景、初めて観た」

「あ、そうか。御天神社や川原からじゃ、こんな光景は観れないの
か」千夏の激昂に合点がいった。

およそ五分間、二人は美海部の村落を眺めて過ごした。民家の隙
間に道や田んぼなどがあるというよりは、広大に敷かれた道や田ん
ぼなどの隙間にかこしまつた感じで家々が置かれているようだつ
た。田んぼや畑に視線を注いでみると人らしき小粒を確認できた。
そんな中でも、でこぼこな土の上を走る車の姿は目立っており、真
治は車の軌跡を目で追いつけた。

存分に満足したらしく、千夏が振り向き様に「お待たせ」と言っ

てかぶりを縦に振った。垂れ下がる前髪の間から覗く目には、泣き腫らした跡が残っていた。

坂道に合わせて倉庫らしき小屋が緩い傾斜で立っている。小屋に接する形で立派に咲くひまわりの花壇が設置してある。有り余るほどの農具を積んだトラックが近くに停めてある。例のけもの道との合流地点に着いたようだ。

更に進んでいき、傾斜が段々なくなつて道にタイヤの跡が見受けられるようになりだした頃には、ひなびた家屋がぼつぼつと現れ始めた。改まつて見てみれば、民家はそれぞれ個性を持っている。今し方、丘から俯瞰した際にはそれらに気付くことなどなかった。

あの丘からだ、今の自分たちはどのように見えるのだろうか。真治が考えていると、千夏が清涼とした顔で尋ねてきた。

「さっきの綺麗な風景の中のどこかに当然、ここも入っていたんだよね。もしも今、あの丘から村を見渡してる人がいたらさ、その人の瞳にわたし達はどうか映っているのかな？」

「きつと胡麻程度にしか見えてないと思うよ。たとえば俺や千夏の知り合いだったとしても、きつと俺たちだつて判別できない」

「どんな人だろうと、例外なく同じものになつちゃうんだね」千夏の瞳が物悲しそうに陰りを帯び始めた。

時間が突然停止してしまつたように、真治の顔から数秒の間表情が消えた。千夏の言わんとすることを自分なりに解釈し、真治は彼女と視線を結ぶ。

「うん、そうなる。ただし、それだけ高い場所から見れた場合に限つてさ。きつとそれは不可能に近いと思う」

夏の清爽とした輝きが、千夏の瞳に再び宿つた。「うん。そうだよ。余計なこと言つちゃつてごめんね」

千夏が頭を枝垂れさせて重い空気になるのを防ぐため、真治は矢庭に先手を打つ。「いいや、間隔の違いはあれど、誰だつて物憂くなることはあるさ。そうじゃない人間がいたりしたら、怖くて近寄

りがたくなると思う」

うん。千夏は自分に言い聞かせるように先細りな顎をそつと引いた。

湿っぽい空気が二人の間に渦巻いている。何か明るい話題を提供しなければと不安が真治に兆した時、見覚えのある小さな姿が二つ、路地からこちらへとことごと迫ってきた。

形が次第にはつきりと見えてきはじめ、それが二日前に会った小学生くらいの男の子と女の子だと気付いた。真治はこめかみをひきつらせて周章した。

ふと千夏の様子を確認すると、何故か彼女は真治よりも居心地が悪そうに、まるで因縁の相手に出会したかのように眉をしかめていた。その訳は分からなかったが、子供たちとの遭遇が二人にとつて予期せぬ苦境以外の何ものでもないのは間違いがなかった。しかしその場から逃亡することは叶わず、子供らが接近してしまった。

「ダサいおにいちゃん！」女の子が初っ端から酷いことを言った。真治は冷静を装ってやあと返事をした。千夏の前では極力恥をかきたくなかった。

そんな真治の気掛かりとは裏腹に、男の子と女の子はあつと言う間に口をつぐんでしまった。若々しい頬に桃色を浮かべた二人の視線を辿ってみると、千夏に行き着いた。これはより一層厄介な事態に発展してしまいそうだと粟立つのとほぼ同時に、女の子が言った。「ねえねえ、おにいちゃん。このひとがヨウセイ？」

その言葉に最も早く反応を示したのは千夏だった。かしこまった感じに声を落として尋ねた。「ヨウセイって？」

「いや、それは」

「こいつがこのあいだ、ヨウセイにあつたっていつてたんだぞお」横からすかさず言い訳をしようとしたが、男の子が真治を指差して言ってしまった。千夏は意味が飲み込めず、怪訝な顔で真治を見る。「真治君、どういうこと？」

氷結したように真治は表情を固まらせた。しかしすぐに、千夏の

耳元で囁いた。「何故か知らないけど、子供たちは勝手に勘違いしてるんだ」

「そうなの？ だったらこの子たちに教えてあげようよ」千夏も小声で言う。

「いいや、いちいち解説して納得させるのは面倒くさい。適当にそうだよとか言つて、そのまま話を流してしまおう」

「ねえねえ、ふたりでなにをこそこそはなしてるのー？」女の子がうぶな瞳で真治と千夏を見つめている。

「この間言つてたヨウセイってのは、彼女のことだよ」真治は強引に話の軌道を戻し、千夏の方に顔を向ける。こつそり顎を引いて彼女に合図を送る。

「うん」千夏がやや歪んだ表情で頷く。

「ねえちゃんがヨウセイってことかー？」男の子が生意気な言葉遣いで尋ねる。

千夏はこつそり真治の顔を見た。目は心の窓とはよく言ったもので、唇を窄める真治の目には、千夏に対する懇願が染み入っていた。「うん、わたしがヨウセイだよ」

「やつぱり！」子供たちの甲高い声が見事に重なった。二人は真治の存在などすっかり忘れてしまったように、千夏に寄り添っては離れなくなった。

「ねえねえ、ヨウセイさんはどこからきたのー？」

「ヨウセイってなにをたべるんだあ？」

「ダサイおにいちゃんとはどこであつたのー？」

「あのだせえにいちゃんのことをどうおもってるんだあ？」

子供たちの純真無垢な質問の嵐が千夏を襲う。千夏はそれらにひとつたりとも答えず、ただ明らかな混乱を顔に浮かべてあたふたするだけだった。

自分もまだ知らない、千夏の詳細な情報が出てくるのではないかと内心期待を寄せる真治だったが、流石にこれはまずいと思った。子供たちの小さな肩を掴んで、千夏から無理やり引き剥がす。

「おまえ、なにするんだよお！」

「おにいちゃん、どういうつもり？」

「ごめん、今日は用事があったて忙しいんだ。また今度暇な時に遊ぼう」

「べつにおまえがいそがしくたって、おれたちはどうだっていいぞお」

「え？」男の子の言葉に真治はきよんとする。

女の子がにやりと子供らしからぬませた笑い方をする。「おにいちゃんはいなくなっただけいいから、ヨウセイさんだけおいてっ」

なんて非情な奴らなんだ。子供に対する免疫を持ち合わせていない真治は、頑是無い二人についつい苛立ちを覚えてしまう。拳の中で所狭しと暴れ回る怒りを必死に抑止し、外に逃げ出さないようにする。

「ごめんね。用事というのは、わたしがなの。おにいちゃんには無理やり付き合ってもらってるだけなの」

柔らかくて優美な口調で言うと、千夏は子供たちの頭を順に繊細な手で撫でていった。その動作は、子供を愛でる母親とはまた違った、神秘的な温かみを孕んでいた。

あんな風に触れられたら、いとけない子供だろうと観念するだろう。真治は羨望の眼差しでその様子を見守った。とうとう男の子と女の子は諦めたらしく、千夏に「わかった」と頷いた。

相好を崩しながら、千夏は再び子供たちの頭を撫でる。「今度、いっぱい遊ぼうね」

うんと答え、子供たちは満足そうな表情で「バイバイ」と言った後、来た道に戻って行ってしまった。途中、千夏に向けて手を振ってきた。千夏もそれに応える。

剥き出しになった白く華奢な腕が大きく宙を動き、夏の日溜まりを攪拌した。千夏の瘦躯も右に左にと揺れ動き、ピンクの服が肌と擦れ合っていた。真治は子供らを見ているつもりだったが、千夏の後ろ姿に目を奪われてしまった。

子供たちが更に小さくなっていくのを見届け、千夏が真治の方へ振り返る。ゆつくりと一步一步、真治に近寄ってくる。納得させられる弁解が思いつかず、真治は顔を伏せる。

「ねえ、子供たちと仲良くなっちゃったよ!」

「へっ?」

「今度、あの子たちと何して遊ぼうかなあ。その時は真治君も一緒だよ」

ヨウセイの件について早速問い詰められると焦っていた真治からすれば、千夏の無邪気にはしゃぐ様はあまりにも不意を突かれるものだった。まして真治の頭の中には、あの二人を発見した時の千夏の焦る顔が強く根づいている。今の一変した態度に疑問を抱かない訳がなかった。

「ねえねえ、楽しみだね」

「あ、ああ……。楽しみだな」

疑問符だらけの現状に納得のいかない真治だが、ヨウセイの件に触れてこないのは不幸中の幸いなので、もうこの件については言及しないことに決めた。

しばしあの子供らを話の種にして、千夏との会話を持続させた。

都会に憧憬を抱いていることや自分が都会人として烙印を押されてしまったこと、自分のいる宿の従業員に余計な入れ知恵を吹き込まれてどこかマせてしまっていること。千夏をくすくすと頻りに笑わせられたので、取り敢えずは成功だった。

そして遂に、五仏坂の入口に辿り着いた。延々と伸びた緩い坂と古ぼけた看板を見て、千夏が口元を弛緩させる。「ここが五仏坂?」「うん、今日存分に散歩する五仏坂」真治はわざとらしく声を上げる。「あつ、そう言えば足元に地蔵があるよ」

「わっ」千夏が寸前のところで地蔵を交わす。躓いたように体が跳ねた。そんな仕草が可愛らしく、真治の心をくすぐった。

「ちょっと、そういうのは予め言っておいてよ。後少して踏んじゃ

うところだったよ」千夏が眉根を寄せながら言った。

「ごめん、すっかり忘れていたんだ。今度からは気を付ける」

「そう。気を付けてね」千夏がふてくされた顔で外方を向いてしまった。真治はそんな彼女の仕草すら可愛いと感じた。

「五仏坂って、どうして五仏坂と言うと思う？」

「え？」

昨日、千夏に「美海部村と御天神社」について質問したように真治は再び振る舞った。千夏は前件のように素っ頓狂な声を上げはしなかったが、やはり意外なタイミングで来たものだから驚いたみたいだった。

先程真治が使用した大きな石に千夏が腰掛ける。「美海部村と御天神社のことなら有名だけど、それについては全然知らないや。どんな由来なの？」

「坂ってのはそのまま目の前にある坂のことで、五仏ってのは五つの仏があるという意味なんだ。だから五仏坂。美海部村と御天神社の由来のように神仏混淆が関わってるから、菩薩と仏はごちゃ混ぜになってるけど」そう言っただけで真治は坂と地蔵を交互に指差した。

「なんだ、そのまんまだ。単純だね」

「うん、何の捻りもないことに。それで、この坂を散歩しながら後四体の地蔵を探そうかなって思うんだ」

「うん、楽しそうだね。一緒に探そうよ」

よし、軌道に乗った。真治は心の中でガッツポーズをとった。後のはのびのびと散歩をするだけだ、それで万事全て上手くいく筈だ。

「ところで、真治君は自分のお薦めを紹介するって感じに言っただけで、実はここに来るの初めてでしょ？ わたしと同じで」

「え？ いや、そんなまさか。前に一回来たことがあって、とても印象深かったから千夏を連れてきたんだよ」

「ううん、それは嘘だよ」千夏は静かに、しかし確実な発音で言い放った。坂道に縫われた森の樹木たちが微かに、身を揺さぶった。

「だって、ここに来たことがあるんだったら、五つの地蔵がどこに

あるか分かる筈でしょ。今更一緒に探そうなんておかしいよ」

頭の中を必死に手探りし、ようやく指に引つ掛かった言い訳を区分なくさっさと拾い上げる。「その時は地蔵探しをしなかつたんだ。ただ単に、五仏坂の坂道をぶらぶらと歩いただけで。でも帰り道にその地蔵を発見して、地蔵が他に四体あることを知つたんだ」

「じゃあ、さつき言つてた五仏坂の由来つて、真治君の推測に過ぎないんだね」千夏が恐ろしく無表情な顔で言つた。

「確かにそこまでは憶測だつた。でも、その答が気になつて気になつて仕方なくなつてきて、それで宿の従業員に訊いたんだ。鴨井さんつて人でさ。そしたら、大正解ですよつて言われて、確信に変わった」

千夏は未だに合点がいかなそうに真治を見つめる。「本当に？ 真治君、別に格好つけなくてもいいんだよ。誰かに教わつたんだつたら、それでいいから。そもそも、美海部に住んでいながら土地を詳しく知らないわたしがいけないんだから。わたしはただ、嘘をついてほしくないだけなの」

葛藤が真治の頭の中を掻き乱す。千夏が許してくれると言つてるのだし、正直に全てを打ち明けてしまおうかと思つ反面、だからこそ千夏にだけ『嘘』と認識されないうつ、このまま嘘を突き通そうかという気持ちがあつかり合つている。

「千夏、俺は一度も嘯いてなんかいない」結局、英断のできない弱虫な口は、嘘を貫くことを選択した。

「本当に？」

「うん、本当に」

「本当の本当だよな？」

「大丈夫。心配は要らない。俺は嘘をつかないから」

「そつか。嘘じゃないんだね」一瞬間、千夏の瞳が霞んだが、たちまち彼女は頬を服と同様のピンク色に染め、微笑みながら頭を枝垂れさせた。茶混じりな黒髪が、暖簾のように垂れ下がった。

「疑つてごめんなさい。とても反省してるから、許して」

耳の後ろの髪を掻きながら、「謝らなくていいよ。最初から怒ってなんかいないし」と真治はやや早口に言った。

「ありがとう。真治君は優しいね。わたしなんかとは大違い」千夏は頭を上げ、肩でそわそわと落ち着かないでいる、陽光を先端に吸い込むまばらな髪の毛たちを手であやした。

こうして二人は、眼前に延々と伸びた緩やかな坂道を、地蔵がないかと足元に細心の注意を払いながら、のびのびと進みはじめた。

坂道はくねくねとたくさんカーブを描いている。素直に一直線に進めるなどと言った、都合のよいものにはなっていない。それは自分たちが進むべき道のようにもあると真治は思った。

限りなき不安を抱えた自分が後先考えず強引に進んだところには、果たしてどのような未来が待ち構えているのだろうか。胸を這い上がってくるほの暗いものを払いのけ、真治は進み続ける。

葛藤が純の頭の中を掻き乱していた。今、宿を抜け出したとしたら、悦子はどれだけ憤激するだろうか。しかし、真治たちのことが気になって気になって仕方なくなってきている。

真治の恋物語の行方は当然、あの妖精のような少女と鴨井の後ろ姿が被る理由が知りたい。このまま放置していたら、かゆいところを掻けないような苦しみがやってきて、悶えて死んでしまう気がした。

純は雑巾をバケツに放り込み、ロビーの時計に視線をやる。つい先程正午を指したと思われた針は、既に十三時を指していた。

大丈夫、夕方くらいまでに戻ってくれば大した影響はなくて、悦子ばあさんにそれ程怒られないで済む筈だ。

濡れた雑巾が入っていることなどお構いなしに、純は身に付けていたエプロンもバケツの中に放り込み、ちょうど誰もいないロビーを素早く通り抜け、宿を後にした。

いざ探索を始めたはいいが、純は真治がどこに向かったのかを知らなかった。おそらくは、御天神社やその周辺だろうと予想できて

いたが、もしもそれがハズレだったとしたら、大きな時間ロスになつてしまう。ここは、慎重に行動しなければ。

しかしながら、真治の行動範囲を思慮すれば、他に行きそうな場所など見当がつかない。昨日一昨日と真治を迎えに行った法子や沢木から教えてもらった話だと、彼は宿の近くの路地と御天神社の周辺で発見された。法子から詳しく聞いたその路地と言うのも、御天神社のある山と宿を結んだ線上に位置していたのだ。

御天神社で妖精が現れ、逃げた。それを真治はひとりで追った。その後、沢木が真治を発見したのはゴクリ滝。かなりの時間、行方不明になっていたにも関わらず、いたのは御天神社からそれ程離れていない地点だった。それはとどのつまり、御天神社の周辺ですつと妖精と時間を潰していたということだ。

しかも昨日、宴会場で真治は「妖精とは昨日にも会っている」と言った。

以上を踏まえれば、二日間とも真治は、御天神社のある山の特に神社周辺で妖精と会っていたことになる。だが会うにしても、わざわざあんな辺鄙な場所に二日連続で行く理由とは、何なのだろうか？

妖精の家とか真治のいる宿の付近、または中間辺りで会えばいいものを。それとも、中間がちょうど御天神社のある山に当たってしまっているのだろうか？

からきし答は導き出せないが、何にしろ、そこまで御天神社の周辺に繁々通っているのなら、きつと今日もそこにいる筈だ。

純はスキップ混じりの軽やかな足取りで、御天神社へ向かいだした。

「あ、ジュンおばちゃん、なにやってるのー？」

路地で子供ら二人に出会した。純はたびたび子供らと一緒に遊んであげているが、今日ばかりはあまり二人と関わりたくなかった。

「なあなあ、きょうはなにしておそぶんだあ？ またスイカのタネでガキやるかあ？」男の子が飛び跳ねながら訊いてきた。

「ごめんね。今日は忙しい用事があつてさ。また今度遊んであげるから」

すると二人は、「えー」と甲高い声を八モらせ、騒ぎだす。「やだやだ、あそぼうよー!」

「いやあ、本当にごめんね。今しかチャンスはないの」

「さっきのヨウセイとにいちちゃんみたいに、おまえもうそついてあそびにいくんだろ!」男の子が透明感のある若々しい頬をぷっくり膨らませて、怒声を上げた。

「えっ、ヨウセイ?」

「なんだ、ジユンおばちゃんしらないのー? おにいちちゃんといっしょにいるヨウセイさんのこと」

純は片方の眉をがくつと落として尋ねる。「そのお兄ちゃんの名前は分かる?」

「ううん、わからない。ジユンおばちゃん、ごめんね」

「ううん、別にいいんだよ。分からないものは仕方ないもんね」純は優しく女の子のおかっぱ頭を撫でる。

「あっ、そういえば……」男の子が何かを思い出したように口をぽかんと空けている。「ヨウセイが、にいちちゃんのことを『シンジくん』ってよんでたぞお」

それを聞くと、女の子は「あっ」と言つて首を縦に振った。声が突然大きくなる。「そうそう、シンジくんだよ!」

ふふふふ。純はこみ上げてくる笑いを抑えられず、口から大量に漏らす。「なるほど、なるほど」

純はそのまま山へ行こうと一歩を踏み出したが、あることが引っ掛かつて振り返る。「そう言えば、真治君と妖精が嘘つきってどういう意味?」

「これからようじがあるつていつてたのに、こつそりあとつけたらイホトケザカにはいつたんだぞお」

「ママがあぶないつていつてたから、わたしたちはいりぐちでひきかえしたんだよー」

「ありや、危ない危ない。全然逆の方向に行っちゃうところだった。とにかくありがとう」純は子供らの頭を交互に撫でてから、五仏坂に向けて歩きはじめる。

「じゃあね、達哉、千夏」

五仏坂は先が見えながらもなかなかそこまで辿り着けない、距離の間隔が掴みにくくて焦れたい坂道だった。登っている間は坂道をはじめ、辺りの木々はごく平らに佇んでいるようであり坂道という実感はなかったが、ふと自分たちが来た道を振り返ってみれば、地藏や看板が随分と下にあった。

そんなことを千夏と一緒に話して、二人で驚嘆の声を上げたりした。千夏は「不思議な坂道だね」と微笑んだ。

ようやく下から見えていた直線が終わってカーブに差し掛かる。辺りには様々な種類の木々が色鮮やかに聳えている。ここはちょうど、入口からは死角になっていた。いよいよこれから未知の領域で、坂が一本道とは言え、今までみたいにそう簡単には引き返せない場所に踏み込むのだと思って、真治は落ち着きがなくなってくる。しかし、そんな気掛かりを胸に抱いているのは真治だけだったように、千夏は悠然とした足取りで更に進んでいってしまう。

「真治君、どうしたの？」千夏が立ち止まる真治に気付いた。

「いや、何でもない」真治は再び千夏の横に追いついて前進しはじめる。

一度目のカーブを経てからまたしばらく直線が続いた。先程の直線に比べると、横切っては後ろに遠ざかっていく樹木たちは、太く立派なものばかりだった。

千夏と初めて言葉を交わした、あの仙境のような森とはまた違った種の靈妙な雰囲気漂っている。あちらを「ぼかぼか」と例えるなら、こちらは「じめじめ」と言った感じの、それでいて両方が透明な靈気を纏っている、そんな言葉で言い表しにくい不思議な雰囲気なのだ。

そんなじめじめな森でも、日射はしっかりと真治たちに到達していた。あちらの森は木漏れ日程度だったが、こちらは頭上で枝が絡

み合うこともないので直に太陽光を通してしまう。

そうすると、なだらかな傾斜すら体内を温める要因となってくる。真治は千夏の前では常に格好をつけていたかったので、スポーツタオルは首に引っ掛けておらず、腰に小さなタオルを忍ばせているだけだった。それすら使用せずに、汗を額やこめかみに浮かばせたままにした。

千夏はと言えば、まるで冷房の効いた部屋にいるかのように、これっぽっちも暑そうな素振りをしていない。汗も全くかいていない。

いくら真治よりも涼しい格好をしていて更に男女での発汗量の違いがあると言っても、これを見せられては真治も汗を拭拭しづらかった。

「真治君、額の汗が凄いよ。何かで拭かないと体に悪いよ？」千夏が真治の異変に気付いて言った。

千夏に指摘されたことよりも、自分の額だけに視線を注ぐ彼女の瞳の方が気になって仕様がなかった。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

真治はズボンと腰の隙間に差し込んでおいたタオルを取り出し、ゆっくりと丁寧に額の汗を吸収させていく。視界はタオルの生地の水色に染色され、その間に千夏がどのような瞳を携えているのか気になった。

額のぬめりを取り除き、再び外の世界が現れると、そこには至って今まで通りの千夏がいるだけだった。僅かに様子が確認できなくなるだけで、これほどのものが煮え立つてくるとは。真治は自分に兆した不確かな不安に背を向けるように、早足で千夏を追い越し、彼女をリードするように前方をずかずかと進みはじめた。

中年男性のカメラマンによれば、五仏坂は豊饒な自然に囲まれており、見好い花畑があるとのことだった。いくらのほんとした散歩を目標にしているとは言え、流石に緩急を織り込みたい真治にとって、その素敵な花畑の存在は必須だった。

それにもかかわらず、なだらかな坂を登り始めてから大分経つが、

花畑らしきものを全く視界に捉えることが叶わないでいた。これではまずい。

しかしながら真治のその心配は、坂の道幅が増してくるにつれて霧が薄れていくように徐々に存在を覆ませていった。どこか威圧的だった山林は木と木の間隔を次第に広げていき、湿り気を帯びていた枝葉は雨天後の空のように明るい色調になっていった。

緑に濃緑、深緑、うぐいす色、黄緑、萌黄色、浅葱色。とりどりの葉たちの作り出す不規則な模様は、真治たちの視線を強烈な魅力で引き寄せ、歩行する足を大きく鈍らせた。

次第にそれら葉の芸術が下に沈んでいき、辺りに殆ど樹木を見掛けなくなり、道の左側が崖に面してきた頃、二人はどちらから言い出してもなくほぼ同時に足を止めた。

「わあ、あんなに小さくなっちゃった」

千夏が指差した先には、十円玉ほどにまで縮小された芸術があった。先程まで自分たちを高めから見下ろしていた木々だが、今は自分たちが見下ろす形になっている。五仏坂の入口に至っては、もう目で捉えられないくらい小さくなったのか、木深い山林の中に紛れ込んでしまったのかすら判別がつかない。

真治たちが長時間歩いてきた五仏坂の道のりは今やジオラマのように縮小され、手を伸ばせば触れてしまいそうな雰囲気だ。正直、坂道が上がっていたと感じさせないほど極小な角度の坂だったので、その変わり果てた姿が真治にどれだけの距離を登ってきたかを実感させた。

徐々に沸いてくるその現実感からふと目線を移すと、小さな丸木を連ねて作られた段差に、いつの間にか千夏が窮屈そうに座っていた。

「これだけ登ってきてたなんて、全然気付かなかったね。びっくり。どつりで足が疲れてきてるなって思ったんだ」

そう言っただけ千夏は両手でふくらはぎを包み込み、指にくつと力を入れて揉みはじめた。弾力性の高いふくらはぎは、様々な角度から

の力に何度もグニヤグニヤと変形した。まるでゼリーのようだった。
「ごめん。女の子には少しきつかったかな」

「うっん、まだまだ大丈夫だよ。ちよっと一休みすれば、すぐに出
発できるから」

真治も丸木の段差に腰掛ける。列になっっている丸木はひとつひとつの背の高さが揃っておらず、その高低差が尻の部分に丸木を食い込ませる。「千夏、ここに座つるとちよっと痛くならない？どこか別の場所を探そう」

「そうだね、ちよっとお尻が痛いかも。でも、ざっとそこら辺を見渡しても他に座れそうな場所がないし、わたしはここでいいよ。それとも地面に座る？」

代赭色たいしやの土と千夏のベージュのズボンに目をやって真治は答える。
「いや、千夏の服が汚れるだろうから地面に座るのは止めておこう」
ふふ。千夏が口元にだけ微かに笑みを浮かべる。「そんなにわたしを気遣ってくれなくてもいいのに。こんなズボンの一着くらい、洗濯すれば済むわけだし。真治君は優しいね」

「俺は優しくなんかなくて」
「うっん、優しいよ。美海部を観光したい、なんていうわたしの我が儘をしっかりと聞いてくれたし。きっと東京の方では、女の子から人気あつたでしょ？」

何でそんなことをわざわざ訊くんだ。真治は心の中でそっと嘆いた。それはつまり、自分には男女としての感情を抱いていないということなのだろうか？ やはり自分は、また茶番劇を演じていただけなのか？

千夏と片桐は別人だ。性格だって全くと言って良いほど似ていない。なのに真治は、千夏の言葉の裏に片桐の心理を絡ませてしまう。

「あれ、真治君大丈夫？」気付けば、千夏が真治の真つ正面にしゃがみ込んでいた。足が折り畳まれ、ふくらはぎと太ももが圧迫し合っ
って横に広がっている。

「ごめん、ちょっと考えごとをしていてさ。足はもう大丈夫？」

「うん、ありがとう。もうばっちりだよ。それよりも、真治君が心配。森で会った時も途中でそんな感じになっていたし、もしかして熱中症じゃない？」

そんな馬鹿な。熱中症な訳がないし、それじゃあ散歩が強制終了となってしまうではないか。「まさか。自分の体調の変化はしっかりと分かる。今は至って健康さ」

森の件も千夏の姿にいつの間にか片桐が重なってしまったのが原因だった。

一刻も早く、頭の中に霧のように霞んで、しかし確実な存在感を持って現れる片桐を抹消しなければ。

それから十分ほど、真治と千夏は眼下に縮こまる村と自分たちの歩いてきた長途を指差しながら、どこの方角から来たとかあそこを通ったなどと言った他愛もない話をした。

ここまでの道中、落ちがなく地蔵を探していたのだが、未だにそれらしきものを一体も発見できずにいた。しかしそんなものがなくても、千夏との散歩は順調に行われている。寧ろ問題なのは、花畑の方だ。

よいしょっ。千夏が勢いよく座っていた段差から立ち上がる。「待ってくれてありがとう。もうそろそろ進まない、日が暮れちゃうよね」

執拗にひりひりと体を焦がしつける光の放射の中を二人は再び進み始めた。夏木立からは、セミの鳴き声は一切聞こえてこなかった。

尾の上^えらしき広い場所に出ると、今まで登っていた坂道は途切れ、茶色い土と樹木も唐突になくなり、青草と岩ばかりになった。雑木林はようやく視認できるくらいの隅っこに、お情け程度に居座っているだけだった。

千夏がひとり先行して、崖に接した小高い丘にぼつりと佇^{たわも}む巖に

早足で向かっていく。真治も後ろから追い掛ける。

清明な青空と雲の峰に千夏のピンク色の衣服や剥き出しの白い太ももや肩、そこに戯れる髪が重なり、お互いの存在がより映えた。まるでどこかの巨匠が描いた絵画を目の当たりにしたようで、真治は恋愛とは別種の感動を覚え、立ち尽くして体を震わせた。

「わあ、ここからだと風景がよく見渡せるよ！」

巖の上から千夏が楽しそうな大声を上げた。真治も岩根にある小さな岩を踏み台にして、大きな岩をよじ登る。巖の天辺に手を掛けると、千夏が座る位置をずらして場所を空けてくれた。

「ほらほら、これ見て」

急かされるがままに巖の天辺に座って前方を見ると、美海部の村が真下に敷かれていた。先程の眺望とは全然角度が違い、どちらかと言えば鳥瞰しているような、まるで鳥になって空から村を見下ろしているような気分になった。

体がしつかりと地に存在している感覚がない。上も下もそこにはなく、宙で何の抵抗もできずにただされるがままに浮いているようだ。後数歩進んだら、この風景の中に吸い込まれるように落ちていってしまいそうだった。そのあまりの迫力に真治は息を呑んだ。

「素敵。凄く長い道のりだったけど、ここまで頑張って登ってきた甲斐があったね」体育座りをした千夏が感嘆の声を出した。

「気に入ってくれてよかった。俺は二度目だけど、やっぱりここは飽きさせない場所だよ」

没个性的となった民家の屋根の中で、唯一紅色の屋根だけが己を主張していた。真治が世話になっている宿だ。「あの無駄に目立つ紅色の屋根が、俺がいる宿だ」

「本当だあ。話してくれた通り、やたら目立ってるね」千夏の声が宙に溶け込む。

「ねえ、今度、真治君のいる宿に遊びに行ってもいい？」

純や道夫のことが頭によぎり、真治は首を横に振る。「ごめん。流石に両親とかがいるし、それは難しいと思う」

そっか……。

千夏は残念そうに、折り曲げられた膝に顔をうずめてしまう。彼女の髪がふつくらとした太ももに覆い被さる。それはとても儂げで、彼女の落胆ぶりを顕著に表していた。

「わたしがいると邪魔なんだね」

「そんなことはないから。ただ両親が、異性の友達と言つものを理解してくれないんだ」

そっか。

千夏は腰を上げ、颯爽と巖を飛び降りていった。降りる時に彼女が足元にいると危ないと思い、真治はしばらくそこから身動きがとれなかった。

更に進むと、今度はなだらかな下り坂が真治たちを待っていた。

先程の登り坂とは違って辺りに木々はなく、草原となっていた。

緑色に光る草花を夏の生暖かいそよ風がなぶっている。しかし草花も満更ではないようで、その身を委ねてゆらゆらと心地よさそうに揺れている。こびりついていた夏の光がそれに合わせ、草花の上で粉になって舞い踊る。そんな草花たちを縫うようにして作られた道を、神秘的な輝きに彩られながら真治たちは歩いている。

「すごい。ロマンチックだね！」千夏の笑顔は光の粉の中でより一層輝いた。

邪魔者のいない空けた地を通り抜ける和やかな風は、千夏の髪を草花と同様にゆらりゆらりと遊ばせる。また、彼女の桃色の服や透き通った白い肌などは、光の海に染まっては境界を失い、裸になつたようにその瘦軀をはっきりと見せつけている。

歩く度に、拳に収まってしまいそうな狭い肩が交互に持ち上がり、髪はふわふわと彼女の肩をくすぐり、適度に膨れた太ももは極小なしわを作りながらふるふる揺れる。いつの間にか真治は歩く速度を落とす、そんな千夏の後ろ姿に見惚れていた。

待ちあぐんでいた素晴らしき花畑は、山裾まできて五仏坂もいよいよ終わりだろうという頃に現れた。富良野や美瑛と言った有名な花畑のような広大さはあり得ないと流石に分かっていたが、真治はその風光を目にした瞬間、思考が途切れてしまった。

その花畑は、坂道の右手の茂みがなくなっただかと思うと、唐突に美しい姿を披露した。小高い丘に赤や桃色、黄、橙など色とりどりに花が縦一列に、均一に並べられていた。色の組み合わせは本物とは異なるが、それはまるで虹を描いたようだった。

照りつける太陽光の手助けもあって、虹は丘の上で一段と輝きを発していた。その丘を越えた先には、かの美海部村が広がっていた。すごい、なにこれ。千夏が賞嘆の声をぼつりと漏らした。彼女も地上の虹に魅入られて、視線をひしと掴まれていた。

これが真治君の言っていた花畑だね。僅かな時間で千夏は再びため息を漏らした。素敵……。

この時の真治にとつて、千夏の掛けてきた声は本当の意味で、自然に溶け込んでしまっていた。沈黙の間がしばらく続いた。
ねえねえ。

自分の顔の前に出現した、上下に小急ぎに揺れる小さな手のひらを見て、真治はようやく千夏に気付いた。真治はそぞろに対応する。「ごめん、どうかした？」

「こうやって高いところから花畑を觀賞するのもいいけど、あの綺麗な空間に入ったりすることはできないのかな？　きっと素敵だなあって思っ」

その質問は真治が一度、花畑に足を運んだという前提でされたものだった。重ねた嘘をこんなところで崩壊させてはならないので、真治は妥当な解答を得る為につらつらと思考を巡らせはじめた。

地蔵ならばともかく、この心奪われる美しき花畑を目にして、「以前は花畑に降りてみようなんて全く思い付かなかった」などは口が裂けても言えない。曖昧で姑息な答は出せない。

花畑に行けるか否か。この二択で答えるしかない。

たった二つだけの選択肢なのだから、間違える確率は五割だが、それは同時に当たる確率も五割ということだ。輝かしい未来に到達できる可能性が僅か五割、それは真治の選択する勇気を削り取るのに十分な役割を果たしていた。

どうにかして、一割でも成功率を上げる方法はないだろうかと真治が考えていた時だった。花畑の方にちらりとやっていた視線の端に、足場の死角から謎の人影が現れ、地上の虹の中に紛れ込んでいった。

それはあまりにも一瞬のことで、その謎の人物の性別や年齢などは一切把握できなかつたが、今の真治にはこれ程有り難い手助けはなかつた。

千夏を窺えば、彼女の視線は真治の口元に固定されており、その出来事に気が付いていない様子だった。「勿論、花畑に入れるよ。前に入つたし」

今度は堂々と花畑の方に体の向きを変え、大袈裟に真治は声を出す。「ほら、ちょうどあそこに人影が見える」

「え、人影？ どこ？」

花畑に向けられた指先を千夏は再三再四、目を細めて確認する。実は真治にも、例の人影はもう見えていなかった。既にどこかに去ってしまったみたいだった。

「あー、もうそこら辺の死角に消えたのかな？」真治は平気で嘘を重ねていく。大きな窪みだらけで、更には花畑自体が斜めに傾いていることにより、死角になり得そうな場所が幾らでもあることを心底幸運に思った。

「それじゃあ、そろそろ進もうか。このまま歩いていけば、いずれあそこの花畑に辿り着くからさ」

「うん。早く花畑に行きたい」千夏はすんなりと頷き、真治の横に並んで共に坂道を下り始めた。

どうして付いて来ちゃったのかなあ。純は自分の両脇をさも当然

のように闊歩する、いとけない二人の姿を見て思った。

三人は未だに、民家や田んぼに囲まれた遊歩道を歩いている最中だった。純としては、この二人の子供を早く帰宅させたかった。

「ねえねえ、お母さんには、五仏は危ないから行っちゃ駄目って言われてるんだよね？ このままじゃお母さんどころか、お父さんにもカンカンに怒られちゃうよ？」

「だいじょうぶだよー。わたしたちには、ジュンおばちゃんがいるもん」女の子は純にっこりとウィンクを送る。

純は不満を鼻の穴から吐き出し、指の爪と腹を髪の中に沈める。

「そうは言われてもねえ。あたしは親じゃないんだし、責任取れないんだから困るんだって」

「またそうやって、オレたちをまこうとしてるんだぜえ。おまえ、ヒキヨーモノだなあ！」男の子が純を指差して声を荒げた。

「うんうん、ジュンおばちゃん、ヒキヨーモノー」女の子も言い出す。

「ジュンのヒキヨーモノお」と男の子。

「ジュンおばちゃんのヒキヨーモノー」と女の子。

「ヒキヨーモノお！」

「ヒキヨーモノー！」

二人はひたすらその言葉を繰り返し、どんどん大声になってくる。純は眉をしかめ、眉間に手を置く。

「いやいや、本当に困るんだって。勘弁してよねえ。まったく、どうしようかな……」

純は五仏坂がある山の鞍部と子供たちに交互に目を配り、仕方ないなと長嘆息する。「分かった。あたしも行くのを諦めるから」

騒ぎ立っていた子供たちが急に大人しくなった。そして、二人揃って言った。「あきらめる？」

「そう、あたしは五仏に行かない。だからあんた達も五仏には行っちゃダメよ」

「えー」二人はふてくされた顔になりながら、声を合わせて言った。

「さあさあ、早くみんなでおうちへ帰ろうか」純は嫌がる二人の手を無理やり引き、来た道に戻りだした。

花畑には、虹を作り上げているもの以外にもたくさん種類の花々が咲いていた。向日葵や蓮のような馴染み深い花もあれば、中には真治たちの頭をくすぐる程の丈のものもあった。大小問わず、その殆どは真治にとってこれっぽっちも馴染みのない花だった。

「この花はなんて言うんだろう。何か、惹き付けられちゃった」

しゃがみ込んだ千夏の細長い指は、草丈五十センチメートル位の紫色の花を掴んでいた。花弁を傷つけないよう、優しく丁寧な触れ方だった。

どうせ答えられないのは知れてるが、真治も紫色の境域に近付いて観察してみる。花には粗い毛が生えており、葉は対生して細長く白みを帯びている。癒合して筒状になった花糸があった。形としては、松毬まつかさを少し押しつぶしたような感じだ。

やっぱり、真治の知識の範囲には一切含まれてない花だった。

「何て名前の花なんだろう……。開花の時期や寿命、雄しべや雌しべ、花冠、がくがどんな性質を持っているかとか、花言葉だとか、この花についての知識をわたしは全く持ち合わせていないけど、きっととても素敵な花の筈だよ。わたしには分かる」

「それは女の勘ってやつ？」

「ううん、近いような気もするけど多分違うんだ。本当はそれよりももっと身近にあつて、それでいて手の届かないところにあるものだと思う。ごめん、意味が分からないよね」

真治は唇の端を吊り上げながら首を横に振る。「言葉で表せないものなんて、世の中幾らでもある。それを表現するのは、作家だとか画家だとか音楽家みたいな専門的な『芸術家』の仕事さ」

実のところ、真治にも紫色の花の神秘はひしひしと胸に伝わっていた。でもやはりそれは、千夏の言うように『言葉で表せない何か』であり、少し意識を離せばこの花畑の鮮やかな彩りの中に極自然に、

すつと溶けていってしまふ儂い一瞬の産物だった。

紫色の花弁に髪が触れそうなくらい顎を引いて、千夏は頷いた。

「ありがとう。なんだか真治君は、芸術家みたいだね」

「そんなまさか」

「今わたしの中に、言葉じゃ表せない温かい何か舞い降りたもん。真治君流に言えば、『芸術家』の仕様だよ、これ」

千夏に言われ、真治の頬は紅潮した。「俺が芸術家、か。俺はこれっぽっちもそうは、思っていないんだけどな……。一昨日、母親にも言われた」

「ほら、お母さんにも言われてるんだから、やっぱり真治君は芸術家なんだよ」

千夏にそやされるのが段々齒痒くなつてくると、真治はポケットに手をつ込み、花々の隙間をひとり散歩しはじめる。

すると、丘の先に趣のある、葡萄茶の屋根の一軒家を発見した。

この辺りで民家を発見したのは初めてだった。真治はこの花畑の持ち主ではないかと思った。虹を描くように綺麗に敷き詰められた花々からしても、確かに人工物の雰囲気は漂っていた。

そこで真治は一つの危険を察知した。もしかしたら自分たちは、人の敷地に不法侵入したことになるのでないか？

「こらてめえ、人んちの庭で何やってるんだ！」

悪い予感は的中した。のっぽな花の隙間から、花と同じくらいの背丈の老父が青筋を立てて飛び出してきた。

泥の跳ねた跡がはつきりと残るぶかぶかのズボンにTシャツ、日傘代わりの鍔の広い帽子。老父の格好はまさに、真治が思い描いてきた田舎の老人そのものだった。

「え、いや、ここが人の私有地だなんて、知らなかったもので」

「ふん、怪しいものだ。ここは花を盗みにくる奴が後を絶たねえんだ。たかが花と言えども、盗みは盗みだ。俺は許さねえぞ！」

「いや、まさか、俺は花を盗む気なんてこれっぽっちもないです。信じて下さい」

「へっ、犯人はいつだってそういうこと言うもんだ。『はい、そうです』なんて言う筈ねえもんな。俺はそんな愚策にはまるほど馬鹿じゃねえんだよ!」

老父が鋭い眼光を放ちながら言った。その眼は、一度決めつけたことは雨が降ろうが風が吹こうが絶対に変更しない、頑固者特有のものだった。

これは駄目だ。真治にはこの頑固者を説き伏せる能力もなければ、誤解を解く術もなかった。あるがままに、碌な結果が待っていないと知りながらも、身を任せるしかないようだった。

「あれ、真治君、そこのお爺さんは誰?」いつの間にか真治の背後に立っていた千夏が、暢気な声で訊いてきた。

真治を追い掛けてきた千夏を見て、老父は更に眉間のしわを深くした。噎れた声でぽつり、「もう一人いやがったか」と言った。

このままでは、千夏まで厄介ごとに巻き込まれてしまう。真治の額には、暑さと焦燥感が混じった多量の汗が浮かんでいた。

「彼女は、俺に連れられてここに入ってしまったただけなんです。全責任は俺にあるんです」

「いいや、駄目だな。お前の発言なんぞ、聞くわけねえだろうが。容疑者の親族のアリバイ証言並みに参考にならん。とにかく二人とも俺に付いてこい」

そう言って老人は、その歳にしては逞しい腰をしゃきつと伸ばし、手足をしっかりと活動させた歩き方で畑を進み出した。その姿は底知れぬ力を感じさせ、彼が老いをもともせず生きてることを示唆していた。

この老人相手なら逃亡した方が得策ではないかと思っていた真治だが、完全に心を砕かれてしまった。

老父はその歳にしては走るのが速そうだが、流石に若い真治たちが劣ることはないだろう。それでも真治が恐れたのは、この老人が獲物を狙う獣のような目をしていたからだ。

例え一時的に老父の目につかない場所に避難できたとしても、執

念深い搜索をする彼によつていずれ発見されてしまう気がした。自分たちに安息の地など存在していないのだと強く思った。

真治は仕方なく、老父の背中を見つめながら歩くことにした。老父は逃走される可能性がある筈なのに、一切こちらに振り向きもせず歩き続けた。真治たちが逃げ出すことなどあり得ないだろうという自信の現れのようなだった。

真治の後方に続く千夏はだんまりとし、訝しげな顔で老人と真治を交互に見ている。真治は頻りに背後を確認して千夏と視線が合う都度、取り返しのつかない罪悪感が胸にのし掛かつてくるのを感じた。

あれほど心躍らせ待っていた至福の時間は、本番直前にどう仕様もない不安に駆られ、でもそれは杞憂だったと安心し始めた矢先に予想が的中してしまい、そしてどう仕様もない結末を迎えようとしている。

老父に連れられた場所は、花畑のある丘の先に佇んでいた例の古びた民家だった。葡萄茶の屋根を持つその家は、間近で見ると想像していたのよりもずっと大きく、そして想像以上に廃れていた。

壁には奇妙な痕跡がちらほらと点在していた。何か巨大な爪に引っ搔かれたようであり、何かがかすれたような感じでもあった。破れた雨戸の網が『何本』かこちら側へへしゃげていた。

そのなんとも淋しげな姿は、まるで罪人を迎え入れようとする刑務所の壁のように、絶望的な印象を真治たちに与えた。

老父は鍵など一切使用せずに、やや斜めに傾いていて開けにくそうなぼろぼろの扉を、力一杯に横に滑らせた。その際、扉と溝の部分がこすれ合い、黒板を爪で引っ搔いた時に発生するような独特で不快な音がした。

当然、この状況において耳を手で覆う余裕などなかった。真治と千夏は顔を歪ませて扉の開放を見守るしかなかった。

「そんな拒絶する顔してたって無駄だぞ」老父はようやく真治たちの方に振り返り、勝ち誇ったような不気味な笑みを浮かべた。

「お前らの結末は、お前らの感情とは完全に切り離されたところにあるんだからな。無力なんだよ。足掻いたって何かが変わる訳がない」

「俺らは本当に何も知らなかったんです。許して下さい。それに、花畑にあるものは何ひとつ盗んでもいなければ、盗む気だって微塵もなかった」

「だからよお、それじゃあ駄目なんだ。そう言い出したら、誰も彼もが無実になっちまうだろうが。きりがねえよ」

やはり頑固者は、一度決めたことに一点張りだった。老父の言う通り、真治たちの運命は、真治たちの意思とは別のところに位置しているようだった。

真治は突如として、丘にある巖の上から俯瞰した小さな美海部の模様を思い起こした。どうしてこの場面で、それが頭の中に浮き上がってきたのかは分からなかった。

あそこでは全てが宙に漂っていた。足や手、耳や鼻、脳や臓器、真治の有するもの全てがふわふわと地から離れていった。

ちょっとした微風でも真治はぐらりとふらついた。地に落ちないように、手や足は勿論、臓器や髪の毛に至るまで全身に気を配り、なんとかバランスを保たせた。

真治にとつての浮遊は、一秒でも長く地から足を離しておく為の、無駄を知りながらも行わずにはいられない、儂げな抵抗だった。

老父は真治たちを睨みつけながら、さつさと来いと合図した。

とつさに真治は千夏に視線を移した。千夏も地に足がついていないような臆気な表情をしていた。

「おや、その二人はどうしたの？」

開けっ放しの玄関に突如姿を出した老婦が、柔らかな口調で言った。老婦は白髪やしわの具合から年相応の顔をしているが、どこことな上品な顔立ちをしている。若い頃はさぞや美人だっただろうことが想像できた。

老父が老婦のいる背後に腰を曲げてゆっくりと振り返る。「こい

つら、うちの畑に勝手に入りやがったんだ」

「あらまあ、可哀想に。余所から来たのかしら？ 何も知らないで入ってしまったのね」老婦が目を丸くしながら呟くように言った。

老父は眉間のしわを瞬時に増やす。「いいや、違うな。何も知らないふりをした泥棒に決まってる」

その様子到老婦は呆れたようにため息を零した。老父の先にいる真治たちに視線を定める。

「ごめんなさいね、うちの人はこの通り筋金入りの頑固者でね。この人には私の方からよく言っておくから、あなた達は帰っていいわよ」

「お前は何言つてやがるんだ！」老父が憤怒を露わにして叫んだ。

老婦はどうしたらいいものだろうかと、真治や千夏と視線を繋げた。真治たちはただ、その流麗な瞳を見つめているしかなかった。

そんな空気の張り詰めた場に、スライド式の窓がカタカタカタと開け放たれる音が割り込んできた。一同の視線は、その音がした二階の窓へと瞬時に注がれた。

四角い木の窓枠の中に見覚えのある、ワックスで立たせたブラウンの髪が入り込んできた。そして数秒遅れて、狐のような目を携えた端麗な顔がやってきた。

それは間違いなく、隼人だった。

隼人は玄関前に集まる四人を吊り目で見下ろしたまま、再び窓を閉めた。もう二度とその窓が開くことはなかった。

一同が錆びた窓の扉を呆然と見つめていると、今度は庭に面する比較的錆びてない窓が開かれた。そこから現れた長い黒髪は、午後の窓辺のカーテンのように優雅にふんわりと揺れた。

「あれ、真治君？ どうしてここにいますか？」清花が目をぱちくりとさせながら、ゆっくりと言った。

それは真治の方からも、そっくりそのまま質問したいことだった。

おしろいを塗りたくって完璧に白となった顔に、黒いおかつぱと

紅い唇が生えている。同じく美白に強調された黒い楕円形の枠の中から覗く黒くて綺麗な円は、真治たちを小さく映している。

真治は年代物の棚の上の、埃だらけのケースに入れられた日本人形が、不気味な微笑を浮かべながら自分たちを觀賞している気がしてならなかった。極度の緊張がそんな幻覚を産出しているのかも知れなかったが、今の真治にはそれを判別することは出来ず、そしてどちらでも良いことだった。

千夏と真治が通された和室は、宿の部屋にも負けないくらい和の風趣を取り入れた空間だった。しかし同じ「和」と言っても、あちらが芸術に精通した清澄な「和」なのに対し、こちらは湿り気を多く含んだ生活感の溢れる「和」だった。それは御天神社周辺の山林と五仏坂の山林の違いにもどことなく似ていた。

狭苦しい和室には今現在、畳に直接座る真治と千夏しかおらず、老夫婦や清花の姿は一切ない。あの老人のいきり立った顔や声から一旦解放されたのは喜ばしいことだったが、この沈黙の空間は神経をととても磨耗させるものだった。

清花は真治たちをこの和室に導くと、電球を点けていても薄暗くて寒々しい廊下に速やかに消えていった。その際、清花は「大船に乗ったように寛いでいて下さい」と言った。

それから一時間ほど経つが、誰もこの部屋にやってこない。

そして、真治にとっての不安はそれだけではない。寧ろ、そんなものは重大な問題の発端にしか過ぎない。

何よりも怖いのは、千夏の沈黙だった。

千夏は花畑での時とは全く異なり、一切真治と視線を合わせてこない。目の前の炬燵こたつの上にある煎餅やおかき、ピーナッツなどの方に視線が向けられている。意識までもがそちらに向けられているのかは、測りかねるところだった。

夢現な状態に陥つてるようにも見える千夏に掛ける言葉は、一つしか思いつかなかった。「ごめん、せつかくの散歩だったのに、こんなことになって」

千夏は何かを黙想するようにならずと首を枝垂れさせている。その「沈黙の間」が、真治の心臓を冷たくぎゅっと握り締め、鼓動をより一層激しくさせた。

そして、この重苦しい空気に溶けたようにゆっくりと、千夏の唇が動き始める。「ねえ、真治君はこの花畑に来るの、初めてだよね？」

真治はすぐにその発言の真意を見抜いた。先の「五仏坂に来るのは二度目」という発言に、また猜疑心を抱かれているのだ。

しかし真治は、この花畑の件は押し切れる自信があった。あの中年のカメラマンが実際に来て、そして紹介した場所だからだ。虚構の上に成り立っているものより、実際の経験の上に成り立っているものの方が圧倒的に信憑性が高い。

きつとこれは、あの老人によつて引き起こされた不測の事態だったに違いない。本来は、花畑は入れる場所だったのだ。

真治はそう自分に強く言い聞かせ、千夏の目を真つ直ぐに見つめた。「いいや、これで二度目さ。前に来た時は、あんな人に絡まれたりしなかつただけ……。本当はいけない場所だったのかな。

でも、あの人の勘違いみたいな感じでもあつたなあ」

出任せを吐く真治だが、千夏は彼の瞳だけに焦点を合わせ、そして目を細めた。浅はかな嘘がバレたのではないかと真治は焦る。

「そうだね。あのおばあさんとお姉さんの発言的に、おじいさんひとりの勘違いっぽいもんね」千夏は口元にふんわりと微かな笑みを浮かべた。

「あのお姉さんは確か、真治君の知り合いなんだよね？」

「うん。あの人は清花さん。美海部村出身だけど、大学に通う為に上京していて、四年ぶりに村へ帰省したらしい。嫌みつたらしくてシスコンな弟と一緒に」

「はは、それは酷いなあ」千夏が噴き出した。

「しかしまあ、よくよく思い起こしてみれば、ここが清花さんの実家つてのも納得がいくや。清花さんが花に詳しいらしきことを純さ

んが言つてた気がする。俺が母親と花の話をしてる時に、『清花ちゃんの花に詳しくかつたなあ』とか割り込んできた」

「純さんには昔から、たくさんの花を教えてきましたからね」

いつの間にか開けられた襖のところに清花がいた。彼女の顔には不吉な雰囲気など微塵も漂っていなかった。

「わたしがまだこっちの学校に通つてた頃から純さんは頻りに東京とこっちを往復していて、向こうで恋人を作るたびにわたしの家へ訪ねて来ては、プレゼントにお薦めの花を訊いてきました。相手の男性の好みなどを事細かに教えてもらつて、母と一緒に色々と考えてあげたものです」

へえ、と真治は感心する。「恋人に花を贈るなんて、純さんのイメージからは想像できないですね。凄い意外です」

ふふふ。清花が顔を綻ばせる。「どんな女性でも、恋すれば皆女性なんですよ」

真治は清花の言っていることは理解できたが、素直に納得することができず、首を大きく傾げる。清花はそんな真治を咎めるわけもなく、千夏に視線を移動させる。

「女の子なら分かりますよね？」

千夏もにつこりとしながら頷く。「はい、そういうものですよ」それから二人はお互いを見つめ合い、十秒程の沈黙が続いた。そして二人は再びくすくすと笑いだした。

真治はその沈黙の間がただ無意味に流れたものではなく、何か特殊な意味合いを持ったものではないかと思つた。この二人の間にかが行われたのだ。それは恐らく、女同士の秘密のコミュニケーションだったのかも知れない。

何にしる、男の真治にはそこに入り込む余地などないのだから、非常に辛いものだった。仕方なく、強引に話を進めるしかなかった。「それだけ純さんが清花さんを頼つてたとなると、清花さんが美海部を離れている期間なんかはどうなつてたんですか？ 連絡とか取り合つてたんですか？」

「そこはあれですよ」清花はスキニーパンツのポケットから携帯電話を取り出す。「文明の利器ってやつですよ」

「ああ、なるほど」真治はあまりにも現代的過ぎる解答に、若干肩透かしを食らった。

「とは言っても、あまりメールなどはしませんでしたけどね。純さんは東京に来る時だけわたしにメールをよこしてくるんです。それでどこかのカフェやファミレスなんかでのんびりと話し合っただけです」

「純さんは今回、清花さんが帰ってきてるのを知らないようですよ。メールを送らなかつたんですか？」

清花は手に収まっている携帯電話を小さく揺らす。「ちゃんとメールを送りましたよ。純さんがそれに気付いてなかつただけみたいです。昨日訊いたら、うっかりメールボックスを見忘れていたと言っていました。全く返信がないから、もしやと思ってたら、案の定でした」

確かに純のがさつな性格ならあり得そうだった。携帯電話は自分がメールを送る時しか使わなそうだ。そもそもこんな電波不良でメールをするような年代が殆どいない田舎では、そんな習慣が身につくのも致し方ないことなのかも知れない。

そこで居間に再び沈黙が訪れた。先の内緒の会話とは違い、今度のは本当に話すネタのない、無意味な空白の時間だった。

三人は会議中の会議室にいるかのように黙り込んで、指や目を微動させ、何か「きっかけ」が起きるのを待っている。

それまで全然会話に参加してなかった千夏が、タイミングを見計らったように言った。「わたし達、これからどうなるんですか？まだ五仏坂を散歩してる最中なんです」

それまでマネキンのように固まっていた清花が突然、弾かれるように身を揺さぶった。「あ、はい、すっかりその件を忘れてました。あれは父が勝手に言っただけです。父は部外者が花畑に入るのを快く思っただけです。わたしや母は全然良いと思ってるんですけど」

どね。本当にご迷惑をお掛けしました」

清花がぺこりと頭を下げる。胸元までであった長い黒髪がテーブルで腰を休めている。美海部行き電車の中と同じように、狭い室内に微香が漂った。今日はベビーパウダーだった。

「前に真治君が来た時は、花畑を自由に見て回れたらしいんですけど……」

「きっとそれは、わたしの父が見回りをしていない時間に訪れたからでしょうね。以前花畑を荒らされたことがあって、それ以降の父は過剰に見回りをするようになりました。あんな父ですけど、流石に人間なので、四六時中監視なんて不可能ですからね」

清花の説明を聞き、真治はほっと安堵した。

「でも真治君、いつの間にか花畑に来てたのですか？」

真治は意外な落とし穴に気付き、冷や汗をかき始める。昨日は御天神社で清花たちと出会っており、その後失蹤しているとしても、真治発見の連絡は当然いつているだろうから、失踪の時間内で花畑に行ったと言うのは危険だ。となると、花畑に行ったのは美海部に来た初日とするしかない。

「一昨日、五仏坂を散歩していて辿り着いたんです」

隅に置かれた四角い足の扇風機から送られてくる風が、額に浮かぶ汗を押し潰した。砕けて幾つもの破片になった汗たちは、力を失ったように額からずり落ち、次第に細かくなって消えた。

まるで沈黙を恐れるように、清花は色々な話を始めた。花畑は実は、あの頑固な祖父が丹念込めて作ったものだということ。

清花の両親たちは今は横浜に住んでいて、両親たちも美海部に来る予定だったが、父親に仕事の急用が入ってしまい来れなくなってしまったこと。

道夫たちのところとは昔から家族ぐるみでの付き合いで、清花の祖父と祖母、貞義、悦子の四人は実は年齢は違うが幼なじみであることなど。

同じく沈黙を恐れていた真治だったが、殊の外、興味深い内容だ

ったので退屈しないで済んだ。千夏もにっこりとして話に参加しており、真治は尚更安心した。

一時間くらいが経った頃、出された麦茶を飲み過ぎた所為でトイレに行きたくなつた真治は、話の途中で千夏と清花に断りを入れて席を立つた。

廊下は相変わらず鈍重な空気に抱擁され、寝静まつたようにしんとしていた。すり傷だらけな木の床が軋むギシギシというリズムカ
ルな音だけが、閑静の森の中に響き渡つた。

あの老夫婦もこの家の中にいるのだろうか、一切声は聞こえてこない。二階にでもいるのかも知れない。

トイレを済ませてまた再び無音の廊下に出ると、真治は正面の棚に載つかる熊の彫り物に目がいった。

結構な年代物のようで、荒ぶる海のように大胆で攻撃的な彫り込み方をしていた。激情がそのまま目に見える形となつたようだった。とくに眼光が鋭く、今にもこちらに飛びかかつてきそうな迫力があつた。まさに芸術家の仕事の賜物だった。

しばらく熊の置物を觀賞した後、千夏と清花のいる部屋に戻つた。しかし、部屋には誰もいなかった。

背の低いテーブルの上には、まだかなりの量がある麦茶のペットボトルや口をつけた跡の残るコップ、破れた煎餅やピーナツツの袋がある。談話をしていた時と変わらない風景がそこにはあつた。

ただ、千夏と清花の姿だけが消えていた。

声や匂いと言つた、二人のぬくもりが部屋から抜き取られており、先程まで和気藹々（あいあい）としていたのがまるつきり幻覚だったかのようだ。神隠しの証人にでもなつた気分だった。

庭にでも出ているのだろうか。真治は障子をどけて窓を横に滑らせた。庭は一般家庭にしては少し広い印象を受けた。

幼児向けに作られただろう小さな石段が窓に接する形であつた。庭の端には、魚など住んでいなそうな利休鼠の廃れた池があり、そこから反射してくる混濁した夏日が辺りの草花の上で弾けている。

庭を囲う赤錆の付着した鉄の柵には、シャベルや農業用の縄、鋤すきと言ったものが夏バテしたようにぐったりともたれていた。

まさか、花畑の方に行ったのだろうか。真治は扇風機の電気を入れたまま部屋を後にする。

玄関の靴を確認してみると、千夏の白いシューズはしっかりと残っていた。他にも十足ほど靴があったが、それだけでは誰が外出しているのかは分からなかった。確実なのは、千夏が家の中にいるということだけだった。清花やあの老夫婦も家の中なのだろうか。

玄関から後ろへ振り返った真治の視界に、二階へと続くやけにつやつやとした木製の階段が入り込んできた。ふと隼人が二階から覗いてきたことを思い出した。二階は個人の部屋が連なっているのだろうか。

靴下で上ると階段はつるつるとよく滑り、転げ落ちそうに危なげだった。ギシーギシーと、真治の体重がかかる度に木の床は堪えきれず悲鳴を上げた。家中に響いていそうに、真治は常に緊張していた。

悲鳴が収まり、今度は鈍い足音が鳴り始めると、襖が閉まった二つの部屋と、廊下の先にトイレらしき扉とその隣に襖の開いたタンスだらけの部屋が見えるようになった。

手前の襖の閉まった二つの部屋の内の右の方から誰かの声がした。しっかりと聞き取れた訳ではなかったが、真治はそれが千夏だと瞬時に判断した。

端に十円玉程度の穴が幾つもある襖をゆっくり開けてみると、すぐ目の前に不機嫌そうな顔の隼人が立っていた。

真治と隼人は同時に目が合い、「あっ」と二人揃って声を発した。身長が百八十センチ以上ある隼人は、下にいる真治を蟻でも見るかのような表情で見つめた後、視線をずらして小さく溜め息を漏らした。

「なんだ、頑固爺さんが来たかと思っただけ、ただのマザコンか」隼人が独り言のように言った。

「煩い、シスコン」と真治は言った。

隼人は眉をぴくりとも動かさずに無表情に言う。「俺の部屋に何か用？」

そうだ、と真治は肝を潰した。千夏がいると思って部屋に入ったのに、そこは隼人の部屋だった。隼人の側からすれば、突然勝手に部屋に入ってきた真治を不審に感じるのは当然のことなのだ。

「千夏や清花さんがこの部屋にいるかなって思って」

隼人は首の後ろに右手を添えながら、頭を左右に振った。ぼきぼきと首が音を鳴らした。そして暢気な声で「ふーん」と言った。

「どこにいるか知ってるか？」

「あの女の子、千夏って言うんだ」隼人は満足げにひとりで頷いた。こちらが質問しているのに、どうして隼人が納得しているのだろうか。さっぱり意味が分からなかった。こちらの質問はどこに消えてしまったのだ。

「なあ、千夏はどこにいるんだ？ 知らないのか？」

「そう言えば昨日、神社で千夏を追い掛けて全力疾走してたっけ。滅茶苦茶足遅いなあって思った。かなりの運動不足だろ、あれ」

真治の頭の中で真っ赤な感情がぐつぐつと煮え立ってきた。『千夏』と隼人は言った。喋ったこともなければ、ほんの数秒、遠くから見ただけの少女を平然と、『千夏』と言った。

「おい」と真治は隼人の目を真っ直ぐ睨み付けて言った。

そんな真治の憤りを隼人は感じ取ったようだったが、相も変わらず無言のまま狐の目である。しかし、不動だった眉を僅かに揺らした。

「あれ？ 真治君、よくここが分かったね」

突然、部屋の奥から千夏の声があった。真治は慌ててテーマポールのように佇む隼人を避けて、部屋の中を覗いた。

大きくて分厚い本が幾つも床に広がっており、Wの字に足を折り曲げて座る清花がその内の一冊を開いていて、千夏は彼女の横に立ってその様子を眺めている最中だった。千夏も清花も今は入口にい

る真治の方に視線を向けている。

隼人は真治が二人の存在に気付いたことで、不機嫌そうに顔を歪めて「もう一人増えちまった」と舌を鳴らした。

「隼人、まさかそこで、真治君が部屋に入るのを妨害してたんじゃないでしょうね？」清花が珍しく端整な顔に怒りを浮かべた。

「別に」と隼人は平坦な顔つきで言った。

姉弟の間で不穏な沈黙が流れ始めた。清花は目つきを厳しくして、隼人の目を一直線に見つめている。隼人はそれも耐えられないらしく、微かに視線をずらしている。

「真治君も一緒に見ようよ」

千夏がいたいけな表情で真治を手招きした。そんな脳天気な動作が、気まずい空気をおつと言つ間に取り払った。清花は凜とした顔つきを取り戻し、隼人は小さく息を吐いた。

ほんの少しばかり気が楽になった真治は、部屋の中央へ堂々と歩みはじめる。もう隼人は何も言つてこない。

千夏の隣に立ち、清花が床に広げているものを覗いてみる。それにはたくさん写真がきつちりと整列させられていた。

写真の中には、今よりも大分小さな姿の清花と隼人がいる。どこかの後樂園で撮つたらしく、背後にはアルカイックなメリーゴーランドが写っている。

隼人はやはり可愛げのないつんとした雰囲気だった。とは言つても、今よりは随分と可愛げがあつた。要するに、どこか拗すねた感じがあり、この年齢相応の可愛さがないのだ。断じて反抗期など言つたちやちなものではなく、拗ねているのだ。

逆に清花の雰囲気は意外なものだった。ぶつきらばうに立ちすく竝む隼人の横で、両手でピースサインをしている。鼻筋の通つた繊細な顔つきは、今の面影を充分に残しているが、表情はとても明朗としている。子供特有のいとけない笑顔だ。

真治の頭の中に疑問符が浮上してきた。無邪気なこの頃からどのような人生を歩み、現在のようないき弱な雰囲気に変化したのだろうか

か。やはり、あの我が儘なシスコン弟の面倒を見ている内に、心が磨り減ってしまったのだろうか。

「言い忘れてしまったのめんなさい。目的の写真を彼女に見せたらすぐに部屋に戻る予定だったんですけど、ついつい他の写真にも見入っちゃって」

ぺこりと清花は頭を下ろす。真治は「目的の写真」という言葉が気に掛かった。

「わたしが清花さんに『東京で暮らしてる時の写真を見たい』って言ったなら、『じゃあ、隼人の部屋の押入にアルバムがあるから、見せますよ』ってことになったの」

なるほど。「見せたい写真があるから、ほんのちよつとだけ入れとくれ」と言ってくる姉に渋々了解を出すも、アルバムを次々と部屋の中に広げられ、延々と滞在されてしまった時の隼人の顔が容易に想像できた。

アルバムには清花たちの両親の写真もあった。やはり美男女の子供を持つだけあり、両親とも整った顔をしていた。しかし意外だったのは、隼人の鋭い目は父親譲りかと思えば、実は母親譲りだったことだ。逆に父親は眼鏡が似合っており、知的で家庭的な雰囲気纏っていた。

記憶の一隅から実の父親の姿が沸き上がってくるのを真治は感じた。ずっと一緒に暮らしてきた父親と清花たちの父親のイメージが被ったのだ。別に写真のような整った顔と自分の父親の顔は似ても似つかないものだったが、平面からでも伝わってくる温みが、真治の記憶の一隅をくすぐったのだった。

懐旧の世界に引きずり込まれそうな真治だったが、とっさに道夫の下品極まりない濁声の笑いが聞こえた気がして、半ば強引に現実を意識を帰した。

千夏と清花はそんな出来事になど気付いてない風で、アルバムを囲んで楽しそうに両親の写真を見ている。隼人はだるそうにそんな二人の様子を窺っている。窓は閉められ、贅沢な冷房の唸る音が室

内に充滿している。蝉の鳴き声はない。火照る日差しもない。

その独特な空間は、ひとりで昔の映画のワンシーンを見ているようだった。見えているけど手の届かない、不確かな温もりの存在を感じた。

何だか、淋しくなった。

そうして真治と千夏は、清花たちの家を後にした。去り際に清花と清花の祖母が見送ってくれた。

それまでどこにいたか知れない清花の祖母は、「今度は遠慮なく花畑において」と言ってくれた。しかし真治は、あの老人の憤激した様を強烈に頭に刻み込んでいたので、素直に頷くことができなかった。

何事にも流れというものがあり、そして波がある。それを崩してしまつと、均衡が保てなくなり、波は牙を向く化け物となつて全てを飲み込んでしまう。

この散歩において、花畑はとても重要な波だった。

散歩の核である花畑の地点が、あの体たらくだ。嘘の件についてはうやむやになったようだが、いよいよこの散歩そのものの存続が危ない状態になってきている気がした。

真実に被せた嘘が、既に軋む音を立てているのだ。浅はかなそれが剥がれると、想像したくもない受け入れ難い現実が姿を現すのだろう。

その時が、この恋の終焉なのだろう。

花畑の後は至ってシンプルな下り坂ばかりだった。上り坂のようにくねくねとしていたり、風趣のある色とりどりの木々が並んでいるなどと言った暇つぶしの装飾がある訳でもなく、ただ真つ直ぐに下へと向かう砂利道が続くだけだった。辺り一面もごく普通の木々が立ち並ぶだけで、村を遠望することも叶わない。

味気ない道中で真治と千夏が話すことなど、清花たちのことだけだった。主役の二人にスポットが行かず、その二人を取り巻く脇役

たちばかりが注目されるといふ、どう仕様もなく劣悪な駄作が完成しつつあった。

あまりにばつが悪くて真治はうつむき気味に歩いていたが、千夏が急遽、清花たちのことを話している最中だったというのに、話の軸を曲げた。

「結局、地蔵は発見できてないね。五仏坂の入口にあった地蔵だけで。おかしいなあ。わたし、目を凝らしてかなり細心の注意を払ってたんだよ」

千夏に言われ、真治は忘却の彼方に放置していたサブイベントを思い出した。確かに、五仏坂のゴールがまだまだこれからだったとしても、もう既に相当の距離を進んでいるのだから、そろそろもう一体くらいは姿を現しても良い筈だ。この五仏の道祖神どうそじん的存在の五体の地蔵は、要領よく持ち場を分担できなかったのだろうか？

そんな真治の心配を余所に、千夏は濁りなき清々しい顔で周囲に目線を張り巡らせている。真治はそんな千夏の様子だけをそつと見つめる。

「ここら辺って何となく、地蔵がありそうな雰囲気だよね。この鬱蒼とした感じの風景、地蔵が映えそう」

「確かに、花畑みたいな明る過ぎる場所よりは、こんなじめじめとした場所の方が似合ってるかもな。どうせなら、まとめて後四体あってくれると助かるんだけど」

「でもそれって、ちよつと嫌だなあ」千夏が瞼を下ろしてぽつりと言った。

「あまりにも呆気なさ過ぎて？」

「ううん、違う」首を横に振りながら、森林に染み込ませるように千夏はそつと言った。

「じゃあ、どうして？」

「だって、それじゃあ入口の地蔵が可哀想だもん。あの地蔵がひとりで頑張ってるのに、みんなは寄り添って楽しそうにしてるんだよ？ 理不尽で仕様がなないじゃん」

なるほど、あの地蔵が真の孤独になってしまつから、か。自分の中になかつた新鮮な発想に真治は息を呑む。

皆が各々、ひとりになって仕事をしていれば、大した孤独感など生じないだろう。どこかで鼻肩が行われていて、尚且つそれを知つてしまつたから不幸になるのだ。

真治は自分が中学生だつた頃を黙想する。一年生から二年生に進級した時、真治を含めた強い絆で結ばれた五人組の仲良しグループは、全員がばらばらに違うクラスへ振り分けられてしまった。

運がないなと友人たちや真治は愚痴つていたが、結局それぞれが新しい環境に適応し、一年間を過ごした。

問題は二年生から三年生になつた時だ。真治が二年生で親交を深めた友人たちが全員、真治とは違うクラスに固まつた。更に泣き面に鉢とでも言うかのように、一年生の時の友人たちまでもがそのクラスに集結した。

二年生の時は我慢ができたというのに、三年生の真治はとても落ち込んでしまった。自分だけが至福の環から切り離されてしまったような気がして、心底寂しくなつた。

それでも真治は二年生の時と同じように、新たな環境で新たな出逢いを経験し、三年生の生活を満喫した。

帰するところ、どれほど辛辣なことがあつても人間の心の痛みは、絶対的な「時の流れ」によって洗い流されてしまふのだ。それは人間の無情さでもあれば、強さでもあると今の真治は考えている。

でもあの地蔵にそれはあるのだろうか。あの地蔵に新たな出逢いや、心痛を払つてくれる手段はあるのだろうか。想像するだけで胸が痛くなる。

もし他の四体が一カ所に集まっていたら、入口の地蔵が可哀想だ。千夏がそこまで深慮して発言したのかは分かりかねるが、彼女の優しさがその発言に包容されていたのは間違いがなかつた。

ふと空を仰げば、先程まであれだけ身体を焦がそうと気合いの入つていた太陽はどこにも見当たらなかつた。濁つた雲の大河だけが

そこにはあり、真治たちのいる山に薄暗い不安を落としていた。

このまま沈黙に身を任せていては、憂鬱な影に二人が呑み込まれてしまいそうだった。例え確信がなくても、ここでしっかりと自信を漲らせて千夏に言うしかないと思った。

「大丈夫」真治はそつと囁くように、しかしはつきりと言った。「きつとみんな、自分の役割を精一杯に全うしているよ」

大空に充満する灰色の隙間に明るい希望の兆しを発見したように、千夏は堅い表情を徐々に緩めた。「そうかな」

「うん」

「そうだよね」

「さあ、早く他のみんなも探しに行こう」

「うん」千夏ははじけるような笑顔で頷いた。

結局、物語のように都合よく、見事な晴天が真治たちを祝福してくれるなどと言ったことはなかったが、二人の間にはかつてない温かな空気が生まれていた。

夏の光を散々ばら撒いていた空が瞬く間に曇に覆われてしまったのを見て、純は後少しで雨が降ってくるだろうなと心配になってきた。宿を出る時はすこぶる快晴で、眩しい程の青空が広がっていたのだから、どうしてこんな天気急変を予想して傘などを用意しているだろうか。

何より、五仏を歩く自分の後ろを木陰に身を潜めながら、こそこそ追跡してくる小さな二つの影も十分な不安要素だった。彼らだつて傘は持ち歩いていないだろうから、雨でずぶ濡れになって風邪を引かせてしまった、などと言うことは絶対にあってはならない。

ならば端から純が五仏に行かなければ万事上手く解決する、と言うわけにもいかなかった。何故なら、真治たちの行方を見届ける義務を自分は課せられてると思っ込んでいるからだ。

東京で購入した洒落たゴールドの腕時計を見やる。五仏に入ってから約十五分。純はある些細なことに気付いた。

「そう言えば、この付近に清花ちゃんの家があるんだから、そこで傘を借りれば良いんだよね。多分、真治君たちは花畑で結構な時間を費やすだろうし、運が良ければまだのんびり滞在してるかも。そうと決まれば、五仏様のところを経由して清花ちゃんの家に行きよう」

丁寧な説明を純はわざと大声で言った。背後ではどたばたと駆ける二つの音があつたが、純は決して振り向かず、さも何事もなかつたかのように歩み続ける。

しばらく純と彼女を追跡する二つの影は五仏のなだらかな坂を上つた。清花の家まで後十分くらいで着くだろうという頃、純の前方およそ二百メートルほど先に見覚えのある二つの人影が現れた。

二つの影は純の存在に気付いてないようで、そのまま横の狭い林道へと入っていった。今すぐにも追い掛けたいが、傘の件で清花の家にも行かなければならないので純は悩んだ。

清花の家まで後十分ばかり。頑張つて走れば、十五分ほど戻つてくれるだろうか。しかし、後ろの子供たちがそれに付いてこれる訳がない。この場に残つてると指示する訳にもいかない。

結局、純は早歩きで清花の家の方向へ進むことにした。あの二人が亀のようにのんびりと散歩してくれるのを祈るしか術はなかった。

久しぶりに見たが、やはり花畑は頭の中に残っていたイメージと殆ど変わらず、鮮やかな色で埋め尽くされていた。

そう言えば前に、この花を内緒で何本か拝借したらあの爺さん、とち狂つたように怒りだして大変だつたって、後で清花ちゃんが言つてたっけ。純は呑気に昔を懐かしんだ。

そして今頃、子供たちはあの花畑の中に一生懸命隠れてるんじゃないかなと、どこか可笑しくなつた。そもそも子供たちにとってこの花畑は初めてなのだから、もしかしたら追跡などそっこのけで感動してる最中かも知れない。

あつちの二人も同様だつたかも知れない。色々想像を膨らませ

てみると、実に楽しい。

純は愉快的な気分になんて鼻歌を奏でながら、玄関に設けられた傷だらけのボタンを押してみる。家内で鈍重なチャイム音が響き渡るのが微かに聞こえてきた。

それから誰かが木の廊下を小走りしてきて、靴置き場で靴を履く姿が分厚いガラス越しに見えた。人影はガラスの中に溶け込むように全身がグニャグニャに広がり、カチツと鍵を捻る音がした。

ガラスの扉が重そうに横に滑ると、呆然とした表情の清花が現れた。胸元が大きく開いたシフォンのタンクトップに、太ももを思う存分露出したフリルのショートパンツという格好をしていた。

「わおっ」純が呆気にとられながら言った。

「あつ、えつと、これは……」清花が恥ずかしそうに頬を紅潮させる。

純の顔から慌てて視線を外すと、瞬く間に玄関の扉を閉めてしまった。

しかし、純が扉と溝の隙間に素早くサンダルの足を割り込ませていた。手を扉の隙間に入れて無理やりこじ開けようとし始める。清花も最初は力づくで扉を閉めようとしたが、純に適わないと判断したのか、早々と諦めてしまった。

再び玄関の扉が勢いよくピシヤリと開かれると、清花は申し訳なさそうに純に頭を下げた。

「ごめん、足大丈夫？」

「大丈夫大丈夫。別にいいよ」

「こんなみつともない格好を見せちゃったのも、ごめん」

呆けた表情のまま純は首を横に振る。「いや、清花ちゃんだって家の中ではリラックスしたいだろうし……ね？」

「うん、まあ、そう言うことなの」清花がたどたどしく頷く。

「でも、あたしはそういう格好、良いと思うよ。清花ちゃんもモデルみたいに細くて背が高いのに、いつも控え目で地味な服ばかり着てたし、もっと大胆な格好をしても良いのになあって前から思っ

だから」

「そう言って頂けると恐縮です」

「いえいえ」

鼠色に染まった空を純はちらりと見る。「ねえ、この調子だと大雨が来そうだよな?」

清花も空の様子を窺う。「そうだね。これは早い内から雷雨が来そうだね」

純は辺りを用心深く見回した。花畑や清花の背後の家の中まで、徹底して人がいないのを確認するように振る舞った。

「実はね、あたし、ある秘密裏なミッションの最中なの」

「秘密裏なミッション?」

「そう、トップシークレットなの。こればかりは清花ちゃんでも教えられないんだ、ごめんね」

「トップシークレットなのは分かったけど、どうしてわたしにその話を? これじゃあ秘密になってないよね」

「秘密になってるか否かなんて、そこは正直どうでもいいの。重大なのは、至急、傘が欲しいってことなの。実はある二人組を追跡しててね、でも雨が降ってきたらそれが困難になりそうなの」

「ある二人組って、真治君たちのことだよな?」

清花に訊かれ、純は苦虫を噛み潰したような表情になる。「それはシークレット。言える訳ないでしょ」

「まあ、別にそれは良いとして。傘くらいならいつでも貸すよ」

清花はそう言うつとすぐに、玄関脇の傘入れからピンク色の傘を取り出し、純に手渡す。

「ありがとう、流石。清花ちゃん大好き!」

傘を同じく両手で丁寧に受け取ると、純は清花に抱きつく。清花も不快な顔はせず純に抱かれた。純がふと耳元で囁く。

「悪いけど、わたしをストーキングしてる、愛おしい子供たちの分も借りれるかな?」

「子供たち?」清花も囁く。

「そうそう。清花ちゃんが上京する前は今よりもうんと小さかったから、多分覚えてないと思うんだけど、達哉と千夏だよ」

完璧に思い出せないが全く覚えがない訳でもないと言う風に、清花は敵かなのか惚けているのか分からない曖昧な表情をした。しばらく黙想を続けてから、胸のつつかえが取れたように口元を緩めた。「それって、ヨネおばあちゃんのところの二人？」

「うん、大正解。いつも赤と青の服着てるやんちゃん二人」

「懐かしい」と清花は感慨深そうに呟いた。「もしかして、未だに赤と青の服着てたりするの？」

「うん、まだあの二人、赤と青の服着てるの」純はどこか可笑しそうに声を低めた。

「へえー、未だに着てるなんて意外……。あ、とにかく、あの子たちがこの付近にいるんだね？」

「そうそう、風邪引かせる訳にいかないしさ、傘を更に二つ貸してくれる？」

「それは勿論。でも、真治君たちを純さんが尾行して、その純さんを子供たちが尾行してる。不思議な感じだね」

「まあね」と純は頷いた。

「ここ数日、他にも幾つか偶発的なことが重なってる。これは奇縁ってやつかも知れないね」

「奇縁、かあ。確かに」

あながち嘘ではないなあと思つた。純と仲のいい清花たちと真治たち一家が電車の中で鉢合わせたことから始まり、御天神社で妖精と出会い、そして真治と妖精がデートをし、この現状に繋がった。果たしてこれを何かの縁と言わず、偶然として片付けて良いのだろうか。

まだまだ喋りたいことは沢山あつたが、そろそろ追い掛けなければ真治たちを見失つてしまいそうなので、純が家を後にしようとした時だった。清花がふと思ひ出したように言った。

「そう言えば、純さんに頼まれたCD、どうする？」

「ヴァンプアイアのCD、今あるの？」純は立ち止まって目を輝かせた。

「うん、今度下北沢でお茶した時にでも渡そうかと思ってたけど、それじゃあいつになるか分からないし。せっかく帰省するんだからって持ってきてちゃった」

「さすが清花ちゃん！」純は再び清花に抱きついた。

「本当にありがとうね。近頃、なかなか東京の方に行けなくなってきたあのCD、初回生産限定版だったから、かなり購入するの大変だったでしょ？」

「うん。ヴァンプアイアの新譜、凄い人気で、わたしの周りのCDシヨップはみんな予約段階で品切れになっちゃってた。隼人が友達に調べてもらって、ようやく見つかったんだよ」

「あの隼人が？　どういう風の吹き回しかは知らないけど、後でお礼を言わないとね」

「本当は昨日、神社で出会った時に渡しとけば良かったんだろうけど、状況が状況だったからね。また渡しそびれたら嫌だし、今CD持ってきてちゃうね」

「買ったといてくれたのは嬉しいけど、今は真治君たちを追わないといけないし、また今度会った時にでもCDを渡してくれればいいよ、と言おうとした純だったが、清花が先に行動を開始してしまった。

玄関から階段を駆け上る清花の姿が見えた。シフォンのタンクトップは背中も大きく削り取られており、清花の下着が僅かにはみ出していた。

なんだかなあと思い、純は人知れずため息をついた。

五分ほど経ったが、清花はまだ階段を下りてこない。あまりのんびりしていると、真治と妖精を見失ってしまう。純は壁に寄りかかり、サンダルをつま先でとんとんと玄関の段差の部分を押いた。

不意に誰かが階段を下りてくる音が耳に届いた。とっさに視線を向けると、気だるそうな表情の隼人がそこにいた。

「やあ」と純は遠慮なしに手を挙げた。

隼人は階段を下りたところで立ち止まり、唇を窄めて口元に深いしわを作った。まるで全てにうんざりしているようなしかめっ面だった。

「いやあ、なるほどね。随分と粋な計らいをしてくれるじゃん」純は腕を組んだまま、嬉々とした声で言った。

更に瞳が見えなくなるくらいに目を細め、隼人は面倒くさそうに言った。「粋な計らい？」

「分かっている癖に。憎いねえ。清花ちゃんじゃなくてあんたが、ブツを渡してくれるとはね」

「はあ？」と不躰に隼人が言った。

純は胸がむかむかする感じを覚えた。隼人の態度にも少し苛立ったが、何よりも伝えてることが伝わらずに、会話のキャッチボールが成り立たないむずがゆさがそうさせていた。

「ヴァンパイアのCDだって」もどかしさを吹き飛ばすように純は語調を強めて言い放った。「あたしが清花ちゃんに頼んで、あんたが一肌脱いで見つけてきてくれたやつ」

「ああ」と隼人は合点がいったように頷いた。「あれはただ単に、俺が欲しくて探してただけだって。清花が同じCD探してたの思っ出して、ついでに買っただけ」

見下ろすように眼前に立つ長身の少年を睨みつけながら、純は唇を窄める。どう仕様もなく生意気なところは相変わらずだなと再確認する。

「偶然でもついででも別にいいよ。結局、気持ちの問題じゃなくて、結果の問題なんだからさ」

口角を吊り上げ、猫なで声を更に甘くして、純はできうる限りの満面の笑みを顔に浮かべた。それを見るや否や、毅然としないように隼人の顔が歪んだ。

「ありがとう隼人、とっても嬉しい」

サンダルを脱ぎ捨て、純は家に入り込む。隼人は危険を察知し、

すぐさま踵を返し始めるが、もう遅かった。

純は小さく跳ね、隼人の首にぶら下がった。隼人は声を出さなかったが、必死に首に回された腕を解こうともがいた。じたばたした後、踏ん張っていた足が悲鳴を上げ、そのまま後ろ向きに倒れた。純は凄まじい反応で隼人から離れて難を回避した。

ひとり尻餅をついている隼人を見下ろしながら、純は得意げに言った。「全く生意気なんだから。あたしに楯突こうなんて、まだまだ早いよ」

隼人はただ無言で苦虫を噛み潰したような顔をしていた。そこに階段の方から足音が届いた。純がそちらに視線を移すと、清花が階段から下りてくるところだった。

「あれ？ 隼人、何やってるの」清花が尋ねた。

「隼人ったら、あたしのことが大好きなんだって。あたし、東京に彼氏いるのに困っちゃうなあ」純が代理で答えた。

「あらまあ、初耳」と清花はクスクス笑った。

終始、隼人は胡座あぐらをかいたまま、腕を組んで下を向いていた。純が意地悪な微笑を浮かべながら、何度もそれを覗こうとしたが、隼人はその度に顔の角度を変えて交わした。

清花たちと別れた後、純は心持ち速めに歩を進めて真治たちを追跡しはじめた。辺りは既に灰色の影に呑み込まれており、どこか遠方で雷光が瞬いたかと思えば、数秒後には轟音が響いた。

そう言えばこちら側にも雨や雷がきたら、真治君たちはどうしよう。急にそんなことを思ったのと同時に、良からぬことが起きそうな予感が頭の中をよぎった。雨ざらしなんかよりもずっと残酷で冷たい何か、この朗らかなデートの先にひっそりと身を潜めていて早く餌がやってこないかと待ちぼうけているのではないかと。連動していとけない二人も気になり始めたが、今は自分の背後にいるので、真治たちを追うのに集中することにした。

どんよりとした雲の海に身を沈めた空が心配になってきた。永遠

に海面に上がってきそうもないくらいに、闇は深々と五仏に満ちていた。しかし、ほんの少し油断しただけでバランスを失って落ちてくるような儚さもあつた。

この迷惑な暗雲の下どこかに真治たちもいるのだろう。彼らも同じ風景を見ているのだろうか。純は真治たちにささやかな祈りを送った。どうかこの闇が二人に落ちてきませんように、と。

真治たちが入っていったのは、五仏堂に通じる脇道だった。五仏様以外には特に見所のない退屈な場所だ。五仏様に拝んだ後はそのまま道なりに進み、五仏を出るのだろう。

五仏に入ったら先ず、五仏様に散歩の無事を祈り、花畑に行つてまた来た道を戻り、五仏様に散歩の無事を感じて五仏を去る、これが通常のルートだ。先程見た真治たちは、恐らく帰り際だったのだろう。

そうになると、もうあの二人は五仏を後にしてしまつたかも知れない。それはとどのつまり、あの二人のデートが終了してしまつたことだ。これでは、わざわざあの二人の恋路を見守りにきた自分の意義がなくなってしまう。悦子の目を逃れ、子供たちを相手にしながら五仏坂を登ってきたのが、ただの時間の浪費で終わってしまうのではないか。

万が一にもあの二人が逆走をしてきた場合はすぐに隠れられるように、辺りの木々の配置を意識しながら純は早足で進み続けた。そろそろ五仏堂に着くだろうという頃には、純の警戒心は最高点に達していた。目を精一杯に見開き、どんな小さな音でも拾えるように耳をそばだてた。

木々の隙間に焼け焦げたような色をした五仏堂の屋根が現れた。純はもう数歩進み、五仏堂の周囲が見渡せる場所を探し当てる。辺りを注意して観察する。人っ子一人いない。

五仏の出口へと通じる道にも目線を寄越すが、あの二人の姿はない。もしかやと思い、自分の現在地に通じる道も確認してみるが、やはりいない。

時既に遅しで、清花のところでのんびりしている間に、五仏を出られてしまったのだろうか。話し込んだり隼人をからかっていた時の自分を心底憎たらしく思い、手のひらに爪を食い込ませた。

その時だった。五仏堂の入口から二つの影が現れた。純は慌てて木陰に身を隠し、そっと五仏堂の方を覗いてみる。二人の人間が何をしてもなく、ずっと向き合っている。真治と妖精だ。

どうして嘘をついたの？

澄み切った透明感ある声が出た。声を一度も聞いたことはなかったが、妖精のものだとすぐに判った。あの靈妙な雰囲気にとっても似合いそうだった。

ごめん。

とても情けない真治の声が出た。

何が、五つの仏が散らばってる坂、なのよ。

澄んだ声に赤黒いものが混じっていた。それでも尚美しいと感じてしまう自分に、純は困惑した。

ごめん。

また真治の声は謝った。あまりにもか弱く、今すぐに消え入ってしまいそうだった。

でも、悪気があった訳じゃないんだ。千夏を少しでも喜ばせられれ

うるさい、もう何も喋らないで！

そう言つと、妖精は細い腕を思い切り振り、真治の頬に平手を叩きつけた。

瘦躯が外にひねられ、細い腕がたわむ。瘦躯が元に戻ろうと逆に動き始める。僅かに遅れて腕が弧を描く。そして手は、その線にある目標物をしっかりと退ける。あまりにも完璧な平手打ちだった。妖精のできる限りで最高のものだっただろう。

素晴らしく痛そうな、玲瓏たる音が響く。真治の首が、妖精の腕の回転に合わせて曲がる。見事なことに、真治の体も首に合わせて曲がる。バランスを崩し、足が地面から離れ、そのまま転倒する。

魂が抜けたように地面に膝をついたままの真治に近付き、妖精は見下ろす。そこで彼女が何かを喋っていたが、声が小さくてよく聞き取れなかった。だがすぐに大声を出した。

もう二度と、わたしのいる森や川原に来ないで！

冷罵を浴びせると、妖精は五仏の出口に向かって走り去ってしまった。ピンク色の服がとても優雅に揺れる、これまた見事な走り方だった。

真治はと言えば、頭を抱えたまま、見窄らしく地にうずくまっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5924e/>

妖精と夏休み

2010年10月12日06時22分発行